

---

# Farce of the Creators

ログ核人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Farce of the Creators

### 【Nコード】

N1027C

### 【作者名】

ログ核人

### 【あらすじ】

各々が心に懐く《一つの約束》が導く、約束の物語。【不定期更

新】

【序】第零章：零節 ～忘却の地より～

[Farce of the Creators]

第一部【序：管理された世界の】

【世界をほんろつする神々の悪意から解放を】

統一された言語をもちいてもなお言の葉は不完全であり、個を証明するには至らない。

だが、それがゆえに温もりを感じる喜びは、何にも代え難い尊いモノでありうる。

無

2

いずれ真実がわれわれを自由にしてくれるだろう。

しかし、自由は冷たく、うつろで、人をおびえさせる。

嘘はしばしば暖かく、美しい。

ジョージ・R・R・マーティン著

「龍と十字架の道（風見潤訳）」に収録「サンド

キングス」より抜粋

第零章 ～忘却の地より～

砂嵐が残虐に吹き荒び、命の生存を拒む、その場所に

忘れ去られた遺跡を思わせる、石造建築の、古びた聖堂があった。死が隣人たるこの場所において、そのおごそかなたたずまいは、見やる者に“ひとつの希望”を懐かせる。

砂嵐の残虐さが支配する外部とは対照的に、聖堂の内部は静寂さに支配されていた。奥行きのある閉塞的な聖堂内にあるのは、忘却され使われないトンネルとも似た、恐怖とも畏怖とも畏敬とも似たモノを懐かせる、異様な静寂さだった。

聖堂の縦軸をなす身廊には、正面の祭壇に向かって木製の長椅子が並べられていた。床の大理石は鏡のように磨かれており、そこに真逆の世界を映し出している。

区別する境界線のような数段高くとられた内陣に、祭壇はあった。そしてそこには

ひとりの、美しい女性が祀られていた。

絹のように滑らかな乳白色の肌を、しかし隠すべき衣服はない。だがその艶かしい身体は、直視するにはあまりにも痛々しかった。

聖堂の端々から伸びた粗暴な鎖が、その細くしなやかな肢体をまるで十字架のような姿に拘束している。そして、芸術家が究極を求めて造形したような、奇跡的な曲線美を描く乳房の間に、なんら容赦なく存在する、一振りの剣。

皮膚を裂き、肉を破り、心臓を貫き、その剣は切っ先を彼女の背から覗かせていた。

そんな凄惨な姿でありながら、しかし彼女は一滴たりとも血を流してはいなかった。

この光景に哀美を懐いてしまうのは、なぜだろうか。

祭壇の背後、聖堂のもっとも奥まったところに、大きな光の壁があった。それは言葉ではなく絵で“ある物語”を伝えるために造られた、色彩様々なガラスを組み合わせて造られた、大きな装飾窓だった。

大きな装飾窓から射す光は、聖堂の内部を照らし、そして影を生む。

影は祭壇の女性の美しさと痛々しさを、より幻想的に演出した。

彼女の影の内側、祭壇の前に、もうひとつヒトのカタチをした影があった。

それは影と区別できないほど黒尽くめな、ひとりの人物そのモノだった。

足元まである、黒のフード付きロングコート。黒のブーツ。黒の革手袋。そして目元を覆い隠す、黒の目隠し。身を隠す役割のモノはすべて、黒。徹底したそれは、まるで“光”との決別を“表明／体現”しているようであった。

けれどそれとは対照的に、背中にたらしめてある長い髪は白かった。光のような、空白のような、絶対的な、純粋な、白。しかし黒尽くめな身なりの中にあつてその白は、ある種の異様さという存在感を持つてそこにあつた。

不意に。

この場を支配する静寂が、聖堂の木製扉を開け放つ音によって破られた。

唸る砂塵と射光と共に外部から闖入してきた影が、大理石の床を這うように動く。足音が、高い天井にこだまする。

なにか意を持って歩み行くその闖入者もまた、黒尽くめだった。ロングコートに付いたフードを被っているので、さらに黒い。

と、闖入者は軽く両の手を振り下ろした。その次瞬、コートの袖から銀色のモノが滑り出てきて、静かに両の手の内へ納まった。

それは近年実用化された、引き金を引くだけで連続射撃が可能な“半自動拳銃”だった。手の平に隠れるほどの大きさで、あるいは子どもの手による殺傷をも容易にしかねない最新の兵器である。

銃が手に握られてから四歩目の足音と同時に、乾いた発破音が聖堂内に響いた。

乱暴に鼓膜を叩き、響く。

立て続けに、暴力は響く。

それは容赦なく、祭壇の前にたたずむ黒の人物を狙っていた。

唐突に。

暴力は残響の尾を残し、止む。

合わせるかのように、聖堂の扉が勢いよく閉まった。

大理石の床に真鍮製の空薬莖が跳ねる軽い音だけが、最後に、

聖堂内に響いた。

呼吸音が聞こえそうな静寂が、聖堂の内部を再び支配する。

祭壇の前にたたずむ黒の人物は、ゆっくりと振り返り、

「しばらくぶりだね、ケセド」

目前で不可解に空中停止している弾丸は気にも留めず、親しい友人と話す口調で言う。少年のような、けれど枯れた老人のようでもある声の色だった。

ケセドと呼ばれた闖入者は、

「なぜ、なぜ“あのようなこと”をしたのです。ケテル」

静かな怒気と愁いを秘めた、聖母のような澄んだ声音で問うた。

「その名は捨てたんだ。いまはエノクと名乗っている。まあ、名を名乗る機会なんてないのだけれどね」

自嘲めいた微笑を口元に浮かべて黒の人物、エノクは応えた。

「答えなさい。なぜ同志を、ゲヴラーを殺したのです」

ケセドは右手を突き出し、死を生む暗闇なる銃口をエノクへ向ける。

「……………死んだ、のか？」

意外なことを聞いたふうに、エノクは呆けて答えた。

「なにを！」

瞬間、ケセドの銃を持つ手に力がこもり、ちよつとした衝撃を与えるだけで撃鉄が下りてしまうほど引き金が絞られた。

「わからないんだ。なぜ“そんなこと”になったのか。そして“これから”どうなるのか」

そんなエノクの言葉に、ケテルは怪訝そうな表情を見せ、

「あなたは、なにを言って」

抗議する口調で言おうとして、けれど、

「あなたは、なにを知っているのです」

なにかを“悟った／察した”ふうに、そう問うた。そして手から力を抜き、銃口をエノクから外す。

しかしエノクは諦めたヒトのように横に首を振り、

「でも」

と転じて穏やかで嬉しそうな声色で述べた。

「ひとつだけ、わかったことがある」

「なにを、です？」

「未来が見えないというのは、自由でいいね」

【序】第一章：一節　く後悔、先に立たずく

結

いま、ここに居るということを知るために

第一章　く後悔、先に立たずく

定期的な魔物狩りという仕事を終えた帰路の途中で、

「ん？」

不意に、彼女は歩みを止めた。

「どうしたのですかあ？」

不思議そうに、彼女の相棒は訊いた。

「なにか、聞こえないか？」

そんな彼女の答えに、しかし相棒は疑問顔で小首を傾げる。

「なにか、うめき声のような……」

よほど聞こえたことに確信があるのか、彼女は探るように周囲を見回す。

彼女の現在位置は、ちょうど道が分岐しているところだった。街道と呼ばれている西への道と、旧街道と呼ばれている南東への道がある。ちなみにいままで彼女が歩いてきた東からの“整備された石畳の道”が続いてゆくのは、“西への道／旧街道”である。

「こつち、か？」

気配は“南東への道／旧街道”のほうからするように思えた。だから彼女は、そちらへ進んでいった。



迷いもためらいもない自分に、彼女は少々の疑問を覚えた。が、しかし歩みが止まることはなかった。

ほどなくして彼女は、道端に横たわるひとりらしき影を発見した。最初は魔物に襲われた哀れな旅商人かと思っただけだが、近寄るにつれ、それが軽装備の剣士であることがわかった。手には抜き身の剣、打刀と呼ばれる“東の島国ジパング”独特の剣が握られ、身には籠手以外の防具はなく、自信過剰でやられたのかと思いきや、これといった外傷はなかった。

ただ、苦しみに表情を歪ますひとりの男がいた。

薄れゆく意識の中で彼が感じたのは、強い不安感だった。けれどなぜ“それ”を感じるのか、彼にはわからなかった。そして“わからない”ことが、“それ”をよりいっそう強くする。

彼は足元から這い上がってくる粘着質の“それ”から逃れるように、あるいは振り払うように、身を動かそうとした。

「っ」

しかし根の深い痛みが、頭の中の脳が悲鳴のような軋みを上げてそれを妨げる。

それでも彼は、“それ”に抗おうと試みた。胸の内で渦巻く恐怖心が原動力となって、そうさせるのだ。

彼は振り絞るように、最大限の抵抗として苦悶の声を漏らした。

だが“それ”はとても強大で、ついに彼は“それ”に囚われ不意に、“誰かノ温もり”にそっと優しく頭をなでられた。

すると次瞬、ドロドロと全身を這い回っていた“それ”の気配が消えた。

ふと訪れた解放感と安心感に、彼はすがりつくように身心をゆだねた

歪む思考が認識するその場所は、特徴のない平原。

そよ風の中にあるのは、たたずむふたりのシルエット。

変化のない、時の流れ。

地平の彼方から日が昇り、落ちてゆく。繰り返し。繰り返し。変化のない繰り返しに、しかし不満はなかった。

愛しい者と、その“時”を共有しているから。

世界が、暗闇に染まった。

ロウソクの灯りを吹き消すように、世界は暗闇に染まった。

文字盤と針だけの時計が、暗闇の中から浮き上がるように現れた。時を刻む、その音はとても心地よく聞こえた。しばし、聴き入った。

不意に、嫌な胸騒ぎがした。

それは次に起こることへの、確信だった。

時を刻む、その音が止んだ。

時計が、動かなくなつた。

どうしようもない喪失感に、囚われた。

そして彼は、薄く眼を開く。

ぼんやりと、『井』の字を連ねたようなマス目状のモノが見えた。

「……………」

そのまましばし、彼は『井』の字を眺める。まるでそこに“求める答え”があるかのごとく、そして“求める答え”それ自体の正体を見極めんとするがごとく、じいと眺める。

観察の結果、どうやら『井』の字は、木材を組んで造られた建築物の天井であるらしいことがわかった。

そこで彼は、自身が横になつていることに気が付いた。それと同じに、いままで自分は寝ていたらしいことを知る。

眠りから覚めたとき特有の気だるさは、まったくなかった。だから自分が寝ていたらしいことにいまいち確信が持てないのだが、あるいはこれを“爽やかな目覚め”と呼ぶのかもしれない、と彼は思った。

ふと、なにかとても“重大／重要”なことがあつた気がした。

が、しかし気がするだけだった。

そんなことより、と彼は上体を起こした。

「っ！」

顔の正面、目と鼻の先に、小さなヒトが浮かんでいた。

肩口で綺麗に切りそろえられた黒髪に、薄緑色のくりくりとした愛らしい瞳を持ち、小さな鳥ほどの身体に紫の衣をまとい、背中にはエメラルドグリーンの淡い光の翼がある。この淡い光の翼は羽ばたく必要なく浮く力を与えるらしく、小さなヒトは羽ばたくことなく空中にいた。

急に彼の顔が迫ってきたことに驚いたのか、小さなヒトはビクッと身を震わせたあと、目を見開いたまま動かなくなってしまった。そしてなぜだか徐々に、浮かぶ高度が下がってゆく。

「ハッ！」

目をパチクリして驚きから覚めた小さなヒトは、彼の目と鼻の先まで上昇して戻ると、その愛らしい瞳で彼の顔をじいと凝視する。

「……………」

いろいろと理解が追いつかず、彼は停止した。

「じい」

「……………」

しばし無言の時を消費して、やっと彼はなにか言おうと思ひ至り、そして言葉を発しようとした、まさにそのとき

小さなヒトは、ふいと身をひるがえして、半開きの扉から退室してしまった。声をかける間もなく、速やかに。

……………なんだったのだろう？ と彼はあっ気にとられつつ、疑問に首を傾げた。首を傾げたついでに、彼は自身がベッドの上にあることを認識した。そこから生じる次なる疑問に、彼は眉をひそめた。

なぜ自分は、ベッドの上にあるのか？

それについて彼が思考を巡らせようとしたところ、不意に足音が聞こえてきた。

コツコツと木造の床を踏む音は、次第に近く鳴る。そしてそれは、ぴたりと半開きの扉のところまで止む。

次瞬。

ノックもためらいもなく開かれた扉の前には、白銀の胸当てを着けた、黒の長い髪の若い女性がいた。腰の右には、細身の剣を吊っている。

彼女は意志の強そうな、しかし決して威圧的ではない夜色の瞳で彼を見やったあと、無言のまま窓際へ移動し、閉まっていたカーテンを開放する。

窓から射した光が、室内を夕焼け色に照らす。

黒髪の若い女性を目で追っていた彼は、いきなりの光に目を射され、まぶしそう目を細めて顔をそむけた。実際、とてもまぶしかった。

「どこか痛むのか？」

いつの間にかベッド脇のイスに腰掛けていた黒髪の若い女性は、そう言って気遣わしげな眼差しを彼に向ける。

それに対して返答しようとした彼は、

「……………」

しかし言葉を失った。

美しかったのだ。間近に居る彼女が。なにより、その夜色の瞳が。

「……………」

なぜか自分を見たときたん動きを止めた彼を、黒髪の若い女性は怪訝そうに見やり、

「なあ、おい、大丈夫か？」

のぞきこむように顔を近づけ、“様子／容体”をうかがう。

吸い込まれるように見とれていた彼は、

「えっ？」

高い所から落ちたような感覚と共に現実へ引き戻り、

「ああ、うん、大丈夫。……たぶん」

そう答えて、けれど再び顔をそむけた。思いのほか近くに彼女の

顔があつて、それを意識してしまつて、どうにも恥ずかしかつたのだ。

「……そうか」

安堵と心配が半々な表情で、しかし努めて素っ気なく彼女は言った。

それから彼女は姿勢を正し、夜色の瞳をまつすぐ彼に向け、

「私は、リムティッシュ。ゆえあつて、ここ、傭兵戦士団スリンガ―で世話になっている。まあ、いちおう傭兵だ」

威厳と余裕と落ち着きのある凜とした声で、そう名乗った。

だからそれが当然であるように彼も、

「オレは」

自らを名乗ろうとした。

「オレは……」

だが、

「オレは………、オレは………、オレは」

名乗れなかつた。

「オレは、………誰だ？」

頭の中に確かに存在しているのに、手が届くほど近くに見えているのに、けれど果てしなく遠い “それ” は、まるで蜃気楼のようだった。

リムティッシュは夜色の瞳を驚きに染めつつ、

「“自分/名前”がわからない、のか？」

慎重に、確かめるように訊いた。

「オレは………、オレは………」

それでも彼は辛抱強く、あるいは必死に、そこにある “それ/蜃気楼” をつかもうとした。しかし “それ/蜃気楼” は、思わせぶりに手が届くふうを装うだけで、その片りんすら触れさせてはくれない。

「………どうして」

彼は怯えるように、

「思い出せない……」

両の手で、顔を覆う。

思い出せないことを認識したとたん、彼は耐え難い孤独感に襲われた。それは光の射し込まない樹海に突然ほうりこまれ、そこを当てもなく彷徨っているような、恐怖をともなうモノだった。

「……きつと」

リムティッシュは“それ”を言うべきか逡巡してから、

「大丈夫さ」

しかし、あえて言うことを選んだ。

「“一時的にそうなることがある”と書かれた書物を、以前読んだことがある。あくまでも“一時的”、とな。……だから、そう焦るな」

そう言っただけでリムティッシュは、幼子を安心させる母親の“それ”と同じように、そつと彼の頭を優しくなでる。“剣/死”を扱う者の手とは思えないほど、その手は細くてしなやかで、なにより他者への温もりを知っていた。

しかし耐え難くは、同時に抗い難く。彼は諦めたように消沈して、

「そうだね」

と儂く微笑む。

リムティッシュは反射的に前向きなことを言おうとして、けれど思い止まる。これ以上“根拠のない無責任な言葉/前向きなこと”を言い連ねても、それでは彼の暗闇を照らせない。

「お前は、東門の道の、旧街道に倒れていたんだ。ここはロートワール国の首都にある、傭兵戦士団スリンガーの拠点を兼ねた、踊るギュートン亭という名の宿屋」

リムティッシュは自らが知る限りの、彼が現在に至るまでの足どりを知らせてみた。

「どうだ？ なにか思い当たることはあるか？」

彼は追い詰められたヒトの顔になって、首を横に振る。

「……少し待っている」

しばしの思考の末、リムティッシュは言葉以外に“灯り/光源”を求めてみようと考えた。自分の“所持品/装備品”を見るなり触れるなりすれば、あるいは彼にとって得るモノがあるかもしれない。あつてほしい。

彼女は胸の内で“明るいほう”を願いつつ、別室にある彼の“所持品/装備品”を取りに行くため席を立つ。

「ん？」

ふと視線を感じて、彼女はそちらを見やる。そこには、いまにも泣き出しそうな、独りになることを拒絶する、彼の怯えた表情があった。

「いや、お前の“所持品/装備品”を取りに行くだけなのだが……」  
リムティッシュは困ったふうに言つて、おとなしく待っていてくれるよう彼を説得するための言葉を探す。まだ容体のはっきりしていない彼を、動かすわけにはいかないのだ。

「……………わかった」

しかしいまの彼を無視できるほどの“冷静さ/冷淡さ”を、彼女は持ち合わせておらず、

「わかったから、そんな眼で私を見ないでくれ」

結局、彼と一緒に別室へ行くという選択をした。

さまざまな装丁の書物が、ところかまわず乱雑に平積みされていた。足の踏み場がない、ということとは、けれどなく。ともすれば道のような足の踏み場は、ちゃんとあった。乱雑ではあるが、まったくの考えなしというわけではないらしい。

それが彼の“所持品/装備品”を一時保管してある別室の、リムティッシュの私室の、ウソ偽りないありさまであった。

「なんだ、女の部屋だからって緊張しているのか？」

なぜか扉のところ動きを止めた彼に、リムティッシュはからかう口調で言葉を投げた。

「え？」

おもしろがつているような微笑みを浮かべて、こちらをのぞきこむリムティツシュの、その表情が近くて、

「あ、いや、その」

思わずドキリとしてしまった彼は、それを誤魔化すように焦って答える。

「書物の多さに、なんか圧倒されちゃって」

女の部屋というよりは、もはや“本の虫の巣穴”と述べたほうが正しい部屋である。彼の“反応/感想”は、決して間違っていない。むしろ、とても素直なモノであると言えた。

「それでも、だいぶ減ったほうなんだがな」

リムティツシュは思い出したふう苦笑を浮かべて、

「以前、床を貫いてしまったことがあってな。そのとき多くの蔵書を、泣く泣く古書店へ売却したんだ」

語るその言葉には、“惜しむ/悔やむ”気持ちがにじみ出ていた。語ったことで改めて“それ”を再認したのか、彼女はガツクリとなだれ、

「て、私のことはいいんだ」

しかし速やかに感傷の海から浮上し、話を本題に戻す。

「そんなことより、お前の“所持品/装備品”だ」

言つて、リムティツシュは部屋の内部へ三歩進み、

「ん？」

けれど肝心の彼が、いまだ扉のところから動いていないことに気が付き、

「いつまでそこに突っ立っつてい、……る、……ん、……だ？」

同時に、なにやら彼の様子がおかしいことを知る。

彼は、“ある一点”を凝視していた。まばたきを忘れた目で。病に苦しむヒトのような、荒い息遣いで。恐れと哀しみと親しみと拒絶の混在する、“痛む/悼む”ヒトの表情で。

リムティツシュは驚きを抑えつつ、彼の視線を追って“ある一点”を見やった。



果たしてそこには、ひとつの金製の懐中時計があった。簡素な木製の机の上に、平置きされた書物をわきへどけて作られた即席空間に置かれてある。

いまの彼の“状態／情態”から、あるいは“それ”が“灯り／光源”たりうるのではと感じたりムティッシュは、しばし様子を見守ることにした。静かに、そこへ到る道を譲るように身をわきへやる。彼が懐中時計に意識を向けたのは、まったくの偶然だった。金製の“それ”に反射した夕陽の光が、たまたま目を射したのだ。

まぶしいと感じる間もなく、その“存在”を“意識／認識”した瞬間、彼は胸の内の心臓よりさらに深い部分を、もつともやわらかい部分を、容赦なく矢で射抜かれたような、呼吸が困難になる強烈な苦しみに襲われた。見えない矢で、見えない壁に縫い付けられてしまったかのごとく、身体も硬直して動かない。

いまずぐ逃げ出したい。速やかに終わりにしたい。終わりたい。終わらせてほしい。耐え難い現状からの離脱を、終了を、彼は渴望した。だが、それが訪れることは、その兆しすらなかった。

不意に。固まっていたモノがほぐれるように。

現状の元凶たる懐中時計に、なぜか懐かしさのある親しみを覚えている自分が存在することに彼は気が付いた。拒みたいはずの“それ”に“惹かれる／呼ばれる”ような“感覚／想い”が、確実さを持って徐々に強まってゆく。彼がそちらへの一步を踏み出すまでに、さして時は要さなかった。

彼は夢遊病者のような足どりで、そこへ辿り着く。そして懐中時計を間近にして、彼の眼差しは吸い込まれるようにくぎづけとなった。

懐中時計の蓋の部分には、なにか意味があると推察できる“記号／文字”のようなモノと、その“記号／文字”を庇護するかのような片翼が、職人の匠技によって美しく刻まれていた。片翼は“ある物語／ある書物”に登場する“天の御遣い／神の御遣い”の翼が、そのモチーフのようである。

彼は“それ”に触れようと手を伸ばそうとして、そのことに気が付いた。手が、震えていた。まるで“求め”と“拒み”がせめぎあうように、震えていた。

彼は辛抱強く“拒み”を説得し、ついに、けれど恐々と、“それ”に触れる。そして、手に取る。

とても深いところから、なにか込み上げてくるモノがあった。

なぜだか、視界がくもりはじめた。

「な」

見守るに徹していたリムティッシュは、突然の事態に驚き戸惑い、

「お前、……泣いているのか？」

なぜか、改めて訊いてしまった。

「へ？」

言われて、彼は確かめるように指で目元に軽く触れ、

「……………どうしてだろう」

そこで初めて、自分が涙を流していると知った。

が、知ったからといって、急に涙が止まるわけもなく。彼は

困惑するヒトの微笑を浮かべて、

「これを見ると、悲しくないのに涙が止まらないや」

どうしよう、と泣き微笑む。

とりあえず落ち着かせようと思ったリムティッシュは、彼をベッドに腰掛けさせ　しかし、そこから先は、いったいどんな顔をしたらいいのかすら、まったくわからなかった。どうにかしたい、してやりたい、と思うのに。もどかしさと、自らの不甲斐無さに、彼女は苛立ちを覚えた。

「すまない。どうしてやることもできなくて」

視界の隅に見えた書物の山に彼女は、奥歯を噛みしめる。

そんなリムティッシュの様子に、はっとして彼は、とても申し訳ない気持ちになった。

「キミが謝ることじゃないよ」

でも涙は、

「自分でもよくわからないんだから  
どうしようもなく流れ続ける。」

「しかしっ」

リムティッシュは思わず語気を強めて言って、

「……………」

けれど続くべき言葉が、どんなに探しても頭の中に存在しなかつた。

「……………」

と彼は手にある懐中時計を注視しながら、

「やっぱり、オレの“所持品/装備品”なのかな？」

慎重に、確認するように訊ねた。もうすでに“答え”は見えていたが、外部の視点による保証が、どうしても欲しかったのだ。

「ああ、そうだ」

リムティッシュは、簡潔に告げる。

「そう……………」

彼は哀しげに懐中時計を見やり、そして言う。

「頼みたいことがあるんだ」

「なんだ？」

「“これ”を預かってほしいんだ。“これ”を見なければ、たぶん平気だと思うから」

そう言いつつも、その意に反して彼の手は“それ”を放すまいと静かに抗い、

「わかった。責任を持って、預かせてもらおう」

受け取るために差し出されたリムティッシュの手に、“それ”が渡されるまでには、しばしの時を要した。受け渡したあとの彼の手は、とても名残惜しそうに“それ”の“質感/触感”を忘れまいとしていた。

リムティッシュは受け取った懐中時計のチェーンを首に掛け、そして白銀の胸当ての内へと“それ”を納める。金製の懐中時計に付属する、金製のチェーンは、首から掛けるのに十分な長さのある環

になっており、なおかつ衣服のポケットにクリップで留められるよう作られてあった。

無言の間が生まれた。

彼の顔を、リムティッシュは密やかにうかがう。そこには、泣いたあとのヒトの顔があった。けれど、泣いているヒトの顔はなかった。

ふと、目と目が合った。

泣いたあとの潤んだ瞳で、「なに？」と見やり返してくる彼に、

「ん！ んん……、いや、なんだ……、その……」

なぜか動揺を覚えてしまったリムティッシュは、それを断ち斬るように、

「そうだった！ 他の、他のはどうだ？」

よくわからない勢いで、そう訊ねた。

「えっ……と……」

どうにか涙の止まった目で室内を見回し、

「……………他って？」

彼は哀しい影のある困り顔になって、訊き返した。

リムティッシュは、自らの配慮のなさに憤りを覚えた。

「……………すまん」

詫びの言葉は口にできても、彼のほうを見やることはできなかった。彼女は逃れるように、間を空けず言葉を継ぐ。

「他というのは、これらのことだ」

彼女が示したのは、木製の机の上に置いてある品々であった。丈夫な布で作られた、サイドポーチ。鋼と布を組み合わせた、漆黒の籠手。そしていまは鞘に納まる、打刀。

「悪いと思っただが、なにか身分の判るモノがないか、中身はあらためさせてもらった」

身分を確認するというのは当然の行為ではあるが、しかし当事者に黙って“所持品/装備品”の中身をあらためるというのは、これも当然だが、とても失礼な行為である。あえてそのことを知らせる

必要はないが、リムティッシュはその“あえて”を選び、詫びの意を含めた言葉と共に、サイドポーチを差し出した。

彼はそれを受け取りつつ、

「なにかあった？」

若干の期待を込めて、けれどすでにわかりきっていることを訊く。

「……いや」

リムティッシュも、それをわかりつつ、

「応急処置程度の、簡易的な医療道具しかなかった」

あえて、きつぱりと返答した。

「そう……」

気にしてないふうを装って、彼は受け取ったサイドポーチを見やる。確かに中身は、簡易的な医療道具しかない。

「……」

触れても、見ても、思うところはなにもなかった。

彼はサイドポーチを膝の上へやり、首を横に振る。

たったそれだけの動作は、しかし明確に結果を物語っていた。

リムティッシュは反射的に言わんとした言葉を制して、

「では、これは？」

と素っ気ないふうを演じ、彼の唯一の防具である漆黒の籠手を差し出す。

サイドポーチと同じく、彼は漆黒の籠手から“自分/内部”を探し出そうとするが、

「……」

やはり、なにもなかった。強いて思うところがあったとするなら、この籠手はとても使い込まれていて、使い込まれたモノ特有の“味わい/古さ”があるな、という外部からの感想だけだった。

膝の上、サイドポーチの上に、漆黒の籠手を置き、彼は言葉なく、ひとつの結果を明確に表す動作をおこなう。

「……最後は、……これだ」

リムティッシュは“素っ気ない”を演じていられる内に、話を次

へ移す。

「お前は、これを抜いた状態で倒れていたんだ」

言葉と共に差し出されたのは、彼の最後の“所持品／装備品”である打刀であった。

自分が扱っていたということに疑念を懐きつつ、彼はそれを受け取る。見た目の印象と違い、打刀にはずっしりとした重量があった。危うく手腕ごと床に落としてしまいそうになったが、どうにか持ちこたえる。

「それは“東の島国ジパング”独特の剣の一種で、“打刀／うちがたな”と呼ばれるモノだな。私はかなりの業物と見受けるが」「リムティッシュの話しを半分の意識で聞きつつ、彼は打刀の柄に右手を掛ける。柄は、握った拳ふたつ分より少し長い。

次いで彼は“鯉口を切り／左手の親指で鍔を押し、刀を鞘に留めておく役割のはばきという金属部分だけを先に抜いて”、刃を抜きやすくしてから、ひと息で引き抜く。

凜と鋭く冷やかな鞘走る音が、空を斬る。

彼は意図せずして姿勢を正し、打刀を見やる。

若干反りを持たせた、片刃の刀身。刃紋は、乱れなき一筋の境界線を思わせる直刃。刀身の長さは、ピンと伸ばした腕の、肩口から指先ほど。窓から差し込む夕刻の光によって、淡い黄褐色の微光をまとい、妖艶な美しさがある。

その姿に彼は、しばし時を忘れて見入った。

そして。

ふと、それに気が付いた。

刃に、ヒトの顔らしきモノが映っていた。淡い黄褐色の中に、ぼんやりとした輪郭で映っている。はっきりとはしないが、よくよく見ると、どうやらそれは若い男の顔であるらしいと知れた。覇気のない、気弱そうな、頼りない印象の顔だった。

ひとつの疑問を、彼は覚えた。そのことに気づいてからずっと、その頼りないふうな顔の人物と、目と目が合い続けているのである。

映りこんでいるその顔が“自分であるらしい”と、彼が疑問を解消する発想に至るまでには、短くない時を要した。

まったく実感のともなわない“ひとつの気づき／発想”だった。事の流れから、彼の意識は“自身”へ向いた。目で見える範囲内の“自分の姿”を、いまになって初めて見やり、知る。

深緑色の、少し布地の厚い長袖の服。濃紺の、穿き込まれて味のあるジーンズ。黒の、なぜか足に馴染むアサルトブーツ。服には左肩、ジーンズには左太腿のところに、極めて目立たないが繕われたような痕跡があった。

身体は華奢というわけではなく、かといって筋骨隆々というわけでもなく、必要なところに必要な筋肉のある、均整のとれたモノだった。しかしそうであるからこそ、力強そうには見え、どちらかと言えば弱そうであった。

そんな身なりをしているのが、どうやら“自分であるらしい”と、彼は努めて“認識／意識”した。……けれど、やはり、まったく、実感はともなわない。

「どうだ？」

リムティッシュは切実に願うヒトの瞳で彼を見やり、訊いた。

彼は“流れる動作”で起きた刃を鞘に納め、首を横に振る。

「……そうか」

眼差しを床に落として、リムティッシュは最後の“素っ気なさ”を演じた。

得るモノはまったくなかった、というわけでは、しかしなかった。彼は“そのこと”に無自覚のようだが、リムティッシュはしっかりと“そのこと”に気が付いていた。打刀の扱い、に関してである。抜刀と納刀の動きを、彼は無駄も迷いもなく“慣れた手つき”でおこなっていたのだ。これは微々たる、けれど確かな彼の“片りん”である。

だが、リムティッシュは思い悩む。いかにして“そのこと”を彼に説明したらよいのか、わからないのだ。“自分”が不確かなのに、

その“自分”の“片りん”を自覚しろと、いったいどのような言葉  
をもちいたら、正しく受け取られる説明ができるのだろうか？

難問の答えを求めて、リムティッシュは思考の海に沈む。

そんな彼女の表情が、しかし彼には苦悩するヒトの“それ”に見  
えた。そして“それ”を浮かべる原因が自分にあるとわかっていた  
から、とても申し訳ない気持ちになった。胸の奥が、痛い。

膝の上にあるサイドポーチや漆黒の籠手を、ぎろぎろと逡巡する  
ように握ってから、彼は断ち斬るように、

「……そういえば」

と思い出したふうに言った。 思い出したふうに、ではあるが、

それは“自分”のことではなく、

「目が覚めたときに」

最初にご対面した、けれど一言も交わすことなく別れた、小さな  
ヒトについてである。いつたい、“誰／何者”なのだろう？

「……ん？」

彼の唐突な思い出しに、

「……アキは、名乗らなかつたのか？」

時間差で理解が追い付いたリムティッシュは、床から彼に眼差し  
を移して、訊く。

彼は首肯して、答える。

「話しをするまえに、どこかへ飛んで行っちゃったから……」

それを聞いたリムティッシュは、穏やかな苦笑を浮かべて、

「アキは少しそそっかしいところがあつてな、悪気はないんだ、許  
してやってくれ」

と詫びを述べてから、

「アキは、私の家族であり親友であり頼もしい相棒でな。身体は小  
さいが、風神に愛されし小人と称される“フェアリー／小妖精”で、  
魔術に関しては非常に頼もしい才能を發揮してくれる、とても強い、  
私の誇るる友だ」

まるで自分の自慢話をするように胸を張って、“家族／親友／相



棒”を紹介する。

リムティツシユの表情が明るいモノへと変化したことに、彼は嬉しきにも似た安堵を覚えつつ、憧れるヒトの眼差しで彼女を見やっ  
た。誇るべき存在があるということが、“他者／外部”との“絆／  
繋がり”があるということが、とてもうらやましく思えたのだ。

果たして自分にも、誇るべき“家族／親友／相棒”は存在するの  
だろうか？ 存在していたのだろうか？

「……その」

リムティツシユは戸惑うように視線を泳がせ、

「なんだ……」

頬を微かに朱に染めて、

「……そんなに」

黒の長い髪の毛先を、指先でもじもじといじりながら、

「見つめられると……」

涙を流したあとの潤みの増した瞳で、じいと思つめてくる彼に、

「……こ、こちよばいのだが」

深刻な問題を扱うヒトの心境で、指摘する。

「え？」

言われて初めて“そのこと”を意識し

「……あ」

とたん、彼は急激に気恥ずかしくなり、

「ご、ごめん」

不審な挙動で視線を逃がし、床に平積みされた書物と書物の間に  
ある間を凝視する。顔が茹でられたように赤い。

こっ恥ずかしい、ドギマギとした無言の間が生まれる。

ふたりとも心拍数の上昇を抑えようと努めた。そして“お努め”  
に集中し過ぎて、

「お前え……、弱った男を部屋に連れ込んで“なに”やらかしやが  
つた？」

その登場に、まったく気が付かなかった。

びくう！ とリムティッシュは身を震わせ

転瞬、拗ねる子どものような表情になって、

「し、失礼じゃないかつ、女性の部屋にノックもなしに」と抗議を述べる。

扉のところには、ふたりの人物が居た。

ひとりには、漆黒の鎧に身を包み、黒の眼帯で右眼を隠した、決して善人には見えない顔面をした“おっさん／中年男性”。腰の左右には、それぞれ片手半剣を吊っている。

もうひとは、よれよれの薄汚れた医師の白衣を着た、不精ヒゲの生えた面の上でメガネをギラつかせている、決して真人間には見えない青年男性。手には、往診に向かう医師が持つような、革製の大きな鞆がある。

「開けっ放しにしてるヤツに、そんなこと言われる筋合いねえよ」

閉まっていたら扉がある位置で、ノックをする仕種を見せてから、黒の眼帯の男性は言った。

まったくその通りなので、リムティッシュは言葉を返せない。

「アキに呼ばれて来てみりゃあ、部屋に居ねえ」

黒の眼帯の男性は、批判するヒトの口調で言う。

「かと思つたらテメエの部屋に“そいつ”を連れ込んでやがる」

ギロリと鋭い眼光を放つ左眼で、彼を見やり、

「あげく、連れ込まれた“そいつ”は泣きっ面」

それからリムティッシュを、責めるヒトの左眼で睨み、

「お前え、“なに”やらかしやがった？」

自由を要求する訊問官のように、容赦のない威圧的な語気で迫る。

「どうして私が“なにか”した前提で言うんだ」

とても心外というふうには、むうっとした不満顔で、リムティッシュは、

「こういうときは、“なにがあつたんだ”とか“どうしたんだ”と訊くべきだろう」

譲れないモノを守るように、発言の訂正を求めた。

【序】第一章：二節　く後悔、先に立たずく

「ちょっと診せてもらいますよ」

いつの間にか彼の前まで移動していた薄汚れた白衣の青年は、そう言つて彼の腕を取り、黙つて脈を診る。そして軽い健診を終え、

「どうやら、身体に問題はないうつですね」

クイとメガネの位置を直しながら述べた。

「……そうですね」

彼はそれを複雑な心境で聞いた。

そんな彼を代弁するように、

「じつは、とても繊細で複雑な問題があるんだ」

リムティツシユは“彼の現状”を説明した。

それを聞いたふたりは、二者二様の表情を見せる。

真人間に見えない青年は、不謹慎にもどこか喜ばしそうな、気色の悪い薄ら笑みを。

善人に見えないおっさんは、訝しむような、険しい表情を。

あまり愉快ではない“静けさ／空気”が場を包み

ぐうぐう、という愉快な音がそれをぶち壊した。

ぐうぐう、とその音は激しく自己主張する。

ぐうぐう、とまったく慎むことなく。

「誰だ、腹鳴らしてやがんの」

言つて、黒の眼帯のおっさんはそれぞれの顔を睨む。

しかし音源は、すぐに知れた。

「なんだお前え、腹へってんのか？」

そんな問いかけに

ぐうぐう、とお腹が勝手に返答してしまい、

「……………そのようです」

彼は顔を真っ赤にしてうつむく。

詳しい話は夕食を食べながら、ということになった。この“踊るギョートン亭／宿屋”は、二階に客室、一階に食堂があるので、一同は部屋から出てそちらへ移動する。

階段の途中の踊り場に、“簡素な姿見／大形の鏡”があった。宿泊客が外出前になにげなく身だしなみを確認できるように、という宿側の配慮が感ぜられる。

そんな優しさのある“簡素な姿見／大形の鏡”を前にして、  
「……………」

彼は言葉もなく突っ立つ。

知らないヒトの肖像画を眺めているような、感慨のない気分だった。はつきりとした輪郭でそこにいるのに、“当たり前のようにそれを自分と認識する”ことができなかつた。

ただひとつ、鏡を見て知れたことがあつた。鏡の中の“自分”は、適当に切つて分けた、黒に近い茶色の髪をしていた。

覇気のない、頼りない、地味なヒトだな、と彼は鏡の中の“自分の姿”を眺めて思った。それは他人の身なりを批評するヒトのような、感情移入のない俯瞰の意だつた。

「どつかしたのか？」

鏡の中を凝視して動かない彼に、リムティッシュはうかがうように声をかけた。

彼は、首を横に振ることでそれに答えた。

一階の食堂は、夕食時ということもあり、とても賑わつていた。

他愛無い世間話をする者、黙々と食事を味わう者、酒の力で話し冗語になる者、酒を黙って嗜む者、仕事や職場や人間関係に関して愚痴をこぼす者、恋愛に関する話で熱くなる者に冷める者　食卓それぞれに、様々な色彩の個性が溢れている。

特別さもなくそこにある鮮やかな色彩たちは、彼にとって耐え難いほどまぶしかった。逃げるように、耐えるように、彼は足元に視線をやる。息をするのが、苦しい。一步を踏み出すのが、辛い。歩

みが止ま

うつむく彼の手に、リムティッシュは言葉なく自らの手をかさねる。そしてちよいと手を引き、向かうほうへ彼を導く。

幾億の励ましの言葉より、たったそれだけの温もりで、彼がまた一步を踏み出すには充分だった。

食堂の隅っこにある木製の円卓に、一同は腰を落ち着ける。黒の眼帯のおっさんは彼の対面に、薄汚れた白衣の青年とリムティッシュは彼の隣に、それぞれ座った。

「で、お前は」

と黒の眼帯のおっさんが話そうとするのをさえぎって、リムティッシュは、

「この悪人面をしているのが、ゼロ。ここ、踊るギョートン亭の亭主であり、傭兵戦士団スリンガーの副長だ。言葉が粗暴で、この顔面事情だから、確実に誤解されるが、中身はとても良心的で優しいヒトだ」

発言の邪魔をされて苛立たしげな表情を浮かべるそのヒトを、彼に紹介する。

「テメエ、いちいち余計なこと言うんじゃない」

黒の眼帯のおっさん　ゼロは、鋭利な眼光をリムティッシュに向ける。

「ちなみに、いまのは照れ隠しですね。こう見えてゼロは、とても照れ屋さんですから」

薄汚れた白衣の青年が、からかう口調で言う。

「んだど、このクソ医者」

リムティッシュに向けていた眼光に殺意を足して、ゼロは薄汚れた白衣の青年を睨む。

「いまクソ医者と言われたのが、ドラッド。この宿屋専属の医師で、とても残念なことにとっても残念な人間だ。ちなみに、運び込まれたお前を診てくれたヒトでもある」

薄汚れた白衣の青年のことを、リムティッシュは流れ作業のごと

く彼に紹介する。

「ずいぶんとまたバツサリオっしゃる」

薄汚れた白衣の青年　ドラッド医師は薄ら苦笑を浮かべて言い、  
メガネの位置を直す。

「……どうも」

色彩の濃いふたりに気圧されつつ、彼は当然のこととして挨拶を述べた。けれどそれは、食堂に溢れる色鮮やかな賑わいにのまれて埋れて跡形もなく消える。速やかに。

「それで？　お前えは誰だ？　なんの目的があつてここにいる？」

ゼロは眼帯のない左眼で彼を真っ直ぐ見据え、斬り込むように問うた。

それに対して、

「彼の“いま／現状”については、さつき説明したろう」

リムティツシユは怒りを覚えているヒトの冷静な口調で、抗議を述べる。

「記憶喪失つてか？　お前えは書物の読み過ぎだぜ、“リムティツ

シユ／本の虫”」

ゼロは鼻で笑って、

「それに、そもそも“こいつ”が“役者／詐欺師／悪人”じゃねえ保証はどこにある？」

至極真面目な、責任ある立場のヒトの顔になって訊く。

「それは」

彼が“そのような存在”ではないとリムティツシユは確信しているが、しかしそれを“証明／保証”できうる絶対的な根拠はどこにもなかった。それでもあえて理由を述べるとしたら、

「　女の勘だ」

彼女は真摯な眼差しで、

「私の勘が、彼は決して“そのような存在”ではないと言っている」  
きっぱり言い切る。

「勘て、お前え……」

あきれを通り越して、もはや感心しているふうな表情で、ゼロは言葉を失う。

「必ずしも的外れとは言えませんが、ゼロ」

ドラッド医師が、リムティッシュの意を援護する。

「ああん？ どういうことだ」

「女性の脳は、男性の脳よりもコミュニケーション能力が優れているんですよ。ですから、まあざっくり言えば、本能的に他者を見る目が優れているわけです」

「だから信じてるってか？」

「そうは言ってますせん」

「じゃあ、なんだってんだよクソ医者」

「決め付けるのはまだ早い、という話ですよ」

ドラッド医師はメガネの位置をクイと直し、気色の悪い薄ら笑みを浮かべながら言う。

「記憶喪失は、実際に起こりうる症状です。頭に強い衝撃を受けたときや、脳になにかしらの損傷を負ったとき、あるいは耐えられる限界を超えるような“精神的ストレス／精神的ショック”を受けたとき、はたまた“薬物／毒物”や魔術によって外部から“頭／脳／精神”に干渉を受けたときに」

「だから？」

ゼロは、苛立たしげに“答え”を要求する。

「ですから、彼が記憶になにかしらの混乱を起こしている可能性は否定できないわけです」

「ふーん」

ゼロは値踏みするような左眼で、彼を見やる。

「というわけで」

ドラッド医師は場違いな嬉々とした表情で、

「詳しく診せていただいてもよろしいですか？」

いやらしく揉み手をしながら、彼に訊く。

「お願いします」

彼は喰らいつくように答えた。“自分”を知れる可能性があることなら、なにがどうあれ拒否する理由はない。

「診てわかることなのか？」

必死に切実に“答え”を急ぐ彼に代わって、冷静に慎重な姿勢でリムティッシュが問うた。

「それは、診てみないことにはなんとも」

ドラッド医師は明らかに楽しそうな笑みを浮かべて、

「では、さっそく診察を始めましょうか」

プレゼントの包み紙を、いざ剥がさんと心を躍らせる子どものように、

「生きてるうちに“極めて希な症例／記憶喪失”を実際に診れるとは

けれど“変質者／変態野郎”のごとく両の手を気持ち悪くワキワ

キさせながら、

「なんと幸運なことでしょう」

まったく場の空気に対して配慮のないことを、平然と口にする。

そんなドラッド医師のことを、ゼロは道ばたの石ころ以下のモノを見やる左眼で見やり、リムティッシュは必殺の間合いにある“その首”を刎ねんとする剣士の眼で見やった。

突き刺さる批難の視線をまったく気にするふうもなく、ドラッド医師は彼と向かい合う。そして彼の顔の前に右手人差し指を突き出し、賑わう食堂の中でもよく通る低い音声で、短い呪文を詠唱する。すると、突き出した指の先端に、ロウソクの火を思わせる小さな光が灯る。

ドラッド医師は光の灯った指を複雑に動かし、“指の軌跡／残光の尾”で幾何学模様を描き出す。指を動かすのを止めても、“それ”は淡い光を発しながら空中に存在し続ける。

次いで。

幾何学模様の中から、帯状の幾何学模様が生えるように出現した。



带状の“それ”は、獲物を捕食せんとする蛇を想わせる動きで音もなく速やかに“彼の頭の中”へ侵入し

次瞬、気配すら残すことなく霧散して消える。

「おや？」

ドラッド医師は一瞬だけ真面目なヒトの表情を見せてから、

「おやおや？」

なにか楽しいモノを発見した子どものように目を輝かせる。

それとは対照的に。

彼は顔面蒼白になって背を丸め、こみ上げてくるモノを抑えようと手で口元を押さえる。額には、脂汗が病的に浮かぶ。

どう見ても明らかに体調が悪くなった彼の、その弱々しい背を優しくさすりつつ、

「いったい“なに”をしたんだ」

リムティツシユは責めるヒトの口調で、そこに居る“医者／医師”に訊いた。

「なにも」

含みのある笑みを浮かべながらメガネの位置を直し、ドラッド医師は述べる。

「正確には、“なに”をおこなおうとしたら、べつの“なにか”に“なに”をなかつたことにされてしまったのです」

「……………」

リムティツシユは頭痛を堪えるヒトの表情を浮かべて、

「……………もう少しわかりやすく話してくれないか」

噛み砕かれた説明を求めた。

「つまりですね、彼の頭には“鍵が掛かっていた”という話です」

「……………頭に、鍵？」

「大切なモノを保管している金庫には鍵を掛けるでしょう？ それと同じことですよ」

ドラッド医師は、自らの頭を指して言う。

「魔術師にとっての大切なモノである“知識／知恵”を保管してお

く金庫は己の頭の中であり、そこに掛ける鍵は己の施す“魔術／呪文”である、というだけのこと。ちなみに魔術師にとつての鍵である“魔術／呪文”とは、外部からの“魔術／呪文”による“頭／脳／精神”への干渉を“拒絶／無効”する一種の対抗呪文のことです。いまさつき私の“魔術／呪文”が霧散して消えたのも、この“鍵／対抗呪文”の作用です」

「……………」  
リムティッシュは難書を読み解くように眉根を寄せて眉間にシワを刻み、

「……………つまり」

そして、ひとつの解に至る。

「彼は魔術師ということか？」

「違います」

ドラッド医師は、きつぱりと否定し、

「自分で施した“魔術／呪文”に拒絶反応を起こす魔術師なんて、記憶喪失者以上に希な存在ですよ　　というか、聞いたことありません」

いまだ気持ち悪そうに背を丸めている彼に、好奇のある視線をやる。

「ですから、彼の頭の“鍵／対抗呪文”は、彼以外の他者によって施された可能性が高いと思われれます」

「　　で？」

いままで凶悪な顔面をして黙っていたゼロが、

「結局なんも解決してねえと思うのは、俺だけか？」

凶悪な顔面をして問うた。

「短気ですねー、ゼロは。短気は損気と言いますよ？」

どこか小バカにした物言いのドラッド医師を、

「ああん？」

ゼロは射殺すように眼帯のない左眼で睨む。

「まあ、しかし　　」

刺さる眼光など意に介することなく、ドラッド医師は言う。

「聞きかじった程度の私の魔術では、この“鍵/対抗呪文”をどうにかすることは無理ですね」

あまりにもあっさり言われて、“詳しく診ること”に少なからず希望を託していた彼は、よろしくない顔色の中に愁いた影を落とす。「どうにかできないのか？」

リムティッシュが訊いた。

「私の魔術では、なにをどうしたって無理です」

あるいは突き放すようにドラッド医師は、

「私の魔術では、ね」

含みのある眼差しで答える。

数瞬、リムティッシュは“それ”の意味するところを考え、

「ああ、アキか」

いま気づいたヒトの表情で、

「身近すぎて失念していた」

その意味するところを正しく理解した。

そして。

「ん？ そういえば、ふた리를呼びに行ったつきり姿を見ていないな」

いざ頼みごとをしようとして、リムティッシュはそのことに気が付いた。

「あいつなら、キキに捕まってたぞ」

ぶっきらぼうにゼロが教える。

「そうか」

リムティッシュはイスから腰を浮かし、食堂内を見回す。

その姿は、すぐに見つけられた。アキは食卓から食卓へと文字通り忙しなく飛び回り、客から注文を受けている。

「ちよつと待っていてくれ」

賑わうというより、うるさいと述べたほうがより正確な状況の食堂である。声を上げて呼ぶよりも、こちらから呼びに行ったほうが

早いだろつと判断したリムティッシュは、そう言い残して一時退席する。

「……………」

ゼロの凶悪な顔面にある左眼からの眼光鋭い眼差しと、ドラッド医師の不精ヒゲな面の上で怪しくキラつくメガネからの好奇の眼差しと、無言の間の重さが圧力となり、彼はどうにも居心地の悪さを覚えた。そして同時に、この居心地の悪さに、いまここにいるという逆説的な証明を覚え、安堵にも似たモノを胸の内に小さく懐いた。

リムティッシュは大酒飲みが酒をかつ喰らっているカウンター席の脇に立ち、注文を受け終えたアキが来るのを待つ。その間に、お腹を鳴らすほど空腹な彼のためにオススメの品を注文しておくことも忘れない。

しばしの時を経て。

「あれえ〜、どうしたのですかあ？ ぬし様？」

注文の報告を終えたアキが、可愛らしく小首を傾げながら訊いた。いまは紫の衣の上に白の割烹着を着ている。

「アキに頼みたいことがあってな」

リムティッシュは、事の次第を端的に説明する。

「なるほどお〜」

ふむふむと肯き事情を理解したアキは、

「わかりましたあ〜」

と言つて、頼みを快諾してくれた。

「目をつぶってくださいあ〜い」

そう言つてアキは、彼の額にそつと手をあてる。

彼は言われたとおり目をつぶる。それでもしかし、目と鼻の先に、眉間のところに、アキの存在を感じ、なんだかこそばゆいと彼は思った。それと同時に、感触としてはとても小さいアキの手に、けれどもなにか大きくて優しいモノに包まれているような、安心にも似た

温もりを感じた。以前にも、どこかで似たような温もりを感じたことがあるような気がした。

アキの背後に、身長と大差ないエメラルドグリーンに淡く発光する幾何学模様の円陣が発現する。それに呼応するように、彼の額に触れた手の平の部分にも手より少し大きい程度の円陣が発現する。

不快ではない“なにか”が頭の中に侵入してくる感覚を、彼は覚えた。そして不意に、カチリと“なにか”が音を発して噛み合わさったような、“なにか”がゆっくりと動き出したような、形容し難い不思議な流動感を彼は感じた。

「すごいですよ〜」

やれることをやり終えてから、アキは皆の注目の真ん中で演説でもおこなうように、

「とても強力な“鍵／対抗呪文”が五重に施されていましたあ〜。

とても強力なので、最初の“鍵／対抗呪文”に“ピッキング／対抗呪文”で割り込むことしかできませんでしたあ……、ごめんなさいですう……」

自分の“やれたこと”を報告して、しょんぼりと申し訳なさそうに肩を落とす。

「でもですねっ!」

とアキは不意打ちのように転じて、

「明らかにっ! 魔術による干渉の痕跡があるのですっ!」

力強く断言するように“そのこと”を付け加える。

「で?」

いままで凶悪な顔面をして黙っていたゼロが、

「やっぱ結局なんも解決してねえと思うのは、俺だけか?」

凶悪な顔面をして斬り込むように問うた。

「んー、まあ、彼が頭に困難なモノを抱えているらしいという可能性は証明されたわけですから、“いかにしてその困難を解消するか”という進むべき道は見えたとは言えますね」

少々困ったふうな表情で、ドラッド医師は強引に前向きっぽいこ

とを言う。

「……………頭の“鍵／対抗呪文”は、どうにかできるんじゃないか？」

切実に願うヒトの表情で、彼は訊いた。

「オレは、オレのことを思い出したい」

「……………それは」

とても答え難そうに、しばし逡巡してから、

「それは、どうすることもできないのです」

「アキはウソ偽りなく“答える／宣告する”。

「“鍵／対抗呪文”がとても強力なので、ある程度まで強引に“解除すること／割り込むこと”はできても、それ自体を完全に“解除／抹消”することは、術を施した術者にしかできないのです。誰ともわからない術者を探し出して“解除／抹消”してもらうしか、本当の意味で“鍵／対抗呪文”をどうにかする方法はないのです」

その宣告は、彼に残酷であった。

「よーしよし、どうにもできねえってことがわかったところで」

ゼロは話を切り替えるようにひとつ拍手を打ってから、

「お前えの処遇について言わせてもらう」

容赦のない鋭い眼光を彼に向け、

「飯が食い終わったら、とりあえずお前えの身柄は憲兵に引き渡す」

容赦のない言葉を、容赦なく彼へ投げ付ける。

「そんなんっ！」

沈む彼に代わって、リムティッシュが声を荒げた。

「彼は罪を犯したわけではないんだぞ？ それなのに憲兵に引き渡すなんて、あんまりじゃないかっ！」

そんなリムティッシュの抗議に対して、

「ひとつ」

「ひとつ」

ゼロは右手を突き出し、人差し指を立て、

「罪を犯したわけではない　かもしれない、だ」

冷静な口調で言い、

「ふたつ」

突き出した右手の、人差し指と中指を立て、

「そもそも俺らが世話焼いてやらなきゃならねえ義理はねえ」

と、きっぱり突き放す。

「それは……」

ゼロが彼に対して厳しい評価をくだすことは、リムティッシュにも理解はできた。傭兵戦士団スリンガーの副長であり、踊るギュートン亭の亭主であるという、責任ある立場のゼロである。“もしも”の可能性を危惧しているのだ。記憶喪失らしい、という身元も素性も不明の彼が、“もしも”招かざる事態を惹き起こすような人物だったら、と。

立場ゆえの判断は理解できる。理解できるのだが

リムティッシュは、彼を見やる。どこか遠くを見るような、まったくの別人を見るような、慈しみと哀しみの混在する眼差しで。

「彼は」

そして彼女は揺るぎない夜色の瞳でゼロを見据え、

「彼は私に“命の借り”がある」

当然のことを訴えるふうな口調で言う。

「……なに？」

あえて発言を確認するように、ゼロは訊き返す。

「彼は私に“命の借り”がある。私には“それ/借り”を返してもらう権利があるし、彼には“それ/借り”を返す義務がある。彼は剣士だ。剣士は借りには報いるものだ。それが剣士の誇りであり、剣に“忠を尽くす”ということでもある。もし憲兵に身柄を引き渡してしまつたら、借りを返される権利のある私にも、借りを返すべき義務のある彼にも、お互い不都合が生じてしまう」

「だから身柄はここに置いとけてか？」

「そうだ」

きっぱりと真摯な眼差しで答えるリムティッシュに、

「……………」

ゼロは“もはや笑うしかない”という困ったふうな苦笑を浮かべる。

「彼のことは、私の“剣ノ誇り”に誓って私が保証するし責任を持つ」

とリムティッシュが言うのをさえぎって、

「ああ、ああ、もういい。もうわかった。めんどくせえ。テメエの好きにしゃがれ」

ゼロが折れた　　というより、言い合っのを放棄した。

消沈した意識の隅で、ふたりのやり取りを認識していた彼は、

「……………ありがとう」

リムティッシュとゼロに感謝した。リムティッシュは安心させるような柔らかい微笑みでそれに応え、ゼロは鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「……………ありがとうございます」

不幸中の幸いと言えるこの状況に、けれど彼は、なにか胸騒ぎめいた不安のようなモノを感じてしまっていた。それがとても失礼なモノであるかわかっていたから、彼は自らに嫌悪の情を懐いた。しかし、それでも

どうしてリムティッシュは、こんなにも自分を信じてくれるのだろう？

「それにしても」

とりあえずは一段落といった雰囲気の中で、

「せめて名前だけでもわからないものかな」

胸の前で腕を組み、気遣うふうな眼差しを彼に向けながらリムティッシュが述べた。

「それが思い出せたら……………、他のことも思い出せそうな気がするけど……………」

顔を伏せ、彼は首を横に振る。

「名前は、たぶん…………… /ゲヴラー”だと思いますよあ〜。……………」



…あれれ？」

「なに？」

至極あっさりと重大なことを言ったと思われる自らの相棒に、

「アキ、いまなんと言った？」

リムティツシユは喰らいつく勢いで訊く。

「ううゝ、え？ あ、ですからあゝ、名前は“

ノゲヴラー

”だとお……」

言つて、しかしアキは困難を抱えているヒトのような表情をする。

“ 真実 ” 言おうとしていることが、“ 事実 ” 言っていることとズレているような、けれど“ 事実 ” が間違っているという確かな自覚があるわけではなく、とても曖昧な“ 気がする ” という、もんもんもやもやとした形容し難い感覚が、どうにも身を包むのだ。

「ゲヴラー、ゲヴラー、か……」

リムティツシユは“ それ ” を口に馴染ませるように発してから、

「しかし、どうしてわかるんだ？」

慎重さを忘れることなく確認するように問う。

「ぬうゝ、え？ あ、それはですねえゝ」

もんもんもやもやを解消せんと頭をひねっていたアキは、はつとして答える。彼が左の腰に留めている、いまは鞘に納まる打刀を指し示して、

「この剣にですねえゝ、『いかなるときもこの身は最愛なる“

ノゲヴラー” と共に、いかなる害悪からも“

ノゲヴラ

” を護り、いかなる困難をも絶ち斬る力となれ』という強い“ 意志 / 意思 / 遺志 ” のある、とても強力な護りの“ 魔術 / 呪文 ” が施されているからですう」

と彼の名前らしきモノを知りえた理由を述べ、そして、

「物理的に刀身に“ 呪文 / 術式 ” を刻むことなく“ 魔術 / 呪文 ” を剣に施してある、とてもすごい、どこか優しい感じのする護りの“ 魔術 / 呪文 ” ですよあ」

それがいかにすごいモノであるか、その小さな顔の表情筋を駆使

して力説する。

それを聞いた彼は、左の腰から鞘ごと打刀を抜いて、まじまじと不思議そうにそれを観察する。あるいは他にも“なにか”があるのでは、と淡い期待を込めて。

「護りの“魔術／呪文”か……」

彼を見やりつつ、リムティッシュは思う。よくも悪くも、どうやら彼は魔術と縁が深いらしい、と。

「……ゲヴラー」

打刀から顔を上げて、彼は“自分らしき”名前を口にする。

「……ゲヴラー、……ゲヴラー、……それが、“オレ／自分”なのかな？」

名前さえわかれば“なにか”劇的に変化するかも、と根拠もなく“期待／希望”を持っていたが、“現実／事実”は“幸せな物語”のように好都合ではないらしい。

「それは、私が答えられることではないが……。でも、ずっと“お前”と呼ばれるよりいいじゃないか。ゲヴラー、古語で“神の力”という意味だったかな。好い名前じゃないか。ゲヴラー。お前は、ゲヴラーだ」

言って、リムティッシュはやや眉尻を下げ、

「……それでいいだろう？」

と控えめに提案してみる。

「……そうだね。……オレは、ゲヴラー。……オレが、ゲヴラー」

記憶を失くすというのは、ひとつの死のカタチなのかもしれない。あるいは希望的に考えて、再び誕生したのと同じ……。死は、未来を失くす。記憶喪失は、過去を失くす。今現在を境界に、以後を失うか、以前を失うか、　違いは、それだけでしかない。どちらも、世界との“繋がり／関わり”を失くす。どことも、誰とも、“繋がる／関わる”ことができなくなる。

だから、彼はゲヴラーと呼ばれることを受け入れた。どこか

と、誰かと、世界と、“繋がる／関わる”ためには、“自分”が、“名前”が、必要だから。

「なんとも頼りねえ“神の力”だなあ、オイ」  
からかう口調でゼロが言う。

そんなゼロを、リムティッシュが睨む。

「おお、怖ええ」

おどけてゼロが、降参とばかりに両手を上げる。

そんな光景に、小さくではあるが自然と笑みが浮かぶ。それは彼にとって、ゲヴラーにとって、微々たるではあるが、けれど嬉しい成果である。

【序】第一章：三節　く後悔、先に立たずく

話が一段落すると、ゼロは用事があるといって、出ていってしまった。

ゲヴラーは当分の間、踊るギュートン亭の客室を間借りさせてもらう事になった。

憲兵のお世話になるか、自分で自分の世話をしながら自分を探るか、選べる二択があつて彼が後者を選ぶのは、当然といえば当然のことである。無論、払える宿泊代は持っていないので、ゲヴラーは傭兵戦士団スリンガーへ来る依頼の中でも難易度の低いものを請負う事でそれを補うことになる。

リムティッシュ、アキ、ドラッド医師がオススメする、ギュートンのしょうが焼き　を注文してから出てくるまでの間に、ゲヴラーは傭兵戦士団スリンガーの依頼が主にどのようなモノなのかを訊ねた。

「基本的には国の下請け　定期的な魔物狩りだな。難易度が高くなる」と商隊や要人の警護とか盗賊の掃討とかあるが」

「ああ、やっぱり戦つんだ……、オレにできるかなあ」

ゲヴラーは自信なさげに、高等魔術の施された己の刀を手に取りつつ言葉を漏らした。

「大丈夫ですよ。依頼を遂行する時は、わたしが助力しますから、安心してくださいですよ」

「うん……ありがとう」

ふわふわと微笑みながら顔前で浮かぶアキに、ゲヴラーは弱々しい困惑気味な微笑を向ける。

「ゲヴラー、アキの実力を外見だけで測るなよ。アキは、身体は小さいが、単身で盗賊を掃討したことだつてあるんだからな」

自分のパートナーを、無意識に誇らしげにリムティッシュは語った。

しばらくすると、賑やかさが一段と増した食堂の中を、猫のようにひよひよいと身軽に移動するウェイトレスさんが、注文の品をテーブルに持ってきた。

ウェイトレスさんは、着古した白い半袖シャツに膝までのジーパン、肩口でカットされた外ハネな赤茶色の髪。と、スタイリッシュな雰囲気美人さんでありながら、白いエプロンを装着して、どこか家庭的なお母さんめいた雰囲気を備えていた。

ちなみに、彼女は踊るギュートン亭のウェイトレス兼、傭兵戦士団スリンガーの依頼受付嬢で、名はキキだ。これから世話になるだろう。と、リムティッシュは猫の様に身軽な彼女をゲヴラーに紹介。紹介されたキキはゲヴラーに、ニツと猫の様な笑みとウインクを投げ、また忙しそうに食堂の中を猫のようにひよひよいといと行ってしまう。後姿でわかったが、彼女は、髪の毛と同色の二又な尻尾が愉しそうに動くヒップにホルスターのような物を装着していた。

彼女は半人半獣（亜獣人／ハーフ）のようだ。

視線でキキを見届けてから、運ばれてきた注文の品を見る。

お盆の上には、お箸にホカホカご飯のよそわれたお茶碗、美味しい湯気を発たす味噌汁に、まず白いご飯のお供としては間違いなと思われる、千切りキャベツに目玉焼きと香ばしくもジューシーなしょうが焼きがあつた。間違いなく、食が進むコラボレートである。究極と言つてもいいかもしれない。

一口サイズに切り分けられていた ギュートンのしょうが焼きを、ゲヴラーはお箸を使い、口に一口入れ、味わう。

「あつ、おいしい……」

自然とゲヴラーの表情はほころんだ。自然と白いご飯にお箸が伸びる。

それを見ていたリムティッシュとアキの表情も優しくほころんだ。ドラッド医師だけが、なにか思うところあるふうな表情をしていたが。

そこは、まるで迷宮。

ロートワール国首都の城下は他国の侵攻に備え、そのような作りになっていた。

住んでいる人さえも、時たま迷ってしまう迷宮チックな石造りの道を、コツコツと踏み鳴らす影が二つ。

不意に一つの影が路地を曲がり路地裏へ。

もう一つの影も、それを追うように、その路地を曲がる。

夜が更け、路地裏は闇色で、その中であって漆黒の鎧を身にまとい、右眼を漆黒の眼帯で覆い隠す、彼の左眼はギラリと猛禽類を思わせる輝きを放っていた。

「ヒトのこと付け回すたあ、いい趣味してんなあオイ」

首都城下の西に在る魔術学校とある用事を済ませて帰路についてから、ずっと付かず離れず追ってくる影に、常人ならそれだけで腰を抜かしてしまう本物の殺気を込めて、ゼロは言い放った。

「もう失うのは、嫌だ……。彼を護らなくては……。彼をうしなうわけには……………」

「あ？ なに言ってるやがんだ」

影は小柄で、頭から膝下までを覆うフード付きローブを身にまとっていた。ゆえにその言葉を呟く表情は窺えない。だが、その音声は幼さの残る女性のモノであることはわかった。

「彼を渡すわけにはいかない……………彼を」

影はローブから右腕を突き出す。その腕は無骨なデザインのアーマーに覆われていたが、窺える手は透き通るように白く、細くしなやかであった。そして、その手は拳を握り、

「返せ！」

華奢な手が開かれる。と同時に、掌前方の宙に淡い光をおびた幾何学模様が出現。しかしてそれは一瞬の事。幾何学模様は砕け散り、煌びやかな粒子へと変化し、新たな姿を形成する。

粒子が集結した華奢な手の中には、巨大な鎌が、タロットカードなどの死神の鎌を連想させる大鎌が握られていた。

影は担ぐように大鎌を構える。

ゼロは大鎌の思いもよらない出現に、目の前で手品を見せられたヒトのごとき驚きの表情を浮かべた。数瞬の間を置き、転じて疲れたようなため息をひとつ吐く。

「まったく……ロートワールも物騒になりやがったなあ」  
影が動く。

石造りの地面を蹴り、跳躍。

ゼロの首を狙って大鎌をなく。

命の危機が襲ってきて、しかしゼロは落とした硬貨を拾うような気楽さある動きで身を屈め　　転瞬、大鎌が後ろ頭をかすめるようにして空振り抜ける。

その隙を逃すことなく

ゼロは大鎌の柄に手を当てて動きを抑えつつ、鋭く踏み込んで間合いを詰め、肉薄する。

「っ！」

対して、影の判断も早く。動きを抑えられた大鎌を一切の迷いなく手放し、後方へ跳ぶ。

数拍遅れて、持ち主に放棄された大鎌が、風に吹かれて流れる砂のごとく煌めく粒子となって霧消した。　　が、安全圏まで後退した影が先ほどと同様にその手を握って開くと、またも煌めく粒子が集結し　　大鎌は持ち主の手に収まる。

それを目の当たりにしてゼロは、

「ほう。便利だな」

関心したふうに、そんな感想を言う。

「……………」

影は黙したまま、大鎌を右の手腕と肩で担ぐように持ち、空いた左の手をゼロのほうに向ける。その手の前方、空中に幾何学模様の小円陣が出現

「破っ！」

影が威勢よく言い放つと転瞬、幾何学模様の小円陣から呪文の帯

を幾重も絡み付かせた炎紅球が放たれた。  
着弾。

轟という高熱を帯びた音と共に、火柱が立ち上る。

「クソ容赦ねえなあ、まったく」

「なっ！」

影は驚くと同時、背後を振り向きざまに大鎌でなく、  
が、その刃は相手に到達するまえに止まる。止められた。なぜか、いつの間にか、影の背後に移動していたゼロの手によって。

「街ん中でやらかしていいもんじゃあねえぞ、この野郎」

今度は影の手ごと大鎌の柄を抑えてゼロは、襲撃者の顔を確認するために空いている手で相手のフードを引つ剥がす。

夜空に浮かぶ月の光に照らされて、影が輪郭を現す。黒に近い紫の長い髪に、意志の強そうな金色の瞳、顔は幼い感じが残るが凛とした美しい作りで、可愛いよりカッコイイという言葉が似合うかunjの、それは少女の容貌だった。

「ああん？ ガキい？」

「子ども扱いするなっ！」

襲撃少女は追い詰められたオオカミのごとくほえ、

「護らないと、うしなうのはもう……だからっ！ 彼を返せっ！」

抑えられていない手の前方、空中に幾何学模様の小円陣を出現させ、至近距離から炎紅球をはな

「なっ！ くう……」

「だから、その彼つてえのは誰のことなんだよ」

またも、なぜか、いつの間にか、襲撃少女の背後に回っていたゼロは、あまりにも容赦のない彼女に大人しくしてもらうため、致し方なく手刀を打ち込んで気絶させた。

持ち主の意識と呼応するように、大鎌が霧消する。

「ったく……はあ……」

ゼロはカッターそうに後頭部をボリボリとかいてから、襲撃少女をひよいと担ぎ上げる。さすがに夜の路地裏に少女を放置していく



ほど、冷たくはない。

「ったく。今日は厄日だぜ」

ブツブツばやきながら、ゼロは踊るギュートン亭への帰路に着く。

食事を食べ終わってから食後のお茶を飲み、一息ついた頃、ゲヴラーはとてつもない眠気に襲われた。

「色々あって疲れているのだろう。無理はしないで早く休むといい」

「そうですね。無理はキンモツですよ」

「それでは、この辺でお開きにしましょうか。スリンガーの事は明日にでも、それに私も久々に魔術を使って少々疲れましたし」

ゲヴラーは睡魔と格闘しながら階段を上り、自室になった客間の前へ移動。

安眠への扉を開こうとしたその時、リムティッシュに呼び止められる。

「なに？」

「いや、別に、とくにどうのという訳ではないのだが……」

「？」

「その……、おやすみ。また、明日な」

それだけ言うと、ピイツとそっぽを向き、微かな朱に頬を染めたリムティッシュは、自室の方へと行ってしまふ。

ゲヴラーの表情は、ただ嬉可笑しくてほころぶ。

「おやすみ」

そして、改めて自室になった客間に足を踏み入れる。

「これから、よろしく」

ベッドに入ってからしばらくして、下の階の方がなんだか五月蠅かった。声の色からしてゼロとドラッド医師であろうと判ったが、なにがどうしたのかを知りたいという好奇心よりも、睡魔の方が圧倒的に強く、彼の今日はココで幕を降ろす事となる。

ドラッド医師は寝に入ろうとしていたところを、ピンポイントで

狙ったようなタイミングで叩き起こされた。

「何なのですか、急患ですか、暇つぶしですか」

ドラッド医師は叩き起こした張本人たるゼロに質問をあびせるが、彼は答える気はないようであった。

そして、そのまま、叩き起こされた原因とご対面する。

「なんですかゼロ。ついに犯罪に手を染めましたか？」

「つだと、クソ医者」

「いやいや、冗談ですよ。で、彼女は何者なのですか？」

ギロリと左眼で睨むゼロにおどけて言った後、ドラッド医師は真面目な表情に戻って訊いた。

「こいつぁ、いきなり俺を襲ってきやがったヤツでな、一応は手え抜いて相手したんだが、一応はお前に診せておいた方がいいと思っ  
てな」

診察の為による、しばしの間の後にドラッド医師は口を開く。

「これといった外傷もありませんし、かといって内傷もありません。今はただ、気を失って眠っているだけですな」

「そうか。に、してもだ。今日は拾い者が多い日だったなあ」

「そうですね。どうにも、全部、偶然にしては仕組まれている気がしてしまつのですけど。それで、彼女はどうするのですか？」

「空いてる客間にブチ込んでおけばいい。その内、目え覚ますだろ」

ゼロは後の事をドラッド医師に押し付けて、あくびを噛み殺しながら自室へと向かう。

そんなこんなで、踊るギュートン亭の今日は幕を降ろした。

【序】第一章：四節　く後悔、先に立たずく

早朝、踊るギュートン亭の食堂は、夕食時の喧騒とは無縁の雰囲気を見せる。

朝日が優しく射し込む現在の食堂にはシツクな感じに落ち着きがあり、コーヒーの作られる匂いが、好い感じに漂っている。人影はポツポツ程度で皆が静かに朝食を食している。

そんな感じに大人な落ち着きをみせる踊るギュートン亭の食堂、夕刻ならば屈強な男たちが大酒をかつ喰らっているカウンター席に朝食を終了させて食後のコーヒーを楽しんでいるリムティッシュと小さなヒトなフェアリーのアキの姿があった。

ちなみに、今のリムティッシュは白銀の鎧に身を包んでいない。紺のロングスカートに白いブラウス、そしてブラウス内側の柔らかい谷の間にムギユムギユと例の懐中時計があるという格好である。

正直、地味な格好ではあるが、彼女の艶やかな長い黒髪と夜空を想わせる黒い瞳、そして彼女のまとう凜々しい雰囲気と合わさると、

『良い所の清楚なお嬢様』と思える。が、しかし剣士のたしなみとして側らに剣を携えている。まあ、それはそれで絵にはなるのだが。そんな感じに絵になるリムティッシュは、こちらはこちらで小さいが幻想的な絵になるであろう淡い紫色の振袖姿なアキに、

「ゲヴラーをそろそろ起こしてきてくれないか？」

と、お願いした。本当は自分で起こしに行ってもいいと思うのだが、しかし何故だか気恥ずかしさが勝っていた。

「わかりましたですう、ぬし様」

アキは己のぬし様のちよっぴり可愛いらしい部分を知ってか知らずか、羽ばたく事無く浮力を与えるエメラルド色な翼を使い、一気に一階食堂のカウンターから二階客間へとニコニコと嬉しそうにゲヴラーを起こしに飛んでいった。

リムティツシユは視線で見届けてから、カップに残っていた少量のコーヒーを飲み干し、

「キキ、コーヒーのお代りをもらえるか。あと、ゲヴラーにお手頃な依頼も」

と、ネコマタハーフなウエイトレス兼、依頼受付嬢に親しげな視線を向けて言った。

「はあくいよつ」

いつもと変わらぬ格好で、カウンター内でキュツカキュツカとお皿を拭いていたキキは、ニツと猫みたいな笑顔（通称、キキの猫スマイル）で応え、お皿を拭くのを中止して、リムティツシユからカップを受け取り、ポットから美味しい香りを漂わすコーヒーを注ぐ。そして、カウンター奥の食器棚の隣にある依頼書類保管棚から一つの封筒を取り出して、コーヒーと一緒にリムティツシユへと差し出す。

「この依頼ね、今朝早くゼロから渡されたやつなんだよね。『情けねえツラの“神の力”の実力試すにやあこれがいいだろ。こなせねえならオメエが扱き使ってやれ、皿洗いとか何とか色々あんだろ』って言い残して、用事があるとかで出て行っちゃったけど」

中途半端なゼロの顔真似と声真似を混ぜつつ、キキは猫スマイルで言った。

リムティツシユは、

「ああ見えて、ゼロは面倒見が良いからな」

と、いい香りが湯気発つコーヒーカップに口を付け微笑みながら言い、見た目と口調と中身がミスマッチなゼロが貰ってきた、まだ開いていない依頼封筒の表を見て、コーヒーを舌で味わいつつ封筒を返して裏を見た。

表には 依頼事 傭兵戦士団スリンガーへ と達筆な筆字で書いてあり、裏には魔術学校を示す蠟封印と、表とはとてもギャップのあるやたらと子どもっぽい筆跡の 魔術学校より という筆文字があった。

「……魔術学校からの依頼、か……」

リムティッシュは何かを思い出すように少し上目をし、

「まさか、また失敗したキメラの始末とかじゃないよな……」

と、思い出した事に苦笑を浮かべつつ言った。

「んん〜。……あの時はゼロも機嫌悪くなってたから、さすがに自分でもらってくるとは思えないけど……。それに今回はゲヴちゃん用にもらってきたっばいから、あの時みたいなのではないと思うよ」  
キキはお皿を拭くのを再開しつつ猫スマイルをやや苦笑色にして言いつた。ちなみに、「ゲヴちゃん」というのは、早々にキキがゲヴラーに付けた呼び名である。なんのヒネリもない呼び名である……。

と、噂をすれば何とやら。ゲヴちゃんことゲヴラーが、頭の上にフェアリーなアキを乗っけて階段を降りてきた。

彼はまだ眠たそうに少し背を丸めて、頭上のアキが指差す食堂のカウンター席へコテコテと木製の床を鳴らして移動し、

「おはよう」

食堂カウンター席のリムティッシュの左隣に腰を下ろす。

「……おはよう」

と、コーヒーカップに口を付け、視線だけをゲヴラー向けつつリムティッシュ。

「おっはつよあ〜。よっ、ゲヴちゃん」

と、お皿を拭きつつ、新しいオモチャを発見した子猫のように満面の笑顔でキキ。

「で、ゲヴちゃんは、朝はご飯派？ パン派？ どっちもあるけど？」

頭の上にクエスチョンマークを無数に浮かばせて訊いてくるキキに、ゲヴラーはしかし少しの思考する間を置いてから、諦めたように口を開く。

「……えっと。オレ、払えるご飯代金持っていないんでっうえ

」

クワツ！ と、目を見開かせたキキは、ネガティブ全開で言おうとしたゲヴラーの襟首を右手一本でガシッ！ とホルドし、カウンターに身を乗り出しつつゲヴラーの眼を窺うようにグツと顔を近づけて、

「いいかいゲヴちゃん。キミはもう傭兵戦士団スリンガーの一人なの。私達はお仲間の事情を知っていてお金貰おうとするほど小っさくないの。だから」

キキが口を開く度に鼻頭に吐息があたってこそばゆいうえに、キラキラとダイヤモンドのように輝く彼女の瞳を間近で見ても魅入られそう、耳が熱くなっているのが自分でわかる。

「このフレンチトーストを食ええ！」

鼻に吐息が掛かるほどの近距離から一気に身を離し、彼女はダンッ！ と、おいしそうな甘い香りを放つそれをゲヴラーの前に置いた。

ゲヴラーが、えっえつと若干困惑していると、

「オリジナルブレンドモーニングコーヒーも付けてやるう！」

と、口調は荒々しく手元は慎重にキキはコーヒーを出した。

コーヒーを口に含んで香りと味を楽しんでからリムティッシュは少しだけ身を動かし、ゲヴラーに向き直り、穏やかになんでもないことのように言う。

「細かい事は気にするものじゃない」

「そうだよっ！」「そうですよお」

と、キキもアキもウンウンと頷いた。

「それに、フレンチトーストもコーヒーも美味しいぞ？」

と、穏やかに微笑んで、好き嫌いをする子どもに語るようにリムティッシュは言った。

「……………そうだね。それでは、遠慮なく いただきます」

「はい、召し上がれ」

お皿を拭くのを再開しつつキキは猫スマイルで優しく応えた。

しかし、リムティッシュのゲヴラーを見る夜空のような瞳には、

本人も気づかない程度の哀しみ色があった。それはどこかで、ゲヴラーが思考する間の内に、なにを思っていたのか分かっていなかったのかもしれない。

自分が、朝はご飯派なのかパン派なのか、それすら思い出せない、そんな彼の哀しい気持ち。

しばしの時を経て、ゲヴラーが朝食を食べ終わった。

「ふう」

と食後の淹れたてコーヒーで一息ついたゲヴラーの隣、《とあるハンターの発掘口マン》という題名の史実ハードカバーな小説を読みながら、キキお得意のカフェ・ラテを楽しんでいたリムティッシュは、それに枝折を挟んでパターンと閉じる。

そしてリムティッシュは、先の依頼封筒をゲヴラーの前に差し出す。

「さっそくだが依頼だ」

ゲヴラーは差し出された封筒を手に取り、リムティッシュがしたように依頼封筒の表と裏を見る。

「……………魔術学校？」

小首を傾げて疑問を口にした後、封を切って良いか視線で訊ねる。

「これ使つてえ〜よっ」

と、キキが、何故か常に装備しているヒップホルスターから、鏡としても使えそうな程に研ぎ澄まされた投擲ナイフを差し出す。一瞬、ゲヴラーは微かに驚いてから、キキの投擲ナイフを受け取り、シュツと一瞬、指先に力を加えただけで封を切る。恐ろしいほどの切れ味である。

「……………ありがとう」

キキに投擲ナイフを返却してから、封筒の中から高級質な紙を一枚取り出し、三つ折りにされていた紙を開き、書かれていた事を口に出す。

「 昼頃、城下西の魔術学校受付へ来られるべし ……」

「……ん？ それだけかいにやゲヴちゃん」

「え、ああ、はい」

疑問符を頭の上に浮かべて訊いてくるキキに、ゲヴラーは高級紙を無駄に贅沢に使った依頼書を見せた。

「ありや、ホントだ。……こりやまた、どえらい手抜きだにや」

「手抜き……なんですか、これ」

ゲヴラーの問いに「うん！」と、ウエイトレス兼、依頼受付嬢なキキは少しだけ得意げに説明をする。

「本当はねっ、依頼書には、依頼主の名前、住所、依頼内容の簡単な説明、契約金の額、依頼成功報酬の額、などなどを書いてもらわないと、私が依頼掲示板にこんな依頼が来てますよおっって張り出せないのよ。まあ、今回は特殊だから掲示板に張る必要なかったんだけどね」

ちなみに、依頼掲示板というのはカウンター席を左側へ行った突き当りの壁全体 掲示板というよりは宣伝チラシが無数に貼り付けられているだけみたいだが のことである。そして仕事を欲する者は、この無数の中から自分で依頼を選び、キキに報告、正式な依頼書を貰い、依頼開始となる。のが、ここでの常である。

「……？ オレの受けるやつは手抜きで特殊なんですか？」

「ん〜、まあ、今回のゲヴちゃんの依頼は、私達がゲヴちゃんの実力を測るために用意したやつだから特殊ってだけなの。だから中身は普通の依頼とは変わらないよ。依頼書が手抜きなのは……向こうが忘れたのかなあ……まっ、詳細は向こうに行けばわかるよっ」

そこまで言うと、キキは「注文お願いっ！」と食堂に呼ばれ、「おっ、呼ばれた。んじゃまあ、無理はしないでがんばってね、ゲヴちゃん」

ニツと、猫スマイルで言い残して忙しそうに注文を取りに行った。実はこの安宿において彼女が一番多忙なのではないだろうか。と、そんなキキを視線で見送ってから、ゲヴラーはその視線を手抜きな依頼書に落とす。



「んん、昼頃か……。まだ、朝だし……。散歩でもして時間を潰すか」

少し思案するように眉を寄せ、そしてすぐに楽しい事を見つけた子どものような微笑んだ表情で彼は言った。

もし、今この場に過去の彼を知る者が居たら、「実に彼らしいな」と思っていたであろう。が、今のこの場にはその様な人物の姿はない。

そして、少し彼の事を理解しつつある。で、あろうリムティッシュユが口を開く。

「ゲヴラー、散歩のついでに付き合っしてほしい所があるのだが……。いいか？」

「別にかまわないけど。……。それに、良く考えればオレ、道とか分からないし」

頼りない困った顔で微笑む彼が、自覚できない程度に、何故だかリムティッシュユには儚くも愛しく感じられた。

【序】第一章：五節　く後悔、先に立たずく

一通りの準備を済ませてから、ゲヴラー、リムティッシュ、アキは踊るギョートン亭を出発し、今は首都城下の東にある“大通り商店街”と呼ばれる大通りを歩いている。

首都城下の東に位置する踊るギョートン亭から少し歩けば、この商人達が集い、人々が休みなく行き来する大通りに出るのだ。

ちなみに、土地勘のまったく無いゲヴラーは、ここが首都の東である事すらわかっていないが、彼が向かうべき魔法学校は、首都の中心に位置する城を隔てた真逆の方向たる西である。

「通りの突き当たりにある」

リムティッシュは商店街をまっすぐ貫けた正面の大きな門を指差しながら、辺りを物珍しそうに眺めているゲヴラーに、

「あの門の向こう側の道で、私はお前を見つけたんだ」

と言う。が、言われたゲヴラーは、最初の一瞬、まるで他人事のように希薄な反応を見せ、次いで理解し、困った様な笑い顔で正面の東門を眺めた。

実際、彼の中ではほとんど他人事と変わりなかった。記憶の始まりは見慣れない天井、それ以外はない。その前が存在すると、頭はどこかで理解していても、現実には実感できないのだ。リムティッシュがゲヴラーと初めて出会ったのは東門の道でも、ゲヴラーがリムティッシュに出会ったのは踊るギョートン亭の中。

リムティッシュは、何気ない一言から生じた些細な事と思える差異が、簡単に人を傷つけられるという事を改めて理解した。自身の口から出た言葉のせいで、彼が浮かべる寂しそうな表情が視界に入ると罪悪感が生まれる。

「そつえば……」

そんな何気ない彼の一言に、一瞬、リムティッシュは心の中でピ

クツとした。何故、自分が彼の事をそこまで意識してしまったのかわからな……いや、心のどこかではわかっていたのであるが、今は無視ができた。

「そういえば、なんだ？」

「いや、大した事じゃないんだけどね。どこに向かっているのかなあ、と」

「ああ」

思い出したようにリムティッシュは言い、数歩、歩みを進めてから立ち止まり、

「ここだ」

と黒塗りの鞘に収まった剣を持っていない、空いている右手で何かの店を指差す。彼女が示す先にあるのは、外見では何の店なのか判断がつかない程に古びた　　というか倒壊寸前の木造建築物。

「ここは……何のお店なの？」

ゲヴラーは正直に訊いた。

「書店だ」

リムティッシュは端的に答え、いそいそと店内へと姿を消す。

プチ置いてけぼりをくらったゲヴラーは、自分の頭の上でまどろんでいる彼女の相棒たるフェアリーなアキに、

「本が好きなの？」

と、自分の額を見るような上目で問うた。

アキはほんの少しだけ思考するような間をとってから、

「……どちらかといえば、ぬし様は本が好きですけれど」

ここに来た目的は違うと思うのですよ。とは言わず、ただその美しくも愛らしい顔に、大切な相棒を哀れむような表情を浮かべたのだった。無論、その表情はゲヴラーには見えないのだが……

……

とある商店の平たい作りの屋根の上に、通りを見下すような大と小の影があった。影はそれぞれ闇色の燕尾服に身を包んでいる。

「まさか、“滅国の王女”と一緒に居るとは思わなかったなあ」と、鈴を転がしたような声色で言うのは、小さい方、華奢な印象の影。その微笑が浮かぶ口元には煙草が煙を揚げている。

「なんだ？ “滅国の王女”とは」

小さい方の影とは対象的な大柄でゴツイ印象の影が、野太い声で小さい影に問うた。

溜息と同時に煙草の煙を吐きながら、小さい方の影は呆れたように、しかし、どうでもよさそうに、

「君は世界情勢とかに興味ないものねえ。といっても、彼女について知ってる者は少ないけれど」

「で、結局なんなんだ？」

「アレだよ」

小さい影は思い出すように、左手の人差し指を立てて指揮をするように振り、

「第十四次作戦の……被害者？ かな」

微妙に語尾を曖昧に答えた。

「第十四次……ああ、アレか。……だが、そうだとすると、ほつといてもイイのか？」

大きな影は思い出したように言い、それから、自分の遙か眼下にある小さい影の横顔を見下ろすように窺いながら訊く。

「さあ。そこら辺を決めるのは、お偉い上の人達だからねえ」

そこまで言うと、小さい影はクルリと反転。吸っていた煙草を捨て、踏み出した右足で落ちた煙草の火を踏み消し、

「とりあえずは、現状を報告しに戻ろう」

言いつつ、小さい影が左足を踏み出した。と同時に、影の前方に暗黒色で長方形の壁が現れる。小さい影は何の躊躇いもなく、その暗黒色で長方形の壁へと歩みを進め、吸い込まれるように消えていく。大きい影も後を追うように、壁へとその大きな姿を消した。

暗黒色で長方形の壁もほどなくして風景に溶けるように跡形も無く消え、とある商店の屋根の上には、踏まれてグニヤリと歪んだ煙

草の吸殻のみが残された。

あれから四軒ほど書店を巡ったが、リムティッシュが望むものは無く、そして五軒目の店内で時計をチラリと見たリムティッシュは、そろそろ魔術学校へ向かった方がいいと判断し、彼女と彼と妖精は、大通り商店街とは真逆に位置する魔術学校を目指してトボトボと歩み始める事となった。

大通りを貫ける手前でリムティッシュが、  
「あつ」

と、思い出したように、とあるお店の前で足を止めた。

「どうしたの？」

ゲヴラーは不思議そうに彼女の横顔を窺う。

リムティッシュは、店先に置かれている それ をヒョイと持ち上げて、

「お前とアキのお弁当」

手早く店員さんにお金を払い、有無を言わずにゲヴラーのサイドポーチの中へ、人サイズの 幕の内弁当（お茶付き） と、体格の小さい妖精サイズの縮小版 幕の内弁当（お茶付き） をしまおうとしたが、やはり無理があったので、弁当屋のすぐ向かい側にある装飾品店で森林迷彩なバックパックを素早く購入し、ゲヴラーに装備させ、そこへ弁当を二つ収納した。

何かを言おうと口を開きかけたゲヴラーを遮って、

「人の好意は黙って受け取るのが礼儀だぞ」

リムティッシュはスタスタと歩みを再開し、背中越しに言うのだった。何をやっているんだ、私は、と微かに頬を赤らめているのを悟られないように。

「どんな中身なのか食べる時が楽しみですよ」

アキは、己のぬし様の今までなら見られなかったであろう一面に気づいているのか、あえて気づかぬフリをしているのか、ゲヴラーの頭の上で陽気に言うのだった。

呆気にとられて反応が鈍っていたゲヴラーも、そんな陽気に言うアキにつられて、

「そうだね」

と、本来の彼らしい微笑を見せ、艶やかな長い黒髪を微風にサラリサラリと漂わせながらスタスタと先を行く、紺のロングスカートに白いブラウス、左手の内に黒塗り鞘の剣という、彼女の背中を追って小走りに歩みを再開するのだった。

彼らは魔術学校の手前にある上り坂へとさしかかり、えっちらおっちらと若干急な傾斜を歩んでいた。

半ば上った所で視線を少し上方向へ移すと、坂の頂上に、赤いレンガで建造された小さなお城を思わせる魔術学校の校舎が、静かにたたずんでいる姿が見えた。

ほどなくして坂を上りきる。

右に並木道、左に住宅街を見つつ、正面に構える木製の大きな回転扉を潜ると、ゲヴラーの第一目的地たる魔術学校受付は、もう目と鼻の先。

受付には、触ったら気持ち良さそうな狼系の藍色な耳をした亜獣人の女の子（亜獣人は見た目と実年齢が一致しないことがあるのでこの場合は見た目のみで判断）が、好い匂いを漂わせるお弁当を食べながら座って居た。彼と彼女と妖精さんのお腹は「ぐう」と鳴ってしまいそうになったが、どうにか気合で押さえ込み、羞恥を回避。

受付の彼女はゲヴラー達の姿を発見すると慌てて食べるのを止め、受付の仕事をしようとするが、口の中にはまだお弁当の残りがあり、それらをゴクンと飲み込む間をおいてから、

「ご用はなんでしょう？」

ニコリと、キキとは違う、チラリと犬歯が覗く健康的で魅力ある笑顔で応対した。

ゲヴラーはサイドポーチから先の 手抜きな依頼書 を取り出し

て、

「傭兵戦士団スリンガーの者ですけど……」

と言いながら、受付嬢な狼亜獣人女の子に依頼書を見せた。

彼女は見てすぐに理解し、

「校長の所までご案内します」

と言い、席を立った。

受付のカウンター内から姿を見せた彼女のお尻には、触ったら気持ちが良いそうな、耳と同じ藍色な“ふさふさ尻尾”があった。彼女はキキとは違う、獣人の血を濃く受け継いでいる亜獣人のようである。

「それじゃあ、私はここで」

リムティッシュは、受付嬢について行こうと歩み始めたゲヴラーに告げ、

「うん、それじゃっ」

告げられたゲヴラーは左手を左腰に挿した刀の柄頭に置いて、右手を軽く上げて応えてから、亜獣人な受付嬢の後を追った。

リムティッシュは、歩み行くゲヴラーの背中を見て、初めて自分の子どもをお遣いに行かせる母親のような気持ちで後ろ髪を引かれつつ、回転扉をくぐったのだった。

通された校長室に居たのは、眼にしみるような純白の長衣に、流れるような銀色の長い髪、黄金色の双眸。そして、エルフ族の特徴たる尖った耳を持つ、柔和な表情の人物だった。

一見すると男なのか女なのかわからなかったが、

「君がゲヴラー君ですね。話はゼロから聞いていますよ」

渋く落ち着きのある、鋭い知性を秘めていそうな男性の声がそこに有った。

まあ立ち話もなんですから、と案外質素な魔術学校校長室にある革製のソファアをすすめられ、ゲヴラーは断る理由も無いので、すすめられたソファアに腰を落ち着けた。

そして、ゲヴラーの向かい側に腰を落ち着けた彼は、

「まずは自己紹介ですね」

と言い、ヴァーグナーと名乗った。

それに釣られてか、条件反射でか、ゲヴラーも名乗り、そんな彼の頭の上から降りることなく、その場で正座しアキも名乗る。

「それで依頼なのですけれどね」

そこでヴァーグナー校長は席を立ち、背後にある本棚の引き出しから依頼書と同じサイズの封筒を取り出して、再びソファに腰を下ろした。

「この手紙をエルフ村のセシルという人物に届けて欲しいのです」

回転扉から依頼遂行の為にエルフ村へと向かうゲヴラーとアキへ、「君達が帰ってくる頃には、スリンガーの受付嬢さんに報酬とかその他色々は渡しておきますから」

と言い、ヴァーグナー校長は二人を見送った。

見送られたゲヴラーはサイドポーチに手紙をしまい、とりあえずエルフ村の在る方向の門たる西門を、アキをガイドにして目指した。大きな回転扉を出ると目の前には先ほど上ってきた坂道が見えた。が、頭の上の妖精さんは、

「西門はこっちですよ」

ゲヴラーの額をペチペチと叩きながら、進行方向を左に、並木道を抜けるルートを指示した。

「んっ、わかった」

ゲヴラーは自分の額を見るような上目で応え、歩み始めたのだ。た。



【序】第二章：一節　～黄昏の再会～

転

偽りのない言葉で、話せる日を願って

第二章　～黄昏の再会～

昼食時の賑わいが落ち着きをみせた踊るギョートン亭。  
その食堂。

カウンター席に腰掛けて、着古した白い半袖シャツに膝までのジパン、肩口でカットされた外ハネな赤茶色の髪と、スタイリッシュな雰囲気美人さんでありながら、白いエプロンを装着して、どこか家庭的なお母さんめいた雰囲気を備える、キキはお茶を飲んで一息ついていた。

唐突に、ドンツ！ と乱暴に木製の扉が開け放たれ、木製床を踏み鳴らし、影が一つ侵入してくる。

キキは茶をすすりながら席を立ち、開け放たれた扉の前で仁王立ちをするその影へ近づいていく。

その影人物は黒かった。漆黒色の鎧はドス黒いオーラを放ち、右眼は漆黒の眼帯に覆い隠され、眼帯に覆われていない左眼はギラリと猛禽類の如き殺気を放ち、団欒をしていた数名の客たちに無用の恐怖感を植え付ける。

そんな危険を体現したような人物に、

「よつ。今日は早いねえ」

キキは馴れ馴れしくポンツと鎧を叩いて接した。

「ああ」

ギロリと左眼が動き、自分を見上げながら茶をすするキキを睨む。事情を知らない客たちが、若いウェイトレスの愚行に怒り覚え、自分達に降りかかるかもしれないとぼつちりに力チ力チと食器と奥歯を鳴らす。

そんな食堂を横目でチラリと見たキキは、

「あゝあ。お客さんを怖がらせてどうすんのさあゝ。ほおゝら、スマイルスマイル」

と、お手本とばかりに猫スマイルをギロリ眼帯へ向ける。

ギロリ眼帯はウザツタそうに、

「この顔は生まれつきだ」

キキを避けてカウンター席へと向かう。キキはギロリ眼帯　　ゼ

ロの後をひよひよいと子猫のように追いつつ、

「まあ、その顔が生まれつきなのは知ってるけどね。ゼロはもっと笑った方がいいと思うのよゝ」

と言い。そして追いつき、ゼロの横から覗き込むような上目で、

「ゲウちゃんの時だってさ、厄介事はごめんだみたいに憲兵云々って言ってたけど、ホントは行く当てもなく彷徨うよりも、国に保護してもらった方が衣食住に困らず安全だから、ああ言ったんでしょう？？」

素直じゃないなあゝと、漆黒鎧の横腹をツンツンしながら言った。

「うるせえ、黙ってる」

カウンター席に着いたゼロはキキから茶をひったくり、一気飲みする。

「ああっ！」

茶をひったくられたキキはスットンキョウな声を上げ、

「なんだ」

ゼロは面倒くさそうに応える。

キキはポツと微かに朱色の頬に両手を当て、腰と二又尻尾をクネ

クネ、

「かつ、かんせつキツスウ〜」

と楽しそうに恥らいつつ言う。

「くっだらねえ」

一言で切り捨てて、ゼロは茶のお代わりを要求する。

「くだらないってえ〜。ゼロには乙女心がわからないのかねえ。命短し、恋せよ乙女っていうでしょ」

口を尖らせて言いながらも、嬉しそうにキキはカウンター内へ移動し、新しく茶を淹れる。

「そもそもお前、乙女って齡じゃッ」

コンツ！ と、ダーツの矢が的に命中した時のような音がした。

それまでそれなりに和みの雰囲気を取り戻しつつあった食堂は凍てついた。

ゼロの右眼漆黒眼帯に、鏡のように研ぎ澄まされた投擲ナイフがすまし顔で一振り刺さっていた。

投擲したのはもちろん、

「はあい。特選ほうじ茶だよお」

鼻歌交じりに茶を淹れていた、猫スマイル娘さんである。

ゼロは無言で投擲ナイフを引き抜き、その研ぎ澄まされた投擲ナイフを鏡のように使い、眼帯部位を見た。

深さ五ミリほど菱形の切先跡があった。

「……………」

普段大人しいヒトがキレると、とても怖いものである。ゼロは無かった事にしようと思ひ、出された茶をすすりながら話題を変えた。

「あいつはどうした？」

「あいつ、とはゲヴちゃんのことかいにゃ？」

「ああ」

「ゲヴちゃんならゼロに渡された依頼を、魔術学校に受けにいったよ」

「そうか、なら後のことはヴァーグナー達に任せておけばいいだろ」

「ずいぶんと他力本願だねえ」

ゼロは茶をすすり一息入れてから、

「一ヶ月ほど、留守にするからな」

と言った。

キキは単純に驚いて目を見開く。

「それは、それはずいぶんと唐突だね」

「まあな」

と応えつつ、ゼロは茶菓子を要求。

キキは背後の棚をゴソゴソと探りつつ、

「どんな依頼受けたの　あつ、ヨウカンあった。ヨウカンでいい？」

テキトウに切り分けたヨウカンに爪楊枝をプスリと刺して差し出す。

ゼロは差し出されたヨウカンを受け取って、一口食べてから、

「今、果ての荒野が結構ヤバイ事になってるってのは知ってるか？」

キキは自分にお茶を新たに淹れ、切り分けていない塊のヨウカンを一口かじって、ズズズツと茶をすすってから、

「あれでしょう、アメルが陸間大鉄橋を狙っているとか、いないとかで、ルティークとギスギスしてるってやつでしょう？」

陸間大鉄橋とは、建造時に労働が過酷を極め数え切れない数の死者を出し、あと少しで完成という所で道に敷くレンガが無くなり、苦肉の策として死した仲間の骨を道に敷き詰め完成させた、大陸間を跨ぐ大鉄橋である。

南の軍事国家　アメル合衆国がこの大鉄橋を制すると、海峡を隔てた先に在る南の連邦国家ルティークへの進攻がスムーズになるゆえにルティークは陸間大鉄橋を死守する為、大鉄橋手前に軍隊を配備しアメルを足止めする事にした。

その手前の場所が“果ての荒野”と呼ばれる荒野で、大鉄橋とアメル、そしてロートワールに接するという、どの国にも属さない三

角領域、緩衝地帯なのだ。

ゼロは肯いてから、

「でな、その国境近辺の村へ向かう商隊に護衛を頼まれてな」

「ふーん」

と、キキは何故か不服そうにヨウカンを口に放り込む。

「なんだ」

ギロリとゼロはキキを睨んだ。キレているわけではない。態度の変化が気になるのだ。

「べつにーなんでもないさつ。で、何時出発するの？」

面白くないとでも言いたげに唇を尖らせつつも、ちゃんと時間を訊いて行動を把握しようとするあたりはプロとしての経験値の賜物か。

「まあ、これから準備して……、夕方までには出るな」

ゼロはヨウカンを咀嚼しつつつてキトウに答える。故に、

「……そう」

と、キキが少し、ほんの少しだけ二又尻尾をしゅんとさせ、寂しそうな眼差しをした事に、ギロリ眼帯は気づかない。

【序】第二章：二節 〈黄昏の再会〉

「過去とは、なかなか割り切れないものだな……」

とリムティッシュが言った。彼女の眼は遠い空の、さらにその向こう側へそそがれていた。まるで、なくしたものを探し求めるように。

ゲヴラーと別れた後、書店巡りをしていたリムティッシュは、巡る途中で購入した アヒルおばさんのお手製クッキー と、アヒルおばさんの特選ミルクティー が入れられた紙袋を片手に、城の前噴水広場を訪れていた。そして、背後に城を、正面に水飛沫を上げる噴水を見ることができる位置のベンチに腰掛けている。

「書店を巡って“アレ”を探していることも……、なにより“あなた”のことを……」

どこか遠くを見上げながらリムティッシュは言い、そして思った。何一つ、私は割り切れていない。

過去の記憶を失う……か。ゲヴラー、私はお前がうらやましいよ。思い返しても苦痛と憎悪しか呼び起こさないような過去など、持つ事に何の意味があるのだろうか。

しかしお前に出会えたのも、この過去のおかげ……

結局、今の私を動かしているのは、失いたい過去、か……

「……いまさら何を考えているのだろうか、私は」

リムティッシュは自嘲めいた笑みを口元に浮かべた。

ふとした視線の先に、噴水の周りではしゃいで遊ぶ子どもたちが見えた。数瞬の間後、「はぁ」という溜息が出た。

「ダメだな。一人になると。これではゲヴラーのことを言えないな」  
彼女は首を横に振り、大きく深呼吸。乱れた髪を指先で整える。

そして脇に置いていた紙袋に手をつ込み、自身の顔ほどの大きさのクッキーを一枚取り出し、噛り付く。勢いに任せてモリモリと噛

り付く。しつとりとした食感のクッキー。口の中いつぱいに広がる美味しい甘さの幸せが、ネガティブな気持ちを包み込み、しだいに自然と表情がほころぶ。

が、幸せを飲み込んだ瞬間　　リムティッシュの表情は凍りつく。幸せを詰め込みすぎて、喉に詰まってしまったのだ。必至の形相で紙袋に手をつ突っ込み、まさぐり、ミルクティーの小瓶を引っ張り出す。そして味わうこともなく、一気に飲み干す。

「　　っはあはあ……。はあ、何をしているのだろう、私は」  
ふと、視線を感じた。ミルクティーをあおった姿勢のまま、少しだけアゴを引いて、眼を動かさず、視線を感じた方角を見る。

噴水の周りで遊んでいた子どもたちが、無邪気な好奇の眼差しを向けていた。

リムティッシュは、なぜだか急に気恥ずかしくなり、慌てて平静を装おうとした。が、見事に失敗した。紙袋にしまおうとした小瓶を滑り落とし、転がった小瓶を拾おうとして、スカートの裾を踏み、転び、受身を取ろうとして、散歩中の犬に頭突きを喰らわせる……。狼狽したリムティッシュの行動は、見事に無邪気な子どもたちのクスクスという笑いを誘ったのだ。

その頃

ゲヴラーは走っていた。

狩人に追われるウサギの如く。

ロートワール国の西にある樹海のなかを。

道を指示し前方を飛翔するアキの背を追い、汗の滴を飛ばしながら、両の手を振って。命懸けで。

その背に追いつくは異形の影。影、影、影。

事は、今回の目的地たるエルフ村が存在する樹海　　ロートワール国首都の西門から徒歩で数時間の距離　　の入り口手前で、彼らが休息をとった所から始まった……

行きかけに与えられた 幕の内弁当（お茶付き） を食べ終わり、お茶を飲んで、

「ふはあ〜」

と二人揃って午後の青空の下、大きな古木の木陰で一通り和み、そろそろ出発しようかなと、ゲヴラーがバックパックに食べ終わったお弁当のゴミを片付け始め、それが終わるのをご機嫌なアキは古木の周りをグルグルと、エメラルド色のその翼を使い、飛び回りながら待っていた。

そして三週目にアキが、ちょうどゲヴラーが居る位置の真反対、古木を挟んだゲヴラーの背後へさしかかった

その時。

異変に気がついたのはアキだった。

ポコ。

何かの音が聞えた気がして、本能的にアキは空中で静止、耳を凝らした。

ポコツ、ポコポコ。

その音は、まるで今朝キキがコーヒーを火にかけている時に聞いたような、液体が沸騰している時に聞くような音だった。

ポコツ、ポコポコ。ポコツ。

ゲヴラーとアキはお茶を飲んだが、火は使用していなかった。飲んだのは小瓶に入れられたお弁当付きの物だけだ。木々のざわめきともあきらかに違う。アキは不審に思い、辺りに食い入るような視線を向けた。さらに耳に神経を集中させ、音源の位置を探った……。

ポコツ、ポコポコツ。ポコツ！

ゴミを片付け終わり、バックパックを背負った瞬間、ゲヴラーは首筋の辺りにチリチリとする怖気のようなものを感じた。それとほぼ同時、大気を震わせる衝撃音が腹に鼓膜に響く。ハツとするよりも速く、身体が勝手に動き、跳び込み前転の要領で回避行動。瞬間、



背後で無理矢理引き千切られ断末魔を上げる樹木の声、そして壮絶な地鳴り。

ゲヴラーは姿勢を低く保ちつつ左足爪先に身体の軸を移し、速攻で抜刀ができる体勢をつくりながら、断末魔と地鳴りがした方へ向き直る。

そこには、今まで優しく木陰を作り佇んでいた古木が、根元の辺りから無残に破砕され、その巨体を横たえていた。

ゲヴラーはそこでハツとする。古木が倒れ掛かってきたことではない。自身がいつの間にか回避行動をし、抜刀の体勢で辺りを警戒している事に気がついて。彼は恐る恐る確かめるように手を開いたり閉じたりした。自分の身体に触れても、実感がなく。鏡を見ても、それが自分だとわからなかった。そんな身体が……

「……勝手に、動いた？」

まさか、と彼は自分で否定する。しかし彼には怖かった。自分という実感のないこの身体が勝手に動いたという事が。それがたとえ生存本能によるものだとしても、これが自分ではないのでは、という可能性を見てしまう気がして……

ゲヴラーは気を紛らわせる為かのように、なぜ突然に古木が倒れ掛かってきたのかを探ることに意識を集中した。

鞆口に左手を添え、形だけはそれっぽく臨戦態勢をとり、辺りを探る。と、倒れた古木の真ん中辺りに淡い光が見えた。

警戒しつつ、摺り足で近づき窺ってみる。とそこには、球状の淡い光の膜に包まれたアキが、

「あうう〜」

と目を回して、古木に減り込んで居た。気を失っているようである。

ゲヴラーはそつと手を差し伸べる。と、指先が淡い光の膜に触れる。それは一見すると儂く消えてしまいそうな印象を与える淡い光の膜であったが、指先にある触感ハッキリとしており、印象とは違う甲殻な感じであった。

軽く力を加えてみてもその膜は破れそうになかったので、ゲヴラーはその膜ごとアキを自分の掌にすくい上げた。よく見ると、淡い光の膜の内部でアキは仰向きに浮かんでいた。古木に減り込む程の衝撃を受けながらも、傷を負っている様子は見られない。どうやらこの膜は衝撃から内部のモノを守る構造のようである。

どうやってアキを起こしたもののか、ゲヴラーがそんな事を思索している時だった。

ゾクリ、と背筋に悪寒が走った。何者かに見られているような、そんな感覚に囚われ、辺りを不安そうにゲヴラーは見回す。微風にゆらめく木々の葉摩音が、無闇に強調されて耳に入ってくる……

突然、微風が凪いだ。

同時に、不可解な音が、

ポコ。

何か液体が、

ポコツ、ポコポコ。

沸騰した時に発するような、

ポコツ、ポコポコ。ポコツ。

音がしだいに、

ポコツ、ポコポコツ。ポコツ！

近く鳴り、

ポコツ！　ポコポコポコポコポコツ！

ポコツ　……………

唐突に止む。

同時に、背後から強烈な悪寒の気配がした。ゲヴラーは表情を強張らせながらも、振り向いた。そこには

「　ひっ！」

自分が居た。

影のように、黒い霧のようなものを漂わしているが、その姿は踊るギュートン亭の踊り場にしつらえてあった、何気なく見た大きな姿鏡の中で、初めて発見した自分の姿だった。それが数歩先に、

無表情にたたずんでいた……

あまりの異常さに、言葉も無くただ呆然としていたゲヴラーの聴覚が、先ほどと同じような、液体が沸騰する時のような音を聞いた。はたとしてゲヴラーは、黒い霧を纏う自分に似た何かが見界から完全に外れないように視線を巡らせて辺りを探った。と、木々の隙間、木陰から幾重ものゲル状の闇色が煮えたぎる液体のように、ポコポコと気泡を弾けさせながら這いずってこちらへと近づいて来るのが見えた。それらは一定以上こちらに近づくと動きを止め、さらに激しく煮えたぎるように気泡を弾けさせ、湧き上がるように、人の輪郭を形成する。そして、それはしだいに鮮明な人形へと、ゲヴラーを模した姿へと変貌していく。

あるいは自分は向こう側に居る存在なのではないのか？ そんな考えが脳裏をかすめる。

ゲヴラーにはそんな考えを否定するかのように、じりじりと後ずさることしかできなかった。

煮えたぎる音が耳障りだったのか、偽ゲヴラーが五体ほど出来上がり、もう一体が煮えたぎっている最中、アキが、

「んうんう」

と目元をコシコシしながら目を覚ました。するとアキを覆っていた光の膜は溶けるように消え、若干浮遊していたアキはポテツとゲヴラーの掌へ尻餅をつく。それと同時に後ずさる限界が訪れ、踵が横たわる大きな古木に触れる。

一瞬、ゲヴラーの内側に悲観的な気持ちが生まれたが、  
「さつきは不意打ちにやられましたけどお。次はそう簡単にいかないですよ」

と、エメラルド色の淡い光を翼から放ちながら、ヤル気満々に顔の前に浮かび上がったアキを見たら、何故だかスツと悲観な気持ち姿を消したのだった。自信満々な妖精の魅力で眠れる勇気が呼び起こされたのか、あるいは眠れる本質の気まぐれなのか……。

最後の偽ゲヴラーが形成される。

ゲヴラーは左手親指で腰に帯びた打刀の鍔を弾き、右手で柄を握り、ゆつくりと引き抜き、鞘の中で休んでいた刃を起こす。それに合わせるかのように、偽ゲヴラー達も腰に帯びた刀を抜刀した。どうやら姿以外にも擬似できるらしい。

左手を腰の鞘口に置き、右下段に刃をやったまま、小さな摺り足でゲヴラーはアキより少し前方へ出る。意識してやった訳ではなかった。ただ、その時にそうした方がいいであろう事を、身体が勝手にやっているのである。

身体に刻まれた記憶には、いかなる力も作用しないようね。

唐突に、本当に唐突に、頭の中へ別の声　女性のものだろうか  
が割り込んできた。

とっさにアキを振り返ったが、アキは舞うように振袖を揺らしつつ、既に術発動の為、ゲヴラーには理解できない言語の詠唱を開始していた。つまり、アキではない。

ゲヴラーは視線を戻し、偽モノ達が視界から外れないように視線を巡らせ、辺りを探る。

ああ、探しても見えないわ。もう少し離れた所に居るから。

眼球の動きすら見られて……いや、読まれている？

「誰？」

この状況において案外冷静な自分が居て、頭の隅の方で少々驚いたが、今は冷静な自分の方が勝っており、先ほどのように不安さで混乱しない確信があった。

お節介な忠告者。とでもいうのかしら。

「忠告？」

ええ。今、貴方の前に居るソレね……

とその時。もっとも前に居た偽ゲヴラーが、抜いた刀を地に滑らせながら、異常な程の前傾姿勢で、回避という言葉を忘れたように愚直に突進して来た。

ゲヴラーはとっさには動かず、単調な動きで突っ込んでくるソレが、自身の踏み込んだ一步の範囲内に来た瞬間、重く踏み込み、右

手の刃を切り上げた。顎から脳天までを力ち割る刃へ、ヌツトリとした流動的な触感が伝わる。見える切り口は、打刀の切れ味もあいまってか、スツパリとした凹凸の一切ない切り口だった。ソレは動物的な内臓器官を持つていないようである。

頭部を割られたソレは、つんのめるように体勢を崩し、勢いのまま地面に突っ込む。反射的にゲヴラーは半身を移動させ、かわし、目の前に倒れ伏すソレへ、切り上げられ上段に位置する打刀の落下する重さを利用して、重く刃を振り下ろし、二撃目を加える。後、小さく飛び退りソレと距離を取り、打刀の柄を両手で握り直し、正眼に構えなおす。

まるで自分で自分を斃しているようで、気分はよくなかったが、しかし自分自身への認識が希薄な事が皮肉にも幸いしてなのか、あるいは自身とソレとの違いを証明したくて必至だったのか、それ以上の感覚は生まれなかった。

偽ゲヴラー達が一齐に動く。どうやら、愚直突進の偽モノはこちらの出かたを探る為の捨て駒だったようだ。

内臓器官のない頭でも、どこかにそれなりの知性が有るらしい。こちらを包囲するつもりなのか、正眼の打刀を中心に見立てて、右に三体、左に二体と広がった偽モノたちは、こちらの一足一刀の間合いから離れた外円を沿うように、剣先を向けてけん制しつつジリジリと包囲網を形成しようとしている。

アキを守るためには、絶対に背後を取られるわけにはいかない。ゲヴラーは正眼に構えた打刀を、左に刃、右に峰が向くよう刀身を傾斜させ、体を半身に平正眼の構えをとる。そして体当たりするように、右三体の中でもっとも手前に居る一体へ向けて刺突を放つ

ように見せけん制しつつ、軸の足に力を注ぎ込み 左へ跳んだ。一飛びで左二体内、手前に居た一体の前へ移動したゲヴラーは、着地と同時に、跳びの勢いの付いた刃で偽モノの刀を打ち下し、返す刃で胸部から頸部まで深く切り上げ、さらに踏み込み、上がった

刃で追撃の刺突を喉元へ放つ。そして最後、とどめとばかりに刺さった刃を抜くための蹴りを偽モノへ与える。

蹴られた勢いで後ろへと倒れる偽モノから、ヌットリと刃を引き抜き、動物相手ならば油脂を飛ばす為の振り下ろして打刀を左下段に移動させ、右足を引き、二体目の偽モノが身体の正面へくるように構えつつ、視界隅に居る右側面の偽モノへも刃を届けられるように摺り足で立ち位置を移動した。その時

「伏せてくださあい」

背後からアキの声が聞こえ、ゲヴラーは反射的にその場で片膝を付いて姿勢を低くした。

頭上を吸い上げるような勢いの突風が砂を巻き上げながら、威力を増しつつ流れ、辺りの木々が激しく揺らめき葉を散らす。ゲヴラーは左腕で目元を覆い、巻き上がる砂埃から庇いつつ、偽ゲヴラー達の様子を窺う。

偽モノ達は過剰な前傾姿勢のまま四つん這いになって、突風が過ぎ去るのを待ち、過ぎ去ったと感じるやいなや、四つん這いのまま突進を開始しようとした。が、そうはならなかった。動こうとした瞬間、偽モノ達は小さな破片となり、ポトポトというモツタリした音と共に崩れ落ちたのだ。

「風刃乱舞の威力おもいしつたかあですう」

アキは小さな胸を反らしつつ言う。ゲヴラーはリムティッシュがアキを誇らしげに語っていたのを思い出し、確かに侮る事なかれだと、胸の内では納得した。一撃で四体の敵をバラバラに解体してしまっ、これでもし対人戦闘で行われていたならば、さぞ凄惨な光景が広がっていたことだろう。味方としてはとても心強い。だが、もし敵に回したら、これほど手強い事はない。

これはまた見事に解体したものね。

例の声がゲヴラーの頭内に聞こえ、

「だ、誰ですかあ!？」

とアキがキョロキョロと辺りを見回す。今度はアキにも聞こえた

ようである。

「アキにも聞こえた？」

「はいですう。誰なんですかあ」

答えてあげてもかまわないのだけれどね、風神に愛されし小人よ。しかし今は時間が無いのよ。

「時間が……無い？」

ゲヴラーは眉を寄せ、

「どういうことですか？」

とアキが小首を傾げる。

さつき言いかけた事だけれど、そこで泥濘みたくなっている魔物ね、物理的なダメージでは足止め程度の効果しかないのよ。

「まさか……」

ゲヴラーは自身が仕留めた一応人の形を保つ偽モノ二体に眼を向ける。頭部力チ割った切れ口が、動物なら内蔵をゴツソリこぼしていそうな切れ口が、それぞれ先ほどより若干小さくなっているように見て取れた。

「……再生している？」

時間があまり無い、という訳はご理解いただけ？

「アキの魔術でどうにかできないの？」

少しすぎるような視線をアキに向けるゲヴラーだが、

「再生系……、たぶん風に属する魔術ではダメだと思つのですよあ。

ゴメンナサイですう」

風を司るフェアリーは自身が属する風系魔術を自在に使いこなす事ができる。だが、属さない系統の魔術はほとんど扱えず、誇るべき風の攻性魔術は外的にダメージを与えるものがほとんどで、今の状況には適していないのだった。

とるべき手段は、二つに一つだと思つのだけれど？

「それは詰まり……」

ゲヴラーは駆ける。

狩人に追われるウサギの如く。

ロートワール国の西にある樹海のなかを。

導く声を聴き、前方を指示し飛翔するアキの背を追い、汗の滴を飛ばしながら、両の手を振って。命懸けで。

いったいどれほど駆けたのだろうか。獣道のような雑に踏み固められた所を駆けてはいるが、辺りの風景といえば、木、木、木、木の葉間ばかりで代わり映えなく、距離、方向感覚はもはや曖昧。木々の葉間からこぼれる暖かい光だけが、今は夕刻前であると教えてくれる。

ゲヴラーは自身が案外、体力のある身体であることに感謝しつつ、頭の片隅で多々思考していた。そもそもアノ声を信用しても良いのだろうか。まあ実際、アノ声言っていたように、偽モノ達は復活し、ゲル状の体を地に這わせながら、結構な速度で追ってくるのだが。わざわざ樹海へ逃げなくともよかったのではないかとか、時を挟んで冷静に思ってみると考えつくのだ。

大きな嘘を信じ込ませる為には、少々の事実を含ませるものである。あるいはゲル状の闇色たちは、大きな罠へのカバーストーリーではないのか……

と、一人で思考していたところで答えなど出てくる筈も無いので、ゲヴラーは前方を飛翔するアキへ問いかけてみた。

するとアキは、後に目でも付いているのか、こちらを向いて飛翔しつつ、

「んうゝ、大丈夫だとおもうのですよ。悪い人には感じないですし。むしろおゝ、暖かくてポカポカした感じの人だとおもうのですよおゝ」

ほんわかと答えた。

アキがそう言うならば大丈夫なのだろう、と思えてしまうのは何故なのだろう。これもフェアリーのもつ魅力の一つなのだろうか。ゼロが自分の時に「筋の通らねえ」と言いつつも納得していた心情がなんとなくわかった気がした。



いくばくか駆けした後、頬をヒンヤリとした空気が撫で、耳に水のたゆたう音が聞こえてきた。そして、唐突に視界が広がり、目の前に日光を神秘的に反射させる湖が現れた。

湖の反射光に隠れて視認し難いが、湖の辺、自分達の進行方向正面には一対の柱のような物があり、その前の辺りに人影のようなモノが一つ、二つ……いや、三つあった。

後から追われているので色々考えながらも足を止めることはなく、自然とその影たちの方へ向かって駆ける形になる。

やはり畏か？

ゲヴラーが思った瞬間、

伏せなさい。

先ほどの声が突然に言った。

いきなり伏せると言われても、駆けているので無理な話。故にゲヴラーは体の重心を後方へずらし、右腕で胴と頭を庇いつつ、スライディング。アキはそんなゲヴラーの胸元へ着地する。

瞬間、今の今まで上半身の在ったそこを、槍のような物が風切音と共に二つほど通過した。ゲヴラーはやはり畏かと一瞬思いつつ、槍のような物が飛んでいった方へ、スライディングの体勢のまま視線を向ける。そこには、的を貫くことなく地に刺さった二つの十文字槍が静寂と共に居た。あれが刺さっていたらと想像してヒヤリとしたのも束の間、地に刺さった槍それぞれの刺点を中心に幾何学模様の円陣が展開し、神々しくも不気味な光を放ち始める。

「トラス。タマラ」

誰かへ呼びかけるような先ほどの声が、今度は頭の中ではなくちやんと耳へ、澄んだ良く通る声として聞こえた。

「はい、奥さまあ。お任せをお」

音源は……、先ほど駆けてきた方向か。二つの音が重なるように遠くで答え、そして木々がざわめき始める。

やはり畏だったのか。ゲヴラーの思考がまたもネガティブな方へと傾きはじめた瞬間、木々の間から六つのゲル状闇色達がその姿を

現す。が、今度は何か様子が違うように見えた。こちらを追ってきたというより、何かから逃げてきたというような態……

何かから逃れるようにギリギリと森がから遠退こうとしていた闇色達が、何か見えない圧力でも森の方から受けているかのように、二本の十文字槍先から展開する幾何学模様へと近づいて行き……、次瞬、幾何学模様が放っていた光が触手のように、まるで意思を持っているかのように蠢き、地を這う闇色達を次々と溶け合うように飲み込んでいく。

実にあっさりと、拍子抜けするほど簡単に、先ほどの闇色達は姿を消失させる。そして展開していた幾何学模様も槍先へと収束する。ゲヴラーはその光景、というより幾何学模様の放つ光に何か惹かれるモノを覚え、何故だろうかと自問しつつ眺めていた。

「やはり、闇は闇を好むようね」  
不意に背後、しかも近距離から先ほどの声が聞こえ、ゲヴラーは反射的に振り返る。

地に片腕を付いて横たわる姿勢になっていた自分を、覆い被さるように覗き込み、手を差し伸べる、漆黒色の髪に、クリーム色の肌をした、美麗なその人物が身にまとう胴着の襟ぐりはとても深く、振り向いた瞬間どこに視線をやればいいものかわからず、当惑してしまった。

ゲヴラーは差し伸べられた手は借りずに起き上がり、目のやり場は定まらないが、

「あの、助けていただき、ありがとうございます」

ぺこりとお辞儀をする。そんな彼の頭の上で、

「ありがとうございますです」

正座し、指先を揃え、アキは深く頭を下げ、お辞儀をした。淡い紫色の振袖姿がよく似合っている。

「礼には及ばないわ」

言ってから、襟ぐり深き彼女は右手を頬に当て、

「それで、私の魔物除け結界内部へ魔物を引き連れてくる、あ

「なた達は何者かしら？」

口元に薄い微笑みを浮かべ、すべてを見透かしてしまいそうなほどに澄明で美しい、翠玉のごとき瞳を真っ直ぐ向けて問うてきた。

「返答によっては」

と右から、

「容赦しない」

と左から。左右それぞれから、いつ回収したのか、先ほどの十文字槍が突き出て、重低音な声で言う。唐突すぎてまったく反応できず、鞘口にすら手を添えられない、ゲヴラーはゴクリと生唾を飲み込み、眼球だけを動かし状況を探る。

「ガイキ、レッキ、控えなさい」

形の良い眉を寄せ、ゲヴラーの左右それぞれで十文字槍を構える筋骨隆々な二人の男へ、襟ぐりの深い女性はピシヤリと言い、二人の男は、

「承知しました。奥方」

おとなしく言葉に従い、槍を引く。

ゲヴラーはそんな光景に少々戸惑いつつ、サイドポーチからヴァーグナー校長より預かった手紙を取り出し、

「ロートワール魔術学校　ヴァーグナー校長から預かった手紙を、エルフ村に居るセシルという方へ配達中の、傭兵戦士団スリンガールのゲヴラーと」

「アキといますですう」

言いつつ手紙を差し出す。

奥方と呼ばれた襟ぐり深き目の彼女は、差し出された手紙を受け取り、表と裏をさつと眺め、

「あら確かに、この蝋封印の魔術学校印は見覚えのあるものだわ」

「

と手紙をゲヴラーへ返し、

「彼らは、ガイキ、レッキ、あなた達の御客人のようね」

左右に控える二人へと声をかけ、

「まあ、なぜ私の結界内部へ魔物が侵入できたのかは、また今度の機会にでも御話しましょうか。トラスとタマラが御茶会に遅れてしまうと心配していることだし、私はこの辺で失礼する事にするわ」  
またね。という高貴な微笑みと、

これは年長者からの忠告ね。貴方はもう少し人を疑うという事を覚えた方がいいわ。貴方が出会う者が皆、善人だとは限らない。何事も信じすぎないことね。

ゲヴラーへの言葉を残し、奥方は樹海の方へと歩み去っていく、  
「トラス、タマラ。隠れてないで出ておいで。あなた達もアキのようには少しは人見知りをなおさないとね」

木の陰から姿を現し、自分の周囲を淡い光の尾を引いて飛び回る二人の小人と共に。

もう少し話をしてみたかったな。と思いつつ、奥方を見送ったゲヴラーは、現在、湖の畔でどうしたものかなあと頭を悩ませていた。  
「さあ、行くがいい」

と筋骨隆々な二人の男に通行を許可された一対の柱の間には、エルフ村へと続いていなければならない道。橋は無く、たゆたいキラキラと輝く湖の水面が在るのみである。

周りを見わたしてみても、目前の湖を渉る手段は見あたらぬ。迂回して行くという手段も無くはないだろうが、この湖は横に相当大きいらしく、対岸は目視できるが左右は良く見え、できれば迂回するのは最後の手段にしたい。なので、何かを知っていると想われる、それぞれの柱の前で仁王立ちをしている筋骨隆々な二人の男に手段を訊いてみるのだが、

「すべての物事に」  
と右から、

「必要なのは」  
と左から、

「「勇気ではなく、決断力だっ！」」

と左右から、同時にクワツと目を見開いて力強く言うのみで、いかんせん何を言っているのかゲヴラーには理解できない。自身の頭上で同じく頭を悩ませるアキに訊いてみても、

「んうゝ、前に来た時はぬし様も一緒だったのですけどお、わたしは飛んでいたので、ぬし様がどうやってココを涉ったのか思い出せないのですう。ごめんなさいですう」

どうしよう。少し困った。

果たして、記憶を失う前の自分だったなら、この状況をどうして乗り越えていたのだろうか……

お前は いや、ゲヴラーはよほど魔術に縁があるんだな。

不意に脳裏に甦ったのは、昨日リムティッシュに言われた言葉だった。

魔術か……、魔術、まさか自分が魔術師だった訳じゃないだろうが 断言はできないけれども この状況にも何か魔術が関わっているのだろうか？

「アキの使える魔術の中に、水面を渉れるようにできるようなものとかない？」

今現在、魔術を操れるのはアキだけなので、どうしても魔術関係の事とは限らないのだが になるとアキに頼らなければならぬ。その事を申し訳ないとは思うのだが、今のゲヴラーにできるのは自身の非力さを嘆くことのみなのである。

アキは「んうゝ」と思考した後、「あっ！」と何かを思いついたようだったのだが、「……あ」と何かに気づいたように、「ないことはないのですけどおゝ、ぬし様が居ないとできないのですう」

アキには色々と制約があるようである。

やはり一対の柱の前で仁王立ちしている二人に訊くしかないと思い、再度、どうしたらいいのか尋ねるゲヴラーだが、

「すべての物事に」

と右から、

「必要なのは」

と左から、

「「勇気ではなく、決断力だ」」

と左右から、同時にクワツと目を見開いて力強く、先ほどとまったく同じ動作で言うのみで、彼らから明確な返答はない。

必要なのは、勇気ではなく決断力……？

この言葉が今の状況に無関係だとは思わないのだが、しかし、どのように解釈したらいいのだろうか。勇気 物事を恐れない強い心。ではなく、決断力 はつきりきめる能力。が必要……。

「んん」。やっぱりよくわからないや」

「んん」。わたしもさっぱりわからないですう」

眉を八の字に、腕を組み小首を傾げるゲヴラーとアキ。

いつそ泳いで行こうか。自身が泳げるといふ確証はないが、このまま何もせずに居るといふわけにもいかないだろう。

少し自棄になっていたのか、それこそ最後の手段にするべきだといふ事にゲヴラーは気づかず、彼は泳いで渉る事を決する。コレもある意味の決断力なのか。

そして数歩後退した後、ゲヴラーは少々の助走をつけ、目を瞑り湖畔から水面へとダイ……………ブ？ した筈なのだが……………、

「……………アレ？」

身体は何所かに着地した。水面までの目測を誤ったか？

身体へと伝わる感触は水に触れた時のソレではなく、かと言って地面に触れているようなソレでもなく、のっぺりとした何かに触れているような、形容し難い感触。しかし水中ではない事は確か。

ゲヴラーは怖いもの見たさという様に、薄っすらと目を開き……………、  
「……………んっ、んお！？」

驚きに目を見開いた。ゲヴラーの目測は誤っていなかった。確かに彼は湖へダイブしていたのだ。ただ、その身が水上に在るといふ事だけが、予想外。

アキが何かをしてくれたのかと思い、反射的に振り仰ぎ見るが、アキも普通に驚いた表情をしていた。何かを知っているであろう筋骨隆々二人男には、訊くだけ無駄か。

何はともあれ道は開けたのだ、まごまごしている理由は無い。

「よし、行こう」

内心まだ驚いている自分に言い聞かせるように、興味深げに水面へ眼差しを向けているアキへと呼びかけた。

が、すぐに一步を踏み出せたかといえば、否である。少しの不安は、やはりある。本当に歩いて行けるのか、そもそも対岸までちゃんと行けるのか。とか、考え始めるときりが無い。

「よし、行こう」

言い聞かせるように、再び口に出す。そして一步を踏み出し、視線を足元から前方へと移す。と、

「どうしたのですかあ〜？」

随分と先にアキの姿が……。足元を見て迷っている内に、先に行かれてしまったらしい。情けない。というか、なにかちよっぴり恥ずかしい。

「なんでも無いよ。さ、行こう」

足元は見ずに、前方を楽しそうに飛翔するアキの背を追いながら、ゲヴラーは歩み始める。

後半は少々駆け足になっていたが、まあそれは気にするところではない。

ゲヴラーとアキは数分の時をかけて、湖を対岸まで徒歩で涉った。途中、湖の中心と思われる所に差し掛かった時、見たすかぎりの美しい自然を湖の中心から眺めるといふ好い体験をしたのだが、ふと、どこからか湧いて出た冷静さが、なにか自分は取り残されているのではないか、という考えを浮かばせた。こんなにも密集している美しい木々たちの中に在って、自分はポツリと繋がりを持たずに佇んでいる……

「オレは……」

「どうしたのですかぁ？ お腹痛いさんですかぁ？」

湖を振り返り、変な事を思い出していたゲヴラーの視界内へ、にゅつと心配そうに形の良い眉をハの字にしたアキが出現。何故か今にも泣き出しそうに見える。

「えっ？ いや、どこも痛くないよ。むしろ絶好調かな」

調子の悪いところは別にないので、嘘ではない。

「そうですかぁ？ ならばいいのですけどぉ。今のゲヴちゃんはあゝ、なにか辛いことを我慢している時のぬし様の顔と同じだったのですよぉ」

アキはびとつとゲヴラーの頬に手を当て、心配そうに上目で覗き込む。心配性なフェアリーに、大丈夫だよと笑みを作り応えながら、ゲヴラーは改めて涉った岸を見回した。

向こう側と同じ構造の一对の柱があり、周囲には木々が伸び伸びと居る。そして一对の柱から見て進行方向前方に、簡素な作りの閉ざされた木製門とそこから左右に伸びる木製の塀が在った。門番などの姿は見あたらない。

ゲヴラーは門の前まで歩み、とくに意味はないがとりあえず手で閉ざされている門を押ししてみた。と、てっきり門などで固定されていると思ったのだが、その門はゲヴラーの微々たる力によって開かれてしまった。これでは門の意味がない気もするが、半開きの門前で立ち尽くす事の方がもつと意味がないので、

「失礼……しまゝす」

と、まるでコソ泥のように、辺りをキョロキョロと探りつつ、門の内側へと侵入する。

侵入後、まず目に付くのは、割と密集して建ち並ぶ、一人一人分高所に建てられた木製の高床式建物群である。湖の近く故に浸水などに備えているのだろうか？ 門なども浸水に備えたものだとしたら、門などを常時していないのもなんとなく肯ける。

ゲヴラーは物珍しげに辺りを眺めつつ、ぶらりと歩み始める。



「そういえば、ココがエルフ村なの？」

実はまだ先ということもありえそうなので、自分の横にならんでふわふわと浮かんでいるアキに訊いてみた。

「そうですね、ふわうっ」

答えつつ、アキは小さなアクビを噛み殺す。どうやら少し疲れているようだ。

そしていくばくか歩んだ後、第一村人を発見する。

農具を肩に背負ったエルフ族の特徴たる尖った耳を持つ人物で、

彼 服装と纏う雰囲氣的に男性と判断 はこちらを発見すると、一瞬、喜んでいるような表情をしたのだが、転瞬、嫌なものでも見ているかのように顔をしかめた。

「ココでは外から来る人はあまり歓迎されないの？」

悪い人には見えないが、どうにもヴァーグナー校長のように人当たりがいいようにも見えず、どうなのだろうか、アキにヒツソリ訊いてみた。

やはり眠気が勝つたらしいアキはゲヴラーの頭の上に着地しつつ、

「ああ、それはあくですね。ココの人達はあく」

言おうとした瞬間、第一村人が物凄い形相でアキを睨んだ。

アキはそこで何かを思い出したかのように、はっと両の手で口を塞ぎ、

「 ええとお……、あまりちゃんと云えないんですけどお、悪い人たちではないですよお」

なんだろう、何か知っているようだが……、言っではいけない事でもあるのだろうか？

しかし、第一村人さんは嫌そうな表情をしつつも立ち止まってくれているのだ、道を尋ねれば答えてくれるかもしれない。

「あ、あの……」

ゲヴラーが口を開いた瞬間、第一村人さんは何か物凄い視線を向ける。ゲヴラーはよくわからない視線にさらされて若干腰が引けてしまったが、

「……セシルさんをご存知でしょうか？」

どうにか尋ねることはできた。

第一村人さんは転進する。

「あ、あの〜」

やはり教えてはくれないのかなと思いつつ声を掛けるゲヴラーだが、第一村人さんは背中越しにアゴをクイと動かして何かをうながす。ついて来いという事だろうか？

一瞬、迷ったゲヴラーだが、

「いくですよ〜？ ふわうっ」

小さなアクビを噛み殺しつつ、額をぺちりと叩いて第一村人さんの背中を指差し言うアキにうながされ、歩みだす。

ほどなくして一軒の高床式家屋の前へ到着する。

造りは他の家々と変わらない丸太を巧みに組んだ構造なのだが、若干急な階段が上がった正面にある扉の脇に、家紋と思われる紋様が焼き刻まれていた。ココへ到着するまでに観る事のできた家々にはそのような紋様は無かった。ということは、この目前の家は何か特別ということなのだろうか。

と、いつの間にか玄関前へと移動していた第一村人さんが、扉をコンコンと軽くノックする。すると中から、

「は〜い。ちよつと待ってください〜い」

ココココとした可愛い感じの声に応え、ドタドタという物音の後、扉が内向きに開かれた。第一村人さんは小声で扉の向こう側の人物に何かを言った後、何事も無かったかのように、元来た道を戻り始める。

ぼおつと目前の光景を眺めていたゲヴラーは、お礼を言っていないことに気づき、去り行く第一村人さんの背中に向かってお礼を述べる。第一村人さんは振り返らなかつたが、背中越しに片手を振って応えてくれた。

「それで、ご用件は？」

横斜め上方向から冷気をおびた声が振ってくる。はたとそちらを振り仰いだゲヴラーの目に映ったのは、眼にしみるような純白の長衣に、流れるような銀色の長い髪、黄金色の双眸。そして、エルフ族の特徴たる尖った耳を持つ、冷徹な表情の人物だった。

一見、ヴァーグナー校長かと思ったのだが、どうにも一回りほど体躯が小さく見えた。それに貼り付けている表情がだいぶ違う。この人がセシルさんなのだろうか。

「ええっと、ロートワール魔術学校　ヴァーグナー校長からの手紙を、セシルという方へ届けに来たのですけど……」

階段を数段上り、サイドポーチから取り出した手紙を、冷徹な眼差しで見下ろすヴァーグナー校長に似た人物へ差し出す。

ヴァーグナー校長似の人物は、スツと差し出した手で受け取り、手紙の表と裏をサツと眺め、

「立ち話もなんですから、中へどうぞ」と冷徹面のまま、ゲヴラーとアキを室内へと招く。

そんな冷たい眼差しのまま言われても、と思わなくもないゲヴラーであるが、これと言って断る理由もないので素直に上がらせてもらう事にする。

入室してすぐに目に付くのは、一つの巨木を切り出して作られたと思われるテーブルで、備えられている椅子は輪切りにされた丸太である。

と、音が、

ポコ。

何か液体が、

ポコツ、ポコポコ。

沸騰した時に発するような、

ポコツ、ポコポコ。ポコツ。

音がしだいに、

ポコツ、ポコポコツ。ポコツ！

大きく鳴り、

ボコツ！ ボコボコボコボコボコツ！

唐突には止まず、鳴り続ける。

反射的にゲヴラーは鞆口に左手をやり警戒しつつ、音の方を振り返る。

と、入室一步目の左側の、そこには石積みで作られた台所があり、ヤカンが火にかけられていた。とんだ早とちりである。

ほっと胸を撫で下ろした、と同時に扉の閉まる音。下げた視線を戻すと、手紙を片手に持った柔らかな表情の人物が、沸騰するヤカンを火から外している姿が目に入ってきた。

……アレ？

どういうことだろうか、背格好は先ほどと同じと思われる人物なのだが、表情がまったく違う。さっきまでは他を寄せ付けたくないというような冷たい表情だったのだが、目の前に居る人物の表情は、アキが言うところの「暖かくてポカポカした感じの人」なのである。扉は閉まっているし、他に人の気配は無いし……

「すみません、ごめんなさい。この村の人たちを誤解しないでください」

こういう場合も不意打ちと言うのだろうか。目の前の人物は開口一番に頭を下げて謝ってきた。声質はドタドタという物音と同時に室内から第一村人さんへとかけられたものと同質で、コロコロとした可愛い感じの声。まとう雰囲気と声質的に、この目の前は女性だろうと判断する。が、とりあえずゲヴラーには、謝られる憶えはない。

「ええつと、あの……、何の事でしょう？」  
面を上げた目の前の人物は、

「えっ、あ、はい。あっ！ ど、どうぞお座りください。あ、今お茶を淹れますから」

と慌てて茶を淹れようとして、  
「熱っ！」

熱したてのヤカン要注意である。

湯気昇るティーカップには紅色の紅茶が注がれており、テーブルの中央にはミルクを練りこんだというクッキーがある。

ゲヴラーは腰に帯びた打刀を鞘ごと右手で引き抜き、自身の右側、テーブルに立てかけ、腰を下ろす。アキは甘い香りに誘われてテーブルへと降り立ったが、どうやら眠気が勝つたらしく、クッキーを一口味わったら、それを抱えたままスヤスヤと寝息をたててしまった。

手紙を片手に向かいに座ったヴァーグナー校長似の人物は、ゲヴラーたちが腰を落ち着けたのを確認すると、自己紹介と手紙の封を開くより先に、村人達のことを話し始めた。よほど誤解されたくないらしい。

そもそも、ゲヴラーはなにも誤解していないのだが。

ヴァーグナー校長似の人物が言うに、この村は長く閉鎖的な体制にあつたが為、その時の体制 癖が抜けきらず、どうにも素っ気ない態度をしてしまつたりと、いまだに村人の多くは、他から訪れる人にどう接していいものか模索中なのだとか。

聴かされたゲヴラーはしかし、

「はあ……、大変そうですね」

そもそも誤解などしていないので、どう応えたものか思いつかず、どうにも微妙な返事をするのであつた。

そして自己紹介に到る。

向かいに座る、ヴァーグナー校長と瓜二つだが一回り小さな体躯に女性的な風をまとう人物。彼女が、ゲヴラーの目的であるセシルさんだつた。ヴァーグナー校長の妹さんだそうで、瓜二つなのも納得がいくというものである。

しかも、この村の村長だとか。こんなに若いのにと一瞬思ったのだが、長寿なエルフ族である。恐らく、若く見えてもそれなりの年齢なのだろう。

ついでに初対面時の冷徹面は、彼女が村長であるということが大きく関わっていた。まあつまり、よそ者に村の代表がなめられては困ると言う事だ。

「知らない人に出会つと、知らずに怖い顔になってしまつらしくて、なかなかお友達ができません……」とセシルさんはボソリと悩みを漏らした。これもある意味、人見知りというのだろうか。ヤマアラシみないなお人である。

互いの自己紹介　アキは睡眠中なのでゲヴラーが変わりに名乗つた　　が終わり、やっと手紙の封を開き中身を読んだセシルが言うに、

「使用予定の薬草が足りないのですぐに送つて欲しい　あと紅茶も……。兄さん、あいかわらず必要事項しか書かないですね」

今朝の、高級紙を無駄に贅沢に使つた依頼書もヴァーグナー校長によるものなのかな、とかティーカップに口をつけながら思つていたゲヴラーに、セシルは「すぐにそれ等を用意するので帰り際に届けてもらえないでしょうか」と頼む。

とくに断る理由のないゲヴラーはそれを承諾。

返答を聞いたセシルは別室へ姿を消す。「あら？」「うん？」

「どこだったかしら？」と何かを探すような呟きだけは聞こえてくる。しばしゴソゴソとあさるような雑音が聞こえ、

「あつた！」

どうやら発見したらしい。

「えっ！　わっ！　きゃっ！？」

壮大な土砂崩れの旋律。そして沈黙。

……沈黙。

……沈黙。

……沈黙。

……さすがに心配になる。

「あ、あの〜だいじょうぶっ！　じゃないー！」

そろりと別室内を窺ったゲヴラーの目に映ったのは、書物や木箱やビンの山頂で誇らしげに薬ビン掲げるほっそりした腕。ゲヴラーは迅速かつ丁寧に山を切り崩していき、要救助者発見。

「うう〜……。スミマセン、助かりました」

ゲヴラーの差し出した手を掴み、セシルは起き上がりながら礼を述べた。

救助活動終了。

複数の薬ビンを抱えて戻ってきてから、セシルは荷に添える手紙を書き始めた。

筆のはしる音に耳を傾けたまま沈黙を守るのもなんなので、お茶を頂きつつ、ゲヴラーはエルフ村に訪れるまでの出来事をセシルに話した。

聞いたセシルは、まずロートワールからエルフ村までの道のりで魔物に出会ったことに驚いていた。

ロートワール周辺は憲兵や傭兵によって定期的に魔物駆除が行われているし、エルフ村の周辺には魔物除けの結界が張ってあるので、よほど運が無いに限り、この辺で魔物に出会うことなどないらしい。加えて、その魔物達を一瞬で消し去った「奥方」は、樹海の主たる“彷徨う樹木達の王・オールドウッド”と愛を誓いし、彼女達の祖国メルトキオでも高位の人物“森の貴婦人・メリユジーヌ”であるらしい。

そもそも、ゲヴラーの知識の中には、メルトキオという国名はもちろん、“彷徨う樹木達の王”と“森の貴婦人”という存在がないので実感が湧かずよくわからないのだが、知らぬところですよ。と対面していたようだ。

また会うことは難儀なようで、何か知っているふうであった自身の記憶云々について訊ける日が来るのは、だいぶ遠くになりそうである。その事を少々残念に思ったゲヴラーが、気を紛らわすかのようにティーカップの紅茶をグイと飲み干したのとほぼ同時、セシル

が荷に添える手紙を書き終えた。

薬ビンと手紙の包まれた紙袋を、背負いっぱなしにしていたバツクパツクへと収納。そして、クツキーを抱えたまま気持ちよさそうに寝息をたてているアキを優しく起こし、立てかけていた打刀を腰に帯び、帰還の準備が完了する。

門の所まで見送るといふセシルと共に、日が暮れ始めた空の下、ゲヴラーとアキは帰路につく。

村の入り口まで見送ってくれたセシルに別れを告げ、村門を通過したゲヴラーを、ガタゴトという荷馬車の発てる雑音と共に、

「ルートワールまで行くけど、乗っていくかい？」

青年と思われる外套を纏った黒癖毛な人物が呼び止めた。

「いいんですか？」

「ああ、もちろん。友人に頼まれた用事があるだけで荷は無いしね」  
早く帰れるのだ、どこに断る理由があるだろうか。

ゲヴラーは自分の頭上で睡魔と格闘してガツクンガツクンしているアキを掌に乗せ、青年のお言葉に甘えて荷馬車へと乗り込む。

そして荷馬車は走り出す。暮れ逝く陽の下、ルートワール国首都の西門を目指して。



【序】第二章：三節 〈黄昏の再会〉

これは夢だな、と解ることを自覚夢とか明晰夢とか言うらしい。水の内側から眺めているような、はつきりとしなない、次の場面への予感。逃げたいのに逃げられない、もどかしい感覚。

だからきつと、私が今この時に見ている、これは夢だ。根拠ならある。

二度と味わいたくないと思った、孤独の恐怖は

あの時の恐怖は、忘れようもないものだから……

そこは砂漠。南の軍事国家アメルから、北の神話帝国ゴルギアスへ向かう途中にある 逆もまた同じ ジンカ砂漠と呼ばれる大砂漠。

その当時、私はキャラバンに所属しており、その時はアメルからゴルギアスへ物資を運搬するという仕事を引き受けていた。

ジンカ砂漠に入ってから十四日目の、あと三日でゴルギアス領内の町に着くという時、私達のキャラバンはサンドラグーン（砂龍）の大暴走に出遭ってしまった。

サンドラグーンは普段、砂漠の主と崇められている非好戦的な魔物で、こちらから彼等の住処を荒らさないかぎり、滅多にその持て余す力を振るう事は無い。

「ああ……。アメルが、何か、余計な事をしたのだろうな……」

養父が希望の見えない状況で、そんな事を口に漏らしていたのが印象的に、私の記憶に焼きついている。まさか、その言葉が最後の言葉になるとは、私も養父も仲間たちも思ってたなかつ……。いや、どこかではわかっていた。

もう、助かる見込みなんて無いと。

砂漠を駆ける彼等の姿は実に偉大だった。死を目前にしてもそう思えた。

古に、人と神が戦をしていた頃、人間と友情を結び、神に反抗し、神の怒りに触れその翼をもぎ取られたディザートドラゴン（砂漠の神龍）。その末裔たるサンドラグーンは、もはや大きなトカゲという外見だが、しかしてそのまとう雄々しさはドラゴンのそれと同じであった。

偉大なる彼等がここまで怒れるのはどうしてなのだろう。養父に抱きかかえられて思ったのは死への恐怖ではなく、そんな疑問だった。

無限にも思える、数瞬の間が空き

全身を衝撃が襲った。

痛みは無かった。

というか、脳が状況を理解できなかったのだらう。

次に感じたのは壮絶な浮遊感だった。

無限にも思えた浮遊感は、唐突に衝撃と激痛、苦痛という感覚にその性質を変えた。

私は、まだ

まだ、痛みを感じる……

私は『痛み』という感覚を別の意味で捉え、絶望を覚えた。

サンドラグーンの去り行く地鳴りを全身に感じながら、動かぬ四肢を無理矢理使い、私を護るように、私をしっかりと抱きしめて動かなくなった養父の、優しくったその腕から這い出た。

もうその時には養父たるキャラバン団長が、その人生に幕を降ろしているのは理解できた。涙は流れなかった。

悲しみの感情が私に無いのではない。

ただ

訪れる悲しみが多すぎたのだ。

皆、キャラバンの仲間たちは皆、息を引き取っていた。

何故、私は生き残ってしまったのか……

私はその時、どうしようもない喪失感と耐え難い孤独感にとらわれた。

でも、希望はあった。

キャラバンに居た時に培った知識で、自分が致命傷を負っている事は解っていたから。

時が経てば

死ねる。

少し遅れるけど皆の所に逝ける。それが私に残された、唯一つの希望だった。

砂漠には人工音なんて存在しない。風の流れる音と砂の流れる音、どこかで猛る獣の雄叫び。それらを砂漠に横たわりながら、口内にジャリジャリと鉄の味を味わいながら、なす術も無く感じていた。

恐怖を感じなかったかといえ、否である。時が経つにつれて、孤独による不安と喪失感による哀しみと、自分に近寄る『死』を強く意識してしまい、それらが融合して私に恐怖を実感させた。

早く終わってくれと、誰にでもなく祈っていた。

しばらくして、砂を踏む音が近づいて来るのがわかった。

やっと死神が迎えに来てくれた。もはや動かぬ身体の中、私はそう思っ、安堵と共に意識を閉じた。

だが、私の意識はここで終わらなかった。

私は仲間の所へ逝きそびれた。

パチパチと薪が弾ける音が聞え、それと同時に淡い暖かみを感じた。薄く開いた眼で、音のした方を窺ってみる。

そこには夜闇に煌煌と燃える焚き火の光が見えた。

私は生きている事を、複雑な気持ちで実感した。

焚き火から少し視線を泳がせると、炎の向こう側に人のシルエツトが一つ見えた。

「あ……………」

うまく声が出なかった。肺をやられたのかもしれないと、頭のところか冷静な部分で分析していた。と、微かな変化に、炎の向こう側

のシルエットが気づいたようであった。

シルエットはパサリと身に着けたローブをはためかせて、一度、私の視界から外れ、そして再び、私の視界の中に現れる。

「よかった。気がついたね」

私の表情を窺うように、優しく安心して微笑を表情に浮かべながら彼は言った。

第一印象は……そう、頼りなさそうであった。単純に人が良さそうに見え過ぎたのかもしれないが。そうだ……、これが私の彼に懐いた最初の印象だった。もしかしたら、もうこの時から、私は彼に好意を抱いていたのかもしれない。

そう、これが夢だと確信できる理由がもう一つあるのだ。

一つは、初めて実感した、死と孤独への恐怖。

もう一つは、彼との出会い。どこまでも頼りなさそうで、どこまでも優しく、どこまでも、私に安心と安らぎを与えてくれる。彼との出会い。新たな居場所。それは、私の大切な思い出の一つ。

彼と出会ってから結構、色々であった。

その色々の中には、私が彼と一緒に旅をさせて欲しいと頼み込んだ出来事も含まれている。

彼は世界を旅して見て周るのだといていた。まだ旅を始めたばかりで、最初は北の神話帝国ゴルギアスを見物するのだと。

私も彼の後ろにくっついて色々を見て周った。

そうだ、私はゴルギアスのある出来事で、彼がその頼りない雰囲気でも、しかし一人旅ができる、という実力を持っているということを知ったのだ。

そして、次は東の伝統島国ジパングを見物する事になった。ゴルギアスから船を使い、ついにジパングへ到着。国の第一印象は、とても和やかで美しい、好感の持てるものだった。

この時点で、彼と私が出会ってから、半年ほどの時が経っていた。

ジパングには一ヶ月ほど滞在し、次はエルフの村を見物に行こうということになった。私達はジパングと交易国ロートワール領内にある港を結ぶ定期船に乗り込んだ。

そして、もうすぐで港に到着するという時

彼等の襲撃を受けた。

最初はただの賊だろうと思ったのだが、彼等は彼を知っているようで、そしてまた、彼も彼等を知っているようで……。

乗り合わせた腕に自信のある者達は、戦う姿勢を見せていた。

だが、腕に覚えがあるだけで実戦経験などたいしてないであろう乗り合わせが、とても敵う相手ではなく、偶然に乗り合わせたロートワール魔術学校の教師が、状況を不利と読み、転移魔術を発動、退路を作る。そして、彼がその時間を稼ぐ。

転移魔術は複雑怪奇な魔術式を出口と入り口に直接刻まなければならず、並の魔術師では扱えない上に出口をあらかじめ作っておかなければならないので、こういう時に都合良く使用できるのは実に幸運なことだった。

皆がそれで脱出するなか、彼だけが逃げようとしなかった。

「彼女を頼んだ」

不意に、彼が転移魔術を発動した魔術師に告げた。魔術師はためらいながらも、私の腕を掴み、私をエスケープゾーンへと引きずり込む。

私は抗おうとした。だが無理だった……

「どうして……、どうして、私も戦える。私もあなたと残る」

言葉で抗うしか方法は残っていなかった。

「彼等の目的はオレなんだ……、オレと残ったらキミにまで危険がおよぶ。それは嫌だ」

そして一度、彼は振り向き、どこまでも頼りなさそうで、しかしどこまでも意思のある微笑をこちらへ向けた。

「ありがとう、アリエス」

強い不安を覚えた。このままだと二度と彼に会えないような、彼



【序】第二章：四節　～黄昏の再会～

親切にも荷馬車に乗せてくれた黒癪毛の青年に別れを告げ、ゲヴラーはロートワール国首都西門へと降り立った。やはり徒歩よりも荷馬車の方が数倍速い。

黄昏色に染まった空の下、ゲヴラーは「うん」と背伸びをし、ポンポンと腰を叩きつつ、荷馬車は速いけれどもお尻が痛くなるなあとと思う。

ガタゴトゆれる荷馬車の上でも、ぐっすりと寝ていたアキは、

「ふわあゝふっ」

と、元気良くあくびをして、

「さあ、ギュートン亭へ帰るですよあゝ」

嬉しそうに帰路を飛び示す。

「うん、帰ろう」

頷き、アキの背を追い歩みだすゲヴラーだった。が、二歩目を踏み出した瞬間、

「あつ！……忘れてた」

大事な事を思い出す。

はっとして唐突に言うゲヴラーを、

「どうしたんですう？」

振り返ったアキが、小首を傾げて訊く。

「ヴァーグナー校長へ、届け物があったんだ」

それについてのやりとりの最中、クツキーを抱えてすやすやと眠っていたアキが、届け物の存在を知らないのは仕方が無いことである。

「じゃあ、魔術学校に寄って帰るですね」

ゲヴラーとアキは出発の時と同じ道を逆に歩いていく。

夕食時が近づき、徐々に賑わいを見せ始める踊るギョートン亭。その食堂。

ウエイトレスだったりもするキキは鼻歌交じりに、常連客さんからの「いつもの頼むよ」という注文を取っていた

その時、食堂はシントツと静まりかえった。

皆が皆、ポカンと口を開いたまま階段の踊り場へと視線を向けて固まっている。

唯一、キキだけが平然と、

「おっ、目え覚めたんだね。おっはつよお。……いや、こんにちは、かな……こんばんは、か？」

挨拶について「むむむつ」と眉間に人差し指を当てて考えつつ、踊り場で仁王立ちする静寂の素に接する。

静寂の素　タロットカードの死神の鎌を連想させる大鎌を肩に担ぎ、踊り場から食堂を見下ろす、黒に近い紫の長い髪に、金色の瞳を持つ、顔は幼い感じが残るが凛と意思の強そうな美しい作りで、可愛いよりカッコいい感じの少女。一言でいって、美しい。異常と言える大鎌を担ぐ姿さえも、一枚の絵のようだ。

そんな少女が修羅の如き形相で、しかも大鎌を担いで突然登場したのだ。事情を知らない者ならば固まって当然の状況である。

「ここはどこだ」

大鎌少女は何かを押さえ込んでいるような、低い声色で問うてきた。

無論、皆が黙り込んでいる今の状況で普通に会話できるのは、事情を知っているようがいまいが、きっと普通に接する事のできる、器の大きなウエイトレスさんのみである。

「ここはねえ、ルートワール国首都にある踊るギョートン亭って宿屋だよっ」

ちなみに今の私は亭主代理よっ、えっへんと胸を張り付け加える。聞いた大鎌少女は何かを思考するような沈黙の後、

「あの黒眼帯は、この宿と関係あるのか？」



「ギュートン亭で黒眼帯といえば、ゼロの事？」

「今どこにいる」

「仕事に出て行っちゃったから……、今どの辺だろ、うーむ」

答え、腕を組んで首を傾げるキキ。

それを聴いた大鎌少女は肩に担いでいた大鎌を抱くように、身体  
の支えにするように、

「やっと……やっと彼を……、ゲヴラーの手がかりを見つけたと思  
ったのに……」

ボソリと悲愴な呟きを漏らす。

食堂がいつものように騒がしかったならば、彼女の呟きはキキの  
耳へと届く事は無かっただろう。だが、今の食堂は異常な程に静か  
である。

「んん？ 鎌っ子ちゃんはゲヴちゃんの事を知ってるの？」

形の良い眉を八の字に寄せつつ、聞こえてしまった呟きに対して  
質問するキキ。

「……ゲヴちゃん？」

大鎌少女はキキの言うゲヴちゃんが誰を指すのかわからず眉をひ  
そめる。が、脳内でゲヴちゃんというネーミングを転がしているう  
ち、話の流れ的にそれが

「……あなたはゲヴラーを知っているのか！？」

少女はその金色の瞳がこぼれ落ちてしまいそうほどに目を見開い  
て、キキの質問に質問で返した。

問いに問いがぶつかった時に発生する微妙な沈黙が、食堂内の静  
寂にかさなった。

その時、疲れた木製の扉が軋みを上げて開かれる。無駄に静かな  
ギュートン亭、お客さん達の目は自然に「今度はなんなんだよ」と  
音源の方向へ向く。

溢れる夕空の黄昏色と共に進入してきたのは、だらしなく白衣を  
着こなし、怪しげに輝くメガネを装着した、両手に大きな紙袋を抱  
える、

「おっ！ おつかえり〜ドラちゃん。お使いご苦労さんっ」

「お願いですから、私の事を“ちゃん”付けて呼ばないでください。なにか言いようもないところから青くて丸いモノをイメージしてしまつので、そして、ただいま」

夕陽の光と共に現れたのは、キキにお使いをさせられていたドラちゃん いや、ドラッド医師だった。

このギュートン亭において彼が医師として活躍する場面などそう多くはない。ゆえ、「働かざるもの食うべからず」を理由に大抵の場合、彼はキキに扱き使われている。

意外と辛いポジションなドラちゃんは、空いていた木製円卓へ「ふう……」という溜息と共に抱える大紙袋をドサリと置くと、怠惰な動作で椅子を引き、腰を下ろす。

背もたれに深くもたれ一息吐き、彼はやっと食堂内がいつもと違うという事に気がつく。

「なんですか皆さん。そんなに見つめられても×××××サービスなんてしませんよ」

誰も不精ヒゲ白衣メガネ青年になんぞ×××××サービスを期待していない。という事はさすがにドラッド医師も理解できるので、

「という冗談は面白くありませんか？ ……そうですか。で、お目覚めのようですね、お名前は存じませんが」

踊り場から大鎌と共に睨んでいる例の娘へ、クイと人差し指でメガネを押し上げながら挨拶をする。メガネ奥の目付きが微妙に鋭いモノへと変化した。

が、大鎌娘はソレを無視。キキとの会話を再開させる。

「知っているなら、教えて欲しい。彼は今どこにいるの……」

顔面に無理矢理貼り付けていた鉄面が剥がれかけ、最後の一瞬、彼女の素が垣間見えた。

彼とは誰です？ と小声でドラッド医師はキキに問いかけ、問われたキキは困つたように、「よくわからないけど」と前置きし、眉を寄せ、

「鎌っ子ちゃんは、ゲヴちゃんの事を探しているらしいのよ」と答えた。

「船の上で別れてからずっと……ずっと、次はエルフ村に行こうって言うてたから、ココで……待って、探して……」

語るうちに大鎌は解けるように霧散し、元鎌っ子の顔には何かを堪えているような女の子の表情があった。

「うん……、たぶんもう少ししたら帰ってくると思うけど……依頼書に依頼内容が書いてなかったから、あまりハッキリ帰還時刻がわからないうのね……、今から一っ走りして魔術学校に行つてどんな依頼したのか聞いてこようか？」

下唇を噛んで涙を堪えているような女の子の表情に母性本能をくすぐられた。というより、そもそも義理人情な商人気質が強いロートワールという国である。困っている者が居たらこの国に住む者は大抵、何かしらのリアクションをしてみようのだ。それは傭兵戦士団スリンガー依頼受付嬢兼踊るギュートン亭亭主代理ウエイトレスとかいう無駄に長い肩書きとは無関係に、キキという一人のネコマタハーフにも言えること。

「依頼？ ……ゲヴラーは、魔術学校へ行つた……、のか？」

ゲヴラーに関するハッキリとした手がかりを掴んだことによる喜びの衝撃と、あの時あの黒眼帯を追っていなければ今頃は再会できていたという衝撃が、同時にゲヴラー追いつ少女を襲い、喜んでいいのか怒っているのかわからない複雑な表情を作った。が、一瞬後には大鎌を担いでいた時のような凜とした表情に戻り、深呼吸一つ。いまだに「よくわからん」という眼差しをしている客たちの視線は無視。

彼女は勢い良く駆け出す。

踊り場から飛び降り、落下の勢いをそのままに駆け、ブチ破らばかりに年老いた木製の扉を開く

ごんっ！！

……何かを仕留めたと思しき音と手応えと反動。

………彼女はそろりと窺うように、再び扉を開き。  
仕留めた獲物とご対面。  
そこに居たのは

【序】第二章：五節 〈黄昏の再会〉

鬼。

そこに居たのは、鬼だ。

そろりと扉を開き、自分が仕留めた鬼を目視した少女は、生存本能から来る警告に、全身を強張らせた。

全身から憤怒の炎を揺らめかせ、右手で額を覆いながら片膝を付き、そこに居る。紺のロングスカートに白いブラウスという格好の長い黒髪の鬼。しかも最悪なことに、左手の中には、黒い鞘に納まった剣がある。

ギロリ。

流れ落ちた長い黒髪の間から、射殺すような眼光が放たれ……、扉の影からこちらを窺う少女を発見。

加害者と被害者の視線が交錯する。

鬼は視線を合わせたまま立ち上がる。見上げる体勢から、対等を経て、見下ろす姿勢へ。

背にした夕陽の光が、微風に流れる長い黒髪を煌かせ、鬼の姿を神々しく見せる。が、陰になった表情は、少女からは窺えず、陰という闇が身長差からだけでは無い圧倒的な威圧感となって少女を襲った。

少女が動けないでいると、鬼は中腰になり視線の高さを合わせ、「扉はもう少しゆっくり開けたほうがいいぞ、下手をすると死人が出てしまうからな。分かったかい？ 小さな御客人？」

ズキズキする額に、夜空のような吸い込まれる美しさを持つ黒い瞳を幾分か潤ませつつ、額を強打した鬼。リムティッシュは柔らかなく微笑み、小さい子を諭すように言った。

しかしどうしてだろう、少女にはリムティッシュの微笑みが、物凄く引きつっているように見えてしまったのは。というか、頬の辺

りがピクピクしているように見える。

幸いな事に少女の本能が、ゲヴラーの元へ最短時間で行きたいならここは素直に「わかった」と肯いておけという、この場において最善の判断を下したので、結果、彼女は事なきを得た。

「分かればよろしい」

今度は引きつっていない微笑を少女に向け、「今度は注意するんだぞ」と念を押しつつ、リムティッシュは急いでいる風な少女に道を譲る。

リムティッシュの内に秘めた気迫というのか迫力に、食堂内での威勢を若干削がれた大鎌少女は、

「すみませんでした」

とすれ違いざまに小さく詫び、そして再びゲヴラーの痕跡に向けて全力で駆け出した

「おや？」

ハズだったのだが。それは、いつからそこに居たのか、紙袋を小脇に抱えた純白の長衣を身に纏う、長い銀髪に尖った耳を持つ柔らかな表情の人物によって阻まれてしまう。

「ここに居たのですかアリエスさん。突然居なくなってしまうからアンリさんが心配していましたよ？ それとお話したいことが一つ」

「校長先生！？」

またも道を阻まれ勢いを削がれた少女はしかし、そこに現れた人物が今現在の目的であることに好機を覚え、

「先生っ！ 魔術学校にゲヴラーがっ！ ゲヴラーが依頼を受けに行っただって！ 今、いまゲヴラーは、今ゲヴラーはどこにいるの、ねえっ！」

逸る気持ちをそのままに質問をぶつける。

しかし、少女が求める返答の声とは違う声が、

「そのキミ……アリエスといったか？ キミはゲヴラーを知っているのか」

返答ではなく問いを投げってきた。

大鎌の少女　　アリエスは予想外の方向からきた問いの言葉に、  
「お前も　　あなたも、彼を知っているの!？」

朗報の連続という嬉々な驚きに目を見開きつつ、背後を振り仰ぎ見る。そこには、ゲヴラーを知る人物を発見したという朗報に、その美しい黒瞳を驚きと喜びの色に染めているリムティッシュの姿があった。

くしくもこの瞬間、ゲヴラーという人物の過去と現在を知る娘達が邂逅したのだった。が、そんな事、露程も知らない当の本人は……

その頃

「あれ？」

魔術学校の“開校時間は終了しました”という札の掛けられた回らない回転扉の前に立ち尽くしていた。

アキと二人でどうしたものかと頭をひねっていると、

「どうかしましたか？」

いきなり真横から声を掛けられた。

ドキツとしつつも、そちらを見たゲヴラーの目がとらえたのは、

“お昼のお弁当をおいしそうに食っていた狼亜獣人な受付嬢さん”

の姿　　、の触り心地がよさそうなもふもふ尻尾。あまりにも触り心地がよさそうなので、つい目がいつてしまう。

「……あのー」

もふもふしっぽのお嬢さん　　アンリは眉を寄せて、呼びかけに  
応じないゲヴラーを覗き込む。

「えっ？　　あっ、ああ、すみません。つい、ついね」

「つい？」

大量の疑問符を額に貼り付けて小首を傾げるアンリに、忘れてくださいと言いつつゲヴラーは「カクカクシカジカで」と状況を説明  
聞いたアンリは「ああ」と頷いたあと、

「校長なら踊るギュートン亭へ行きましたよ」

と、預かった荷物の届け先の現在位置を教えてください。

商店街の特売に遅れちゃうのでこれで、と商店街の方へ小走りです駆けるアンリに礼を述べた後、

「うむ、これなら荷物があるって思い出さない方がよかったのかなあ……」

ゲヴラーはボソリと漏らしたのだった。まあ、結果論でしかないのだが。

そして二人は、改めて帰るべき踊るギュートン亭を目指して歩みだす。

「扉の前で話し込んだら営業妨害になるから中で話なよっ」とキキが言うので一同は場所を食堂内移し、空いている円卓の椅子に着いた。

大鎌娘の再来に、息をのむお客さんたち。食堂内の空気が、ご飯をおいしく食べるのに適さないものに再変化してしまったことを察したキキは、

「ん〜しらげちゃったねえ……。仕方ない、ここは私が一肌脱いじやうよっ！」

食堂の中心で胸を張り言う。「おおっ」となるお客さんたち。

「今日は全品半額よっ！」

どどんっ！と宣言するキキさん。「おっ……おお」微妙な宣言に微妙な喜びを表すお客さんたち。そんな微妙な反応に、キキは眉を寄せ、

「むっ、ん〜仕方ないっ。今日は私のツケで皆にお酒を奢るよっ」

「おおっ！ おおおおおおお！！」お客さんたち大喜び。

いつの世も、お酒の力は偉大である。

そんな盛り上がりの片隅で、

「キミはゲヴラーの旅仲間だと？」

アリエスから事のあらまし　ゲヴラーとの出会い、そして旅を聞いたリムティッシュは、確認するように訊ねた。



「ちがうつ……、ゲヴラーは……ゲヴラーはそれ以上の……、ゲヴラーは私の」

最後の家族。いや、それ以上の……、心の居場所。

顔を伏せたアリエスは円卓の縁を強く握り、溢れそうになる気持ちを押しさえ込む。

だが、怒りとも似た感情は抑えきれず、

「どうして、どうして校長先生はゲヴラーを引き止めておいてくれなかったのっ」

寝る場所を貸してもらっている身として、恩のあるヴァーグナー校長に怒りを向けるというのはどうかとも思う。だが、だが校長はアリエスという人間がゲヴラーという人間を探しているということを知っているのだ。なのに、なのに何故。

怒れるアリエスを前に、しかしヴァーグナー校長は謝るでもなく、寝る場所を貸しているのに何を言う、と逆怒するわけでもなく、いたって平静な態度で、

「はい、その事についてお話したいことがあります。しかし、それはアリエスさんの探すゲヴラー君と私の知るゲヴラー君が同一人物であるか、を確認してからにしたいのです」

と応えるだけだった。

それを隣で聴いていたリムティッシュは、確かにアリエスの探す“ゲヴラー”と、私たちの知る“ゲヴラー”が同一人物であるという保証はどこにもない、どこにもないが、しかし、知っていたなら伝えるくらいしてやっても……と思つて、しかしそこで思い出す、自分が知る“ゲヴラー”の状況を……

と突然、アリエスが椅子を吹っ飛ばして立ち上がった。

ワナワナと震える拳。

ぐっつと唇を噛みしめている口。

そして、こぼれ落ちそうなほどに見開かれた、潤みの増した金色の瞳。

頬を伝い、零れる一滴。

そんなアリエスを見て、リムティッシュとヴァーグナーは戸惑った。確かにヴァーグナー校長がアリエスの事情を知っていてゲヴラーに事を伝えなかったというのは、涙が出てしまうほど怒って当然なことである。が、しかし、今アリアスの表情に怒りの色は無く、むしろ、迷子の我が子と再会をはたした母親が安心の喜びのあまりにほろりと涙を流してしまったというような、それほどに、ある意味、爽快な色の表情で。

突然すぎて戸惑いはしたが、次瞬、リムティッシュはアリエスがある一点を凝視していることに気がつく。が、なにを見ているのかとリムティッシュがその視線をたどろうとした時には、アリエスは円卓を乗り越え駆け出していた。

一分一秒でも早く、彼と再会するために

やっと帰ってきたと、扉を前にして思い。

なかなか今日という一日は長かったなあと、くたびれた扉を開けながら考え。

踊るギュートン亭内への一步目を踏み出し、食堂が朝とは違う賑やかさに包まれていることに気づく。昨日、自分がここで自分を探すと決めた時の、あの賑やかさ。あれから、もう一日/まだ一日、時は流れた。まだ自分は見つけられていないが、まあこの調子で往こうと思う。

「よし」

と、ひとり頷き、ゲヴラーは、

「ん〜ヴァーグナー校長はどこだろう」

視線を泳がせ、最終目標を探した。

「あつ、居ましたよあ〜」

早々にヴァーグナー校長を発見し、そちらへ飛び行くアキの背を追って視線をやったそこには、円卓の椅子に座るヴァーグナー校長とリムティッシュの姿があった。もう一人、ローブを羽織った黒に近い紫の長髪の人物が居るが、魔術学校の女子生徒さんだろうか？

食堂内が賑やかすぎるので、内容までは分からないが三人は何か真剣に会話をしているようだ。

会話に割って入るのもどうかと思うが、しかし渡さなければならぬ物があるので、ゲヴラーはそちらへと歩みを進めた。

すると、ローブの人物がそれに気がつき、その金色の瞳にこちらを捉える。

どうしてだろうか、あの金色の瞳に、言いようもない、どこか別の深いところから

罪意を感じてしまうのは。

ゲヴラーは戸惑った。逃れたいわけでも、否定したいわけでもない。ただ、ただあの金色の瞳の持ち主に対して、申し訳ないと思う気持ち湧いてくるのだ。

なんだ、この気持ちは……。

戸惑いながらも歩みは進み、あと三、四歩でヴァーグナー校長の肩に手が届くという距離まで来た。その時、

「えっ」

突然立ち上がった金色の瞳の人物が、頬に一粒の涙を。

同時、彼女は軽やかに円卓を踏み台にして、こちらへ跳んで、飛んで、

「やっと、やっとまた会えた。ゲヴラー」

頬に涙つたう、花咲くみたいな最上級の笑みと、最上級の勢いで、飛んで来た。

最初に感じたのは、ちゃんと受け止めないと壊れてしまいそうなほど繊細で柔らかい感触の衝撃で。次にあったのは、受け止めたはいいが、バランスを崩してしまい後方へ倒れこむ、長いようで極短い浮遊感で

「ごんっ!!」

聞こえる音は遠く反響し、ぼやけた視界は正面に天井を捉える。

と、視界を遮る影。天井の変わりに視界が捉えたのは、さっきの金色の瞳の子の顔。

彼女はしきりに口を動かしているが、

……げヴ

ゲ……ら……

……ヴ……ラー

……げヴラー……

何故だろう、声がものすごく遠い。

前にもこんな事あったような……

いつだ……、はっきりしない、苛立たしい、つかめない雇気楼が  
もどかしい。

でも、でもたぶん、つかめない雇気楼の向こう側に居るはずの、  
その時の彼女は、頬を濡らしていなかったように思える。

ああ……

視界が狭まっていく……

音が遠くなっていく……

意識が擦れてゆく……

そんな中、最後に感じたのは……

絆にも似た

罪意。

約束は……、

……許してくれ、

……ア　　。

そして彼は許しを請う間も与えられずに、意識を暗転させる。

【序】第ZERO章：一節 〈消失と死／孤独と再誕〉

真

虚構の現実

優しい虚実

夢と現の道化芝居。

道化を演じるは、優しい罪人。

虚実に翻弄されるは、己が宿命を知らぬ無垢なる乙女。

総てを見定めるは、信ずる心に忠を尽くし磨耗して逝く老騎士。

虚実を語るは、喪失を恐れる哀しき愛国者。

楽園に牙を剥くは、消失を恐れ愁う反逆者。

傍観するは、君と僕とあなたと私とワタクシタチ。

これは、夢と現を廻る物語。

生き活きる居場所を求めるモノ達の物語

総てを見透かし、

虚構を語っているのは、誰だ？

第ZERO章 〈消失と死／孤独と再誕〉

……げヴ

ゲ……ら……

……ヴ……ラー

……げヴラー……げヴラーっ！

……遠くから

呼ばれているような……

遠くから……

「ゲヴラーっ！ ゲヴラー起きてっばっ。ゲヴラーっ！」

……自分を呼ぶ音に、薄く目を開く。

ぼやけた視界に、必死に口を動かす、金色の瞳な人物が見えた。

目覚めの気分は、あまり好くない。

夢を見ていた気はするが、まったくさわりすら思い出せない、もどかしい気分……

名前を呼ばれ続けながらも、しばし半目のまま何をするでもなく、黒に近い紫な長髪と金色の瞳を持つ可愛いよりカッコイイ感じの、自分の名前を必死に連呼する少女を眺め

自分が何か硬いモノを背にしていると気づき、

「んあっ？」

と微妙な違和感に、たぶん覚醒し、

「おはよう」

と金色瞳少女の名前を呼んで、目覚めの挨拶をする。

「もう、おはようじゃないよっ。ゲヴラー、今は夕食の時間だよ」

は呆れたように肩をすくませ、

「ほら、早くしないと夕食全部食べられちゃうよ」

ゲヴラーの手を取り、早く速くとうながし急かす。

まあ が急くのも無理はない。船に乗って最初の楽しみと

言えば、広大かつ雄大な大海原の景色だが、しかしどこまでも続く

蒼い海である。その変化の無さを、一日と言わず半日も眺めていれば、さすがにどんなに初めてで楽しみにしていたとしても、飽きにくる。

となると、やはり長い船旅での楽しみといえば、なにはともあれ食事であろう。

しかし急かされながらも、ゲヴラーはそのそと身体を起こし、背伸び一つと、アクビを一つ。改めて、自分が今どこに居るのか再確認するかのようになり、辺りを見回す。

目覚めているようで寝惚けている寝起きゲヴラーの目に映るは、水平の果てまで穏やかに波音を奏でる大海と、煌びやかな星達の輝きを身に纏った底知れぬ美しさの夜空。そして、甲板から生えるマストに、今まで自分の睡眠を支えていたリング入りのタルに、今自身が足を着けている木造の甲板。ぐるりと周囲を見回し、まとわるように頬を撫でる潮風の匂いを感じつつ、じわりじわりと彼は自分が船の上に居ることを実感してゆく。

が、金色瞳の少女は、ゲヴラーのスローペースに付き合う気は無いようである。

「は・や・くっ！」

今だ微妙に寝惚けている感じのゲヴラーを、半ば強引に休憩室兼食堂へと連れて行く。お腹が空いて、ちよっぴり苛立っている、のかもしれない。

船内に入り、休憩室兼食堂へと続く短い階段を下りる頃には、ゲヴラーの意識も覚醒しており、

「ごめん。あんまりにも暇だったから、ついウトウトしちゃって…」

と、自分が寝ていたが為に出遅れ、物凄く窮屈なテーブルの隅っこにしか座れず、しかも用意された食品を自由に皿に盛り付け食べられる形式がゆえに本日のメインディッシュは完食されてしまい、食い損ねたという現実を、残った品を皿に盛りつつしみじみと理解できた。

言い訳のしようもない。

「いいよもう。別ににも食べられないわけじゃないんだし、  
あまりにも、すまなそうにするものだから、なんだかこつちが悪いことした気になってしまふ。ちよつとズルイなあと思いつつ、金色瞳の少女は、

「でも、ふふ。ならばお詫びの印として、そのハムとソーゼーヂを頂こう」

ムフフと楽しそうに笑みを顔に貼り付け、思いついた名案を、まるで裁きを下す法王のように高らかに言うのだった。

「姫様のお慈悲に感謝いたします」

表情を緩ませてゲヴラーは代償が盛られているお皿を法王なお姫様の前に差し出し、置く。そして席を立ち、

「お茶、飲む？」

もきゅもきゅと献上されたハムを食しているお姫様に訊いた。

金色瞳の少女はもぐもぐとハムを味わいながら、コクリと上目で肯く。

「了解」

ゲヴラーは狭い休憩室兼食堂内を、食事中の人達の邪魔をしないように慎重に移動し、同じ室内にある簡素な厨房で腕を揮うコツクから、淹れたてのお茶が入ったカップを二つ受け取り、お茶をこぼさぬよう慎重に元来た道に戻る。

の前と自分の前のテーブルにカップを置き、着席。

ゲヴラーはズズツと食後のお茶を一口飲み、一息吐く。そして、なんとなく狭くも賑わう食堂内に視線をやった。

吊るされたランプの灯りが小波に揺らめく休憩室兼食堂内で、やはり多く目に付くのは、食事を取りながらも商売の話をし続けている交易商人達の姿だろう。まあ、人運びよりも荷物運びを優先した設計で、現在乗船中のこの船は定期交易船なのだから、当たり前といえは当たり前前の光景だが。

ゲヴラーがお茶を飲みながら室内を見回し、慈悲深いお姫様が最



後のソーセージを飲み込んだ

その時、異変が始まった。

なんの前触れも無く、船は激しい揺れに襲われ、吊るされているランプが動揺に拍車をかけるように狂気乱舞。

「なっ？ がっ！ 熱っ！」

突然の事に、ゲヴラーは飲んでいたお茶を顔面からかぶってしまふ。いきなりの熱さに彼は手で急かしく顔を拭いつつ、もう一方の手で揺れに耐えるためテーブルにしがみつく。

「えっ？ きゃっ！ うぐっ！」

突然の揺れに、金色瞳の少女は嚙下中のソーセージを変なところに詰らせてしまふ。彼女は片手でテーブルにしがみつきつつ、空いている方の手で胸をドンドンと叩き、詰ったソーセージを落とそう全力を尽くす。

始まりと同じく唐突に船の揺れが治まると、同時に、

「 つはあゝ……」

金色瞳の少女は努力を实らせ、事なきを得る。

「はあ……、熱かった」

ほんの少し顔を赤くしたゲヴラーは、安堵の吐息の変わりにボソリと漏らしたあと、金色瞳の少女に大丈夫かを訊き、なにかにホツとしたような長い吐息を漏らしつつコクリと頷いた彼女の問題なさそうな反応を見た後、

「それにしても、どうしたんだらう？」

と、現状に対して疑問の言葉を口にした。

休憩室兼食堂に居る他の者達も、口々に不安と不満を混ぜ込んだ疑問の言葉を漏らしている。

しかし疑問の答えは間を置かずして、血相を変え現れた一人の水夫によって、

「かつ、かか、かい、かつい か、海賊だっ！」

解答を得るのだった。

【序】第ZERO章：二節 〈消失と死／孤独と再誕〉

Chapter Zero / Second part / beginning

煌びやかな星達の輝きを身に纏った底知れぬ美しさの夜空の下、まるで愛し合うかのように、水平の果てまで穏やかに波音を奏でる大海の上で、船体を寄り添い合わせる二隻の船があった。

ギチギチと互いの木造の体を軋ませながらも寄り添いあう二隻の船。その内の一隻、船体の両側面に砲身の姿が見える船の甲板上。禍々しいまでの黒塗り鎧を身に装着し、手に蛮刀を持った男たちが血走った眼で、もう一隻の船に乗り込んでゆく。

そんな状況の中にあつて不自然な、大と小の影があつた。影はそれぞれ闇色の燕尾服に身を包んでいる。

「おお、がんばるねえ」

鈴を転がしたような声色で言うのは、小さい方の華奢な印象の影。その微笑が浮かぶ口元には煙草が煙を揚げている。

「いいのか？ 勝手に行動させて」

小さい方の影とは対象的な大柄でゴツイ印象の影が、野太い声で小さい影に問うた。

溜息と同時に紫煙を吐きながら、小さい方の影は呆れたように、しかし、どうしてもよさそうに、

「いいんじゃない、こっちの手間はぶけるし。なにより、“彼”が頑張ってくれるおかげで、護衛対象は無事。まあ、結果よければ過程なんて問題じゃあない」

応え、小さい影は、向こう側の船上にて次々と乗り込んでくる黒鎧の男たちと奮闘する一人の剣士に視線をやった。その奮闘剣士は自身の背後にて発動中の魔術式を、その魔術式へ吸い込まれるよう

に消えてゆく人々を守るように戦っている。

小さい影は、剣士の次に魔術式に視線をやり、  
「まあ、一つ想定外だったのは、乗客リストに転移魔術なんてモノを発動できる魔術師が載っていなかったということだが……。まっ、これはこれで予定が繰り上がるからよしとしよう」  
口の両端を薄く吊り上げ微笑をつくる。

黒鎧の男たちが奮闘剣士に倒され折り重なってゆくのに合わせるかのように、船上から乗客乗員の姿が消えてゆき、

「彼女を頼んだ」

不意に、奮闘剣士が転移魔術を発動した魔術師に告げた。

魔術師はためらいながらも、黒に近い紫な長髪と金色の瞳を持つ少女の腕を掴み、転移魔術式の中へと引きずり込む。

少女は抗うように身をくねらせるが、確実に身は転移魔術式の中へと消えてゆく。

「どうして……、どうして、私も戦える。私もあなたと残る」

少女には言葉で抗うしか方法が残されていなかった。

「彼等の目的はオレなんだ……」

奮闘剣士はしかし、目の前で蛮刀を振り回す黒鎧の男たちではなく、その向こう側に居る大小の影に視線を投げ、そして少女に振り返り、

「オレと残ったらキミにまで危険がおよぶ。それは嫌だ」

どこまでも頼りなさそうで、しかしどこまでも意思のある微笑を向け、消えゆく少女に言葉を紡ぐ。それとほぼ同時に、少女と転移魔術式は跡形も無く、消失する。

果たして最後の言葉は少女に届いたのだろうか

奮闘剣士はそれを確認することもなく、残る黒鎧の男たちと対峙する。

「さて、そろそろ始めようか」

小さい影は転移魔術式が消失するのを待つてましたと言わんばかりのタイミングで、側らの大きな影に告げた。

奮闘剣士　　ゲヴラーは正眼に構えた打刀の切先を固定せずユラユラと動かし、黒い鎧を装着した五人の男をそれぞれけん制しつつ、相手の隙を探っていた。

彼等はこの残り五人になるまで、まるつきり統率の無いめっちゃくちゃな攻め形で来たので、苦戦しつつも多数相手にほぼ一対一で対応できたのだが、今に至って多数の意味を理解したようで、ぎこちないが、四人でこちらの四方を囲み、動きを封じ、残り一人が止めを刺す役割という連系の体勢をとっている。これだと無連系の不特定多数相手よりも、分が悪い。

どうしたものとゲヴラーが思考を開始した。その時、囲む四人の男が手にした蛮刀を振りかざし、雄叫びと共に、一斉に行動を開始した。

「チツ」

舌打ち一つ。ゲヴラーはしかし迷いなく、正面から攻め来る黒鎧男に向かって動く。前後左右を取られたならば、手っ取り早く前方に逃げ道を切り開くのみである。

両者の距離は縮まってゆき、あと三足ほどで衝突という、その時

静寂を纏う夜闇に、雷鳴が轟いた。

その残響を追うように、乾いた破裂音は三度　轟く。

と同時。ゲヴラーが視界に捉える事のできる黒鎧の男たちが、糸の切れた人形のように崩れ落ちた。勢いづいた彼らの身体は、甲板に痛そうな打音と共に叩きつけられるが、しかし残念な事に彼らが痛さを感じる事は無い。世界と自分を繋ぐ命の糸が切れてしまえば、痛みで自分の居場所を確認する必要もないゆえに。

「裏切りやがったな！」

恐怖と怒気の入り混じった声を上げるのは、ゲヴラーを背後から

切りかかるうとしていた黒鎧の男だった。

「裏切る？ はて、なんのことだか……。我が社に不利益をもたらす罪人を裁く事は、当初からの予定通りだが？ それに、どうせ君達とて、この船の航路情報等々を知り、用が済んだら私達を始末するつもりだったのだから？」

黒鎧の男を逆撫でするかのように、呆けて応えるのは、ゲヴラーの正面延長からゆっくりと近づいて来る、燕尾服を着た、くわえ煙草の小柄な人物。その両手にはグリップを包み護るかのような打撃用突起と刃の付いた

「よりもよつて拳銃……」

が、握られていた。呟くゲヴラーはもはや背後に居る黒鎧の男にはかまわず、正面から現れた燕尾服人物に全神経を集中させる。「クソが。テメエッ！ “パトリオット”の回し者だったかっ！」

もはや黒鎧の男もゲヴラーにはかまわず、怒りの気持ちをもそのままに、くわえ煙草小柄燕尾服人物へ向けて蛮刀を振りかざし、斬りに行く

面倒臭そうに、くわえ煙草な燕尾服人物は溜息と紫煙を吐き、

黒鎧の男がゲヴラーの陰からその身をさらした瞬間、

ああ、無情の情すら無い、乾いた雷鳴が、一つの命を自由（Freedom）にする。

「状況終了」

かったるい事がやっと終わったとでも言いたげな表情で、くわえ煙草人物は言う。

自身の側らで息絶えた黒鎧の男を視界の端に捉えつつ、ゲヴラーは正面に現れた人物が手に持つ武器からどう逃げるかを考えていたが、しかしくわえ煙草小柄燕尾服人物から敵意や殺意はなく、

「もう少し彼等も、相手とその中身を考えてから行動すべきだと、そうは思わないかい？ ゲヴラー」

煙草をくわえた口元に微笑を浮かべて、親しげに語りかけてくる。ゲヴラーは隙なく打刀を構えつつ、

「オレも最近になって実感してるよ」

口で応え、目で遮蔽物になりうるマストまでの距離を目算する。片や小柄な燕尾服人物は、まるで十年來の友人と語らうような軽い口調で、

「学習することはいいい事だからねえ、それはいいことだ。でだ、いいことついでに、もう一つお勉強してほしいんだが」

言いつつ、その右手に持つ必殺の武器をゲヴラーへ突きつけ、

「先ずは、そのカタナを鞘に戻してから捨ててもらえるかな」  
微笑みながら提案。

ゲヴラーは抗うことなく、言われた通りに打刀を鞘に戻し、そしてマストの方へ投げ捨てる。と、ほぼ同時に、

「船倉に潜んでいた賊の抹消、終了した」

大柄な燕尾服人物が向こう側の船から姿を現した。その両手には生々しく血を滴らせるナツクルが装着されている。

「ちよつと遅いなあ。まあいいや。君は“彼”に手出し無用だよ。代わりに、その辺に転がってる連中を掃除しておいてもらえるかな。輸出品共々この船もクリーンな状態で届けないといけないからね」

一瞬、ほんの一瞬だけ、小柄燕尾服人物の視線が、語りと共にゲヴラーから大柄な燕尾服人物に逸れた。ゲヴラーはその一瞬を逃さず、腰に留めていた巾着状な小皮袋の口紐を素早く解き、一瞬の内に、その小皮袋を小柄燕尾服へ向けて投擲。同時、打刀が転がっているマストの方へ、駆け出す。

次瞬、小柄燕尾服はゲヴラーの行動に気づき、右手の兇器で攻撃しようとするが、一瞬前にゲヴラーが投擲した小皮袋から散乱した金貨、銀貨、銅貨たちが、その狙い定めを微々邪魔する。

だが、小柄燕尾服は急所からずれた狙いのまま、その兇器の引き金を絞る

乾いた破裂の死音。

宙に乱れ飛ぶ硬貨群の直中を力任せに飛翔し往く、一つの終わり。

「っ！」

終わりは、駆け出すゲヴラーの左肩皮肉を削ぎ貫ける。

だが、ゲヴラーが駆ける足を止める事は無く

小柄燕尾服が左手の兇器で改めて狙いを定める頃には、ゲヴラーは打刀を転がしておいた遮蔽物　マストの陰に飛び込み、打刀を回収しつつその身を隠していた。

片膝を付いてマストを背に、改めて右手で打刀を引き抜きつつ、柄を握ったその手の人差し指と中指で、左肩の傷口に触れて傷の度合を確かめる。

「クツ……」

軽く触っただけでも判るくらいに、その部位の皮と肉は削げていたが、しかし致命傷と言うほどでもなく、またその痛みは、動きが完全に封じられるというほどでもなかった。傷口に触れた指先には血痕がベツタリとついていたが、触感的に重要な血管がやられたというわけではないようなので、急いで止血する必要もないだろう。というより、止血している暇がない。

ゲヴラーは研ぎ澄まされた打刀の刃をマストの陰からつき出し、うまい具合に夜空の淡い明かりを反射させ、鏡のように使用し、燕尾服人物達の様子を探る。

ぼつりと紅一点。くゆる煙草の灯火が、それをくわえる人物の表情と共に、刃に映りこむ。一步、また一步と、こちらへ近づいて来る小柄燕尾服人物の呼吸に合わせるかのように明滅する煙草の灯火。その両の手には兇器がそれぞれ健在。

ゲヴラーはご健在な兇器への対処法を思考しつつ、刃の角度を調整して小柄燕尾服人物の背後　大柄な燕尾服人物の動きも探る。

大柄燕尾服は、小柄な方に言われたとおり、こちらのやりとりで紹介してくる様子はなく、セッセッセとそのデカイ両肩に転がる賊を担ぎ、甲板を掃除している。これは確信に近い勘だが、この大柄な方は現状、無視しても大丈夫そうだ。

やはり最大の難敵は、あの拳銃か……。

大多数の賊を相手にするより、あの二挺を相手にする方が困難……

…。まったく、イイ発明である。

さて、どうする。まだ先込め式単発銃が相手なら、扱い難いその長く重い銃身と次弾発射までの時間差を利用してどうにか刀剣類で相手をできるが……。

「ゲヴラー、私は君と一対一で話したいから、こんな手間の掛かることをしたんだよ？ そんな刃を向けるような、無粋なことはいらないでほしいなあ」

打刀の刃に映る小柄な燕尾服人物はそう言うと言いつつ歩みを止め、こちらを見ながら大げさに肩をすくめてみせた。歩みを止めた位置は、ちょうどこちらの一足一刀の間合い外。

「そんな物チラつかされて、まして撃たれてまで、丸腰で出て行くと思うかい？」

ゲヴラーは口先で小柄燕尾服に応えつつ、もはやまともに相手はできないと判断し、退路を探る。

「さっきのは、君が不意にモノを投げるから、つい条件反射で撃っちゃっただけだよ。私に君を殺す意思はないもので、コレだけど

刃に映りこむ小柄燕尾服は、左手の狙いは固定したまま、右手の兇器をクルクルと見せびらかすように回転させ、

「前のヤツは君にバラされちゃったからねえ、特注で作らせたんだ。回転式連発拳銃 輪胴弾倉に六発と、不意の近接戦闘に対応するための打撃用突起と刃。暴発防止の為に引き金が少し重いけど、まあ安全性も兼ね備えている。それに、カツコイイだろう？」

“パトリオット”の知恵も、なかなか捨てたものじゃないよねえ」カツコよかるうが、安全性を兼ねていようが、所詮、殺しの道具だろう。と思いつつ、ゲヴラーはマストから海までの距離を目算していた。どんなに時間を稼いだところで、こちらが不利な状況が変化するわけでもないの、身をさらす危険を承知で、現状唯一の逃げ道たる海へ飛び込もうと思いついたのだ。

ゲヴラーは装備しているサイドポーチに動きの鈍い左手を突っ込



み、折りたたみ式多目的ナイフを取り出す。そして片手で刃を出し、改めて打刀に映りこむ小柄燕尾服の姿を確認した後、打刀を元の鞘に戻し、多目的ナイフを正常に動く右手に、柄ではなく刃の方を挟み込むように持ち替える。

一息吐き呼吸を整え

マストから身をさらすと同時に、多目的ナイフを小柄燕尾服の胸ないし胸元へ向けて投擲し、海の方へ駆け出しつつ、視線でナイフの行方を追う。

ナイフはなかなかの勢いで飛翔し、面倒臭そうに半目で煙草をくゆらせる小柄な燕尾服の方へと目算通りに飛んでゆく。

あと数瞬で多目的ナイフが役割を果たすという時、小柄燕尾服が一見怠情にも思える動作で左腕を動かし、その腕で刺しに来たナイフを受け、そのまま流れる動作で駆けるゲヴラーへ向けて左手の兇器を構え、当たり前のように引き金を引く。

あと四足ほどで海へ跳び込めるところで、しかしゲヴラーは勢いをそのままに体勢を崩し、

「ぐあっ！」

痛い打音と共に身体を甲板に崩れ落とす。

「おつと失礼。つい条件反射で撃っちゃったよ」

小柄な燕尾服は悪びれた様子もなく、煙草くわえる口元の両端を薄っすら吊り上げ言う。そしてゆっくりと歩みながら、左腕に刺さっている多目的ナイフをぬっそりと引き抜き、ほうり捨て、左太股を押さえ苦悶の声を上げるゲヴラーのところへ、一步、また一步と近づいてゆく。

「もう少し調整しないとダメかなあ」

小柄燕尾服は悶えるゲヴラーを見下ろせる位置で立ち止まると、左手の兇器に視線をやりながら言い、

「狙いより少し右に弾が逸れて、大事な血管を貫き切っちゃったみたいだからねえ。まあ、私も左腕を刺されたし、お互い様って感じだけど」

両手の兇器を背腰のホルスターに収納しつつ、片膝をついてゲヴラーの側に寄り、左太股の傷口をサツと見てから言う。そして弱っているゲヴラーの身をまさぐり、サイドポーチを発見するや、中身を物色し、簡易医療キットを発見すると、持ち主に断りもなくそれを使用し、多目的ナイフが刺さっていた左腕の止血を開始する。

「痛みはコントロールできても、私には血流をコントロールしたり、まして自己修復したりはできないからねえ。使えるモノは使わせてもらうよ。ああ、安心してくれていい、ちゃんと君にも応急処置くらいはするから」

小柄な燕尾服は自身への処置が終了すると、言葉通りにゲヴラーの左肩と左太股に対して止血処置を施した。

「ん、肩はどうにかなったけど、太股は出血速度が遅くなった程度で完全には止まらないなあ……。弾は貫けてるけど。まあ、いいか。私が知りたい事に、君が答える時間があれば」

「知りたい事……。だと？」

ゲヴラーは擦れる意識の中で言い、

「そう。私は君に訊きたい事があるから、わざわざこんな面倒な事をしたのさ。まあ、君が自ら死に来るようなマネをするとは思ってもよらなかったけど」

小柄な燕尾服は口にくわえた煙草が触れそうなほどに顔を寄せて応えた。

「殺そうとしておいてよく言う」

「ひどいなあ、ちゃんと急所は外してるのに。それに今、私が君を殺すなんてことはありえない」

小柄な燕尾服は近距離からゲヴラーの顔へ紫煙を吹きかけ、

「その頭の中に有る“私を自由(Liberty)にする”情報を得るまでは」

言葉を吐くと同時に、ゲヴラーの左太股傷口に自身の右手親指をめり込ませる。

ゲヴラーは奥歯を噛み砕きそうなほどに噛みしめ、苦悶の声を漏

らし、苦痛に耐え、

「 つむづく……つはあはあ。……はつきり言おう、君が何を言っているのか理解できない」

超近距離に迫る顔へ応えた。

小柄燕尾服は残念だと言いたげな溜息と共に紫煙を吐き、ゲヴラーから身を離し、背を向け、芝居がかった動作で両腕を広げ、語りだす。

「ゲヴラー、君は自分がココに生きた印を残したいと思ったことはないかい？」

「……？」

ゲヴラーはその答えを知らず、無言。だが、小柄燕尾服はかまわず語る。

「ヒトは後世に子孫を残す。これは自分が歩んだ生の証とも言える。子を産み、育て、教え、自分が歩んだ軌跡を伝え残す。なんとも素晴らしいシステムだと思わないかい？ 死した後も、誰かの内で働き続け生き続けることができる。一つの終わりが、一つの始まりとなり続いてゆく。美しいこの世界の誇るべきシステム。しかし……ね、ゲヴラー。この世界は、システムから外れ螺旋の牢獄に囚われてしまった者には、眩し過ぎるほどに美しく、美しさゆえに妬ましいんだよ。子も産めず、育て教えることもできず、自分の歩んできた軌跡を伝え残す事も叶わず、時の流れと共にココで生きていたことを忘れられてゆくだけの存在。私は、私達は忘れられる為に今を生きているわけじゃない。例え模造の、この身だとしても、私は今生きてココにいる。私は忘れられる未来が待つ宿命から自由（liberty）になる。その為に必要な“標”と“鍵”と“扉”を君は知っている」

小柄燕尾服はズイと接近し、その両の手でゲヴラーの頭部を挟みこみ、万力のように締め上げる。

「 いいかい？ 私を自由（liberty）にする“標”と“鍵”と“扉”がこの中にある。“知識の蛇”の先、“無限なるモノ

”へと到る、君たち裏切り者が奪い去った 私を自由（liberty）にする情報がっ！”

頭蓋を握り潰さんばかりの力で締め上げ、それでもゲヴラーが苦悶の音以外に発しないと知るや、溜息と紫煙を吐くと共に、短く呪文を詠唱した。すると、ゲヴラーの頭部を締め上げる両の手を包むように淡い光を放つ呪文の帯が現れ、そしてそれはゲヴラーの頭部内へとジワリジワリと侵入してゆく

その時。

まるで大海が咆哮しているかのような、腹に響く、いや、船すらも振動する、獣の唸り声のようなモノが、大海と星空の静寂を破った。

小柄な燕尾服も行動を止め、何事かと辺りを探っている。

そして答えは、なんの前触れもなく

賊が乗っていた船の奥に、一隻のその船すら飲み込んでしまいうなほどに巨大な水柱が轟音と共に上がり、その水柱の頂点から、巨大な何かが飛び上がる。

水柱が崩れ落ちると同時に、飛び上がった巨大な何かも下降し、賊の船甲板上へ、甲板の張り板を踏み砕きながら着地。

一部始終を視線で追っていたゲヴラーは苦痛を忘れたかのように目を見開き、小柄燕尾服人物は口にくわえた煙草をポロリとこぼしながら、

「レヴィヤタン……、なぜココに、よりによって今」

苦虫を噛み潰したような表情で、現れたソレの名称を口にした。

小柄な燕尾服が“レヴィヤタン”と呼んだソレは、目を奪われるとかいう以前に、とてつもなく巨大だった。なかなかの大きさを誇っていたっぽい賊の船甲板上にあって、そのダークシルバークレー色の体はとても納まっていない。

大きさに次に目を奪われるのは、その頭部と思われる部位だろうか。ヘビのように左右二つに分かれている下アゴのおかげか、大人五人分くらい軽く丸呑みにできそうな巨大な口は、獣よりも危なそ

うで凶悪そうな低い地響きの如き唸りを上げ、剣の切先のように鋭い合計八つの眼は、目を合わせただけで息の根を止められそうなほどに純粹な狂気で満ちている。

胴体とそこから伸びる、両腕と、尻尾のようなモノは、全体のバランスから見るにどちらかという細い印象で、胴と腕の間に張るように有る翼にも思える膜のようなモノと、尻尾から尾先までスラリと伸びる尻尾の上下にある魚のヒレのような膜が特徴的か。

そしてもつとも目立つと思われる、脚。その太くて巨大な脚は、おそらくは水中で泳ぐことと陸上で跳ぶことに特化していると思われる形で、カエルの脚が超巨大になったような印象。足には水掻き用と思われる膜のようなモノがある。そしてもつとも特徴的な太股部位には、焼印のような印があった。リングに巻きついた蛇が、リングに刺さった十三本の矢に喰らいついていてという印が。

しばし言葉もなく、レヴィヤタンの巨体に意識を奪われていたら、どうやら無事だったらしい大柄な燕尾服人物がどこからともなく現れ、

「まずいことになった」

と、小柄な燕尾服人物に耳打ちする。

小柄燕尾服は苛立たしげに、

「いまさら言われなくてもわかってる」

応え、鞘付き打刀を杖代わりに身を起こそうとしているゲヴラーを見、

「いったいどんな手品を使ったのか、実に興味深いところだが」  
言った瞬間

燕尾服人物達の背後、ゲヴラーの正面に、世界の空白のような長方形の壁が現れた。そしてそこから生まれるように、

「確かに興味深いことだな、ノーバディー。君たちに与えられた任務は、我が社の製品を不正に得、我が社に不利益をもたらした加害者およびその支援者の排除だったはず。しかもそれは七十二時間四十七分三十四秒前に終了しているはずなのだが。なぜ、君たち

は今ココにいるのかな？」

首からチェーンで下げた懐中時計を金色の瞳で見やりながら現れたのは、肩口でザンバラにカットされた黒髪を持つ、背広姿の人物。「ザ・マン……なぜ、ココに」

小柄な燕尾服は、見ていた懐中時計を胸元のポケットにしまう背広姿を視界に捉えるや、質問に疑問で返答しつつ、背後に居るゲヴラーを背広姿人物の視線から隠すように身を動かした。大柄な燕尾服もそれにならう。

「不測の事態に備え、レヴィヤタンをともない対象の警護に来たのだが。果たして想定外の事態に、こうして遭遇したわけだ。願わくば、君の口から状況説明を聴きたいのだが、どうだろうか？ ノーバディー」

ザ・マンというらしい背広姿の人物は、その金色の瞳を真っ直ぐに小柄燕尾服人物へ向けて問うた。と転瞬、その視線が対象を、その背後へと変える。

視線の先に、ザ・マンは一步步確実に歩みを進め、そして、「久しいな、ゲヴラー」

挨拶代わりとでも言うように、杖代わりの鞘付き打刀を足で払い、体勢を崩したその胸元へ掌打を放つ。

「ぐあはっ！」

あまり足に踏ん張りの利かないゲヴラーは、打たれるままの勢いで体勢を崩し飛ばされ、甲板の縁に並ぶリングのタルへ背中から突っ込む。それを追い数歩進んだザ・マンは、こぼれるリングとタルの内で横たわるゲヴラーを見下ろし、

「なるほど。状況は理解した。我ら“パトリオット”に牙剥く裏切り者の発見と追撃は、優先すべき事態　だが、彼等に関しては、君たちが関与する事ではない」

背後でたじろぐ燕尾服達に言葉を投げつつ、ザ・マンは横たわるゲヴラーの襟元を片手で掴み上げ、その身体を、船の縁に追いやる。必然的にザ・マンとゲヴラーの身体は超接近。ザ・マンは吐息がか

かりそうなほど近くにゲヴラーの顔を寄せ、

「人の心など持つべきではなかったな　君も、私も、……あの娘も」

ささよくような遠い声で言葉を紡いだ。

次の瞬間

ザ・マンはゲヴラーの身体を、海上へと押しやった。

反射的に何かを掴もうとしたゲヴラーの右手が、ザ・マンの首から胸ポケットにかけて垂れ下がる懐中時計のチェーンを掴み、落下の勢いのまま引き千切る。

数泊の間の後、海面にモノが叩きつけられる音が聞こえた。

ザ・マンと燕尾服人物達が、船の縁から海面を見やる。

そこには、緩やかな波と、消えゆく波紋しかなかった。

「死人に口なし　これで機密が外部へと漏れる恐れが、一つ減ったな」

何かを掴もうとするかのように、消えゆく波紋へ手をかざすザ・マンの言葉が、潮風に吹かれ、消えてゆく……。

そして波紋は、鋭い眼差しで見やる小柄な燕尾服の、その視線の

先で　消失した。

【序】第ZERO章：三節 〈消失と死／孤独と再誕〉

Chapter Zero / \*\*\* part / beginning

見いづつけた。ふふ

身体と共に沈みゆく意識の片隅で、そんな声を聞いたような気がした。

それを起とするかのように、身体が海中へと沈みゆく速度が増す。だが、もはやそれに抗う余力はなく。手にした打刀と懐中時計を放棄することがやっとだった。

流れ出る紅い液体が、歩んだ軌跡のように仄暗さをたたえる海中へ跡を残す。軌跡に添うように、留めていられず吐き出した空気が、昇ってゆく

そこで、意識は暗転する……

……

……

……

……

……遠くから、

波の音が聞こえてきた。

よせてはかえす、規則的な、心地好い自然の音色。

それは次第に近く鳴り

薄く目を開く。

そこには、無限に広がる夜闇のなかで、その存在を主張する煌く星々の輝きがあった。

しばし何をするでもなく、星々の輝きを眺め、身体の右側面



がほのかに暖かい事に気がつく。それはパチパチとはじけるような音をともなっており、「なんだろう」と首を動かし視線をやってみるや、そこには煌煌と燃える焚き火の暖かな光があった。

そこで初めて、自分が砂の上で横になっていると知る。

炎の奥に人影があった。しかしその姿は、メラメラと燃える炎が視線を遮ってしまいよく見えない。

オレは影の姿を視認しようと、身を起こす

「あれ？」

身体は問題なく動いた。痛みも苦しみも一切なく。

慎重に件の二箇所を触れてみる。

しかしそこには、何もなく、傷の痕も無かった。傷の『き』の字も無い。

左肩と左脚を動かしてみても、なんら問題なく動く。

「あ！ 目え覚めたあ？」

炎の奥から、甘ったるい声色が聞こえてきた。

反射的に、そちらに視線をやる。

が、反射的に、視線をそむける。

なぜなら、そこに居たのは、全裸な人物だったから。

「いつきに、目が覚めたよ……」

オレは視線をそむけながら応えた。

「よかったあ。このまま起きなかつたらどおしようかと、ボクはヒヤヒヤしてたんだよあ。“不死の甘露”もあゝ完全じゃあゝないからあ」

不死の甘露？ どこかで聞いたような……、思い出せない……、  
というかオレは知らないのか？

「傷は治せてもあ、それだけだし」

その裸身を隠すつもりがないらしい全裸な人物は、こちらの側で膝を折り、覗きこむように言い、

「ネンのためにいゝ、もう少し飲んでおこう？」

ツユ滴る舌をチロリ出しつつ、ズイとこちらへ身を乗り出し、顔

を近づけてくる。

「いや、もう大丈夫。身体は問題なく動くから」

「なんだ？ なにを断っている？」

「そもそも全裸な人物が舌を出して顔を近づけてくる事と、傷が跡形もなく治っている事は、どう関係している？ なにを、なにを勝手に喋っているんだ オレの口は。」

「というか、一つ訊いていい？」

「ん？ なあゝに？」

「なんで裸なの？」

「もつと先に訊いておくような疑問をいまさら口にする オレの口。」

「そんなあゝボクだけが裸信教みたいな言い方しないでよあゝ。お互いさまなんだからあゝ」

「全裸人物はムツとしたように眉を寄せ、口を尖らせる。」

「お互いさまって…… あっ！」

「なぜだ、なぜ今まで気づかずになっていたんだ オレ。」

「なぜ……」

「なぜってえゝ、お互い又レ又レになっちゃてたしいゝ、なににより穴が開いてたからあゝボクが縫ってあげたんだよあ？」

「ほらこれえ、と朽木に吊るされ焼き火に当てられていたオレの衣服を手に取り、全裸人物は自慢げにその申し訳程度な胸を張る。すると、下乳に横一文字、喉下から下腹部まで縦一文字の十字傷がよく目立つ。その傷は痛々しいというよりも、どこか妖艶美的だ。」

「そしてオレは今更ながら、衣服が朽木に吊るされていたという事を視認する。というより、さっきまでそこに衣服は吊るされていなかったように思うのだが……。いや、しかし実際にはそこにあるし……。なんだ、さっきから何かが、オカシイ。なにか感覚が、目の前で起こっていること違うような どこか、ずれているような？ オレは差し出された自分の衣服を手に取り、広げてみる。」

「すげい」

その一言につきる出来栄だった。

件の撃たれた部位は、その痕跡すら無く、オレの衣服は普通な姿で微妙に湿って目の前にある。

「でしょあゝ。ボクねえゝ自分の服は自分で作るからあゝお裁縫は超お得意なんだあ」

「生乾きなのは、いただけないけどね」

言いつつ、オレは素早く衣服を身に着けていく。

「そんなこと言われてもあゝ海中からあ濡れずにココまで来るなんてえゝボクにはできないしい……、いやならあ乾くまで待てばいいのに」

むうつとしたように軽く頬を膨らませて全裸人物は言う。

「まあ、そうしたいところなんだけど、時間があまり無いんだ」

「なんだ、時間が無いってどういう……、何を言うんだオレは。」

「ええゝそうなのお？ 久しぶりにい会えたからあゝもう少しお喋りしてたいのにい」

耳の垂れたウサギのようにその頭から伸びるブロンドのツイントイルをシュンとさせ、全裸な人物は名残惜しそうに口を動かす。

苦笑を口元に浮かべつつ、オレは装備品を素早く身につけ、最後に手にしたのは

「あゝそれって、お姉ちゃんの時計？」

「ああ、何の因果か オレの手元に戻って来たよ」

「ずっとずっとずっと、一緒に居たいって言ってるんじゃないかなあゝ」

なにがそんなに嬉しいのか、全裸人物は満面の笑みで言う。

「はは……、そうだといいなあ。 自分の背負うべき罪を忘れるなっという戒めかもね」

オレは懐中時計を留めたサイドポーチの中へとしまふ。

背負うべき罪、忘れるな、戒め、なんのことだ……、

何の事を言っているんだオレは。なんでオレは、オレの知らない事をべらべらと喋るんだ。

「そうかなあ〜お姉ちゃんはそんなこと言わないと思うけどあ……。  
あ、そうであ〜手紙があつたんだあ〜」

本当に忘れていてたつた今思い出した、というようにパチンと両手を打ち、全裸ブロンドツインテイルは朽木に吊るされている衣服  
黒紫を基調とした、露出とフリフリのやたら多い、陶器の人形  
が着ていそうなモノ。自分の服は自分で作るといつていたというこ  
とは、コレもお手製ののだろうか　の内側から、水分を含んでち  
よっとブヨツとなった一通の手紙を取り出し、こちらへ差し出す。

下手に力を加えたら千切れてしまいそうなので、両手で慎重に受け取り、これまた慎重に封を切り、中身を取り出し、ゆっくりと広げて文面を見る。

「なんて書いてあつたのお？」

ちよつと身を乗り出し、興味深げに全裸人物は訊ねる。

「……………」

「……………ねえ？」

「……………」

「ねえつてばあ〜」

痺れをきらせたように声をはる全裸人物。

「んっああ、ごめん。文字がにじんでて全文は読めないんだけど

」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

と強調し見せているようなデザインの服に身を包んだブロンドツインテイル人物は、残念そうに眉尻を下げて言葉を紡ぎ

「次に会う時があ敵同士だとしてもあ、ボク達の繋がりは断ち切れない　じゃあね、バイバイ」

海の方へと数歩進み、振り返りざまに小さく手を振り別れの挨拶

バチンツと焚き火が爆ぜた。

世界は一瞬、暗転し

ブロンドツインテイルな人物は、いつの間にか姿を消し、オレも海に背を向け底知れぬ闇をおびる森の中へと姿を消してゆく……

オレ？

確かにオレは森の中へと歩みを進め、もはやその姿は闇の中へと吸い込まれ確認できない。では、オレを見送る“オレ”は、今までオレを感じていた“オレ”は……“オレ”は……

明かりが照らす、底知れぬ闇の森と水平の果てまで続く広大な海。その狭間。

どちらとも交われぬ砂浜に、今ココに居る“オレ”は……今ココに居る、“オレ”は……

いや、いや違う。そうじゃない。“オレ”はオレだ。森の中へ消えたオレが“オレ”じゃないんだ。では、ではアレは、誰？

世界に置いて行かれたような、人影の無い薄闇に覆われた狭間の浜辺は、どこまでも広がり続けているように見え、孤独な不安を増大させてゆく。

置いていかなくてくれ……。オレは……。オレを……。見てくれ。オレが、今ココに居ることを教えてくれ、証明してくれ。

オレはオレを見てくれる他人を求めて、視線を彷徨わせた  
そこに、

黒いフード付きコートを目深に着た人物が一人。なんの前触れも無く、そこに居た。

「貴方はアナタの信ずる道をお行きなさい」

誰だ？

わからない……

でも、どこか 懐かしい。

おもむろにフード付き黒コート人物が、大海と夜空の狭間のその向こう側を指し示す。

「貴方を求める者の呼び声が聞こえるでしょう？ 貴方が世界と繋がる絆／貴方と私が結んだ絆」

どこからだろう。物凄く遠いところから、自分の名前を呼ぶ声が

……

「貴方と私が未来へ繋がる約束 あの娘はとても強がりて頑張り屋。だけど、とても純粹で優しい とても脆い心の娘。もう居場所を失う哀しみをあの娘に与えてないで。貴方があの娘を護ってあげて」

大海と夜空の狭間のその向こう側から、自分を呼ぶ声が近く鳴ってゆく。

フード付き黒コート人物が、ゆっくりとこちらに近づいてきて

そっと、こちらを抱き包み込んでくる。

頭一つ分、背の低い黒コート人物は、こちらの胸に顔をうずめてきた。

しばし体温と匂いと体重を感じ、

なぜだろう。誰だかわからないのに。懐かしくて哀しくて寂しくて。ずっとこのままで居たいと願うのは。何故だろう？

「あなたは……。オレはあなたを」

言おうとしたら、黒コート人物がふと顔を上げた。目深なフードから覗くのは、金色の曇いた瞳。

「オレはあなたのことが」

憂いた金色瞳の黒コート人物は、そつと人差し指をこちらの口にそえ、語りを止める。そしてオレは微かな最後のささやきを感じた。私が貴方を想い続けるから、過去に囚われて自分を見失わないで。……ゲヴラー。

不意に黒コート人物の体重にそつと押され、背後に一步だけよるめいた。

そこには、足場は無かった。

急激に、森／海／夜空／浜辺／憂いた金色の瞳が　総てが遠ざかってゆく。

「ゲヴラー、貴方は貴方が行く道を、あの娘を未来へ導いてあげてもはや黒い点になりつつある総てからささやく声を聞き、オレはオレの名前を呼ぶ声に引きずられ

ああ……

視界が狭まっていく……

音が遠くなっていく……

意識が擦れてゆく……

そんな中、最後に感じたのは……

絆にも似た

罪意。

約束は……、

……許してくれ、

……ア

。

【序】第三章：一節　く手にした平凡な日常く

罰

憶えていない、  
忘れたいのかもしれない

第三章　く手にした平凡な日常く

遠くから呼ばれているような、曖昧な感覚に引き寄せられ、  
「……………んっ……………」  
薄く目を開く。

光景は、ひどくぼやけていてハッキリしない。  
聞こえる音は、喜怒哀楽さまざまな人の声や、木材が軋むような音や、なにかごちゃ混ぜにしたような嫌悪感を懐くほどの雑音だった。その中であって、細く小さく儂く自分の名前を呼ぶ声だけは、不思議とハッキリ認識できる。

次第に、視覚は古びた木造天井を映していき、聴覚は周りの喧騒を聞き分けてゆく。さまざまな感覚がハッキリしていくのにしたがつて、後頭部の辺りにジワリジワリと、そして急激に強烈に、痛みを感じた。

「っ！」

思わず身もだえしそうになるが、なぜか身体は自由に動かない。というか、なにか腹部の辺りを圧迫されているような……………、なにか乗っているような……………



「ゲヴラー、大丈夫か？ 物凄い音がしたが」

古びた木造の天井を映していた視界に、流れ落ちる長い黒髪を片手で押さえながら腰をかがめてこちらの様子を心配そうにうかがう女性の姿が映りこんだ。リムティッシュである。

「……うん、大丈夫。だと思っ。ズキズキするけど」

ゲヴラーの顔面には、苦微笑が浮かぶ。

「しかしまあ、こういうのも一途な思いというのか……」

言葉と共に、困ったような表情を浮かべたリムティッシュの眼差しが、ゲヴラーの腹部へと。その上に乗っかるモノへと移った。

ズキズキ感を後頭部に感じつつ、ゲヴラーもその視線を追って少し半身を起こし。といっても、ほとんど首しか動いていないが

そして、腹部を圧迫している原因とご対面をはたす。

そこに居たのは、円卓の椅子に座り、ヴァーグナー校長、リムティッシュと共に何やら話し込んでいた、魔術学校の女子生徒さんと思われるローブを羽織った黒に近い紫の長髪の人物だった。しかもその表情は、とめどなく流れる涙と鼻水とでボロボロだ。

「やっと、やっとまた会えた。ず、ずっと、ずっとずっと待ってたんだよ、ゲヴラー」

だが、嗚咽交じりに言葉を紡ぐ、喜ばしそくに責めるような眼差しの表情は、どこか華やいでいた。

が、しかし、

「……？ キミはいつたい」

その表情はすぐに凍りつく事になる。

「キミは、キミは誰だい？」

再会を待ち望んだ、彼の言葉によって。

「……、へ？」

結果とは、必ずしも望んだカタチであるとは限らない。

しかし、望もうと、望まざるとに関わらず

結果とは常にそこにあるモノである。

それを運命として、  
受け入れる者もいれば、  
それに抗う者もいる。

見上げた空は、灰色の雲におおわれていた。

こんな空の日は、時間の感覚がハッキリせず、どこか損をした気分になる事がある。

湿っぽい匂いの風が頬を撫でた。この風は、なんとなく嫌いではない。

だが大抵、こんな風の日は雨が降る。

雨の日は、好きじゃない。だが、何故と訊かれても、答えは思い当たらない。ただ、嫌いなのだ。雨の日は。

「はあ……」

溜め息と共に、紫煙が空へ昇ってゆく。

紅一点、紫煙の素がくゆるのは、一本の老木がその頂点に鎮座する小高い丘の上である。この老木は『サクラの木』というらしい。

「花が咲いているところなんて、見たことないけど」

老木に背をあずけ、曇る空を見上げながら、くわえた煙草をくゆらせつつ、小柄な身体に漆黒の燕尾服を着た人物はボソリと呟いた。「操り糸の切れた人形へは、追悼花は咲かせるに価しないって言いたいのかねえ」

小柄な燕尾服は、鎮座する老木に語りながら、眼下に広がる光景を見下ろす。

その視線の先には、何も無い。

いや、よく見れば、一つだけモノがある。

それは、一見すると土塊に見間違えてしまいそうな程に朽ちた石碑だった。

何か文字が刻まれているようではあるが、汚れや破損が目立つそ

れを読み取ることは難しい。

果たしてどれほどの者が、コレを墓標であると認識するだろうか。そしてなにより、この墓標を作った人物を誰が知りえるだろうか。「ま、花が咲かないのは気候が合わないからだろうけど。それで、いつまでそこに突っ立てるつもりだい？」

小柄な燕尾服は、墓標に　いや、首を若干動かし背後に視線をやって、言葉を投げた。

「上への報告を終了した。ロートワール国首都に潜伏している“蛇を喰らう者達”の活動状況、武装の状態、人員規模、先の調査で得た報告する必要がある情報は全て」

言いながら、老木の影から姿を現したのは、なかなか巨大な老木にも勝るとも劣らない大柄な人物だった。まさに巨漢といえるその身を包むのは、しかし小柄な人物と同じデザイン燕尾服である。

「そう。で、今後の私達はどうなるって？」

小柄な燕尾服は、肺に紫煙をたっぷり吸い込んでから、どうでもよさそうな半目で問う。

「ザ・メディックの直下に配属されるそうだ」

「ザ・メディック　マゾヒストのアムリタ・シュヴェルトライテ、ねえ……。 “彼” の屍体を確認したのが、ザ・メディックだったと聞いているが、しかし “彼” の生存はこの眼で確認済み……。願わくばザ・メディックご本人にこの矛盾を訊いてみたいところだが

まっ、 “パトリオット” にとつての “彼” には、このまま永眠しておいていただく事にしよう。その方が都合のいいヒトも居るようだし、私にとつても自分の間は好ましい。それにしても、ザ・メディックの直下に配属とは　死ぬ心配は無くなるが、つまりは最前線に行け。と、そういう事か」

小柄燕尾服は、口の片端を吊り上げて、ニタリとする。

「ザ・マンは、よく勤が働くよねえ」

「しかし、いいのか？　最前線にまわされては “彼” の動きを把握できない。ひいては、再び接触する機会が　」

「いや」

と、巨漢な燕尾服が言うのを遮り、振り返った小柄燕尾服は困った風もなく言う。

「裏切り者は、“彼”だけじゃあないからねえ。確かもう一人が“蛇を喰らう者達”と行動を共にしていたはず。あるいは、“彼”よりも色々知っているかもしれない。急がば回れ、というやつさ。今は状況に合わせて動いた方が、手っ取り早い。結果が望むカタチになるのなら、過程なんて問題じゃあない」

「そうか。問題がないなら、いい」

言つと、巨漢な燕尾服は小柄な燕尾服の隣に並ぶ。どうにもこの二人が並ぶと、小柄な方はより小さく、そして巨漢な方はより大きく見える。なんとか凸凹コンビというより、父親と子供という感じだ。が、子どもっぽさの欠片もない小柄な燕尾服は、

「それにしても、鬱陶しいなあ」

父親らしさなんて元々無い巨漢な燕尾服に向かって言う。

「ずいぶん前からだな」

いきなり鬱陶しいと言われたことに、しかし巨漢燕尾服は変わらぬ表情で応える。

「“ジパング皇女人質銃火器密輸事件”があつて以来、アメル合衆国国内では常に」

紫煙を溜め息と共に吐き出しつつ、小柄な燕尾服は老木に背を向けて歩みだす。巨漢もその後が続く。

「まあ、察しが良いのは尊敬に値するけど。せめてもう少し巧く監視してほしいものだよねえ、気配が鬱陶しくてしょうがない」

「あれは……?」

「さあてね。まあ、見ていただけしかできない連中であることには、違いない」

途中、朽ちた石碑の横を通り抜ける際、小柄な燕尾服はまだそんなに吸っていない煙草を石碑に向かって捨て飛ばした。

名も無き者達に  
墓標はない。

石碑の前にポトリと落ちた火の灯ったままの煙草は、煙を上げて  
いる。

真の英雄達には  
墓標がない。

「さようなら、同胞諸君」  
小柄な燕尾服は歩んでゆく。  
自ら見定めた道を。  
煙草の火は二人が去った後も、石碑の前で灯り続けていた。

【序】第三章：二節 〈手にした平凡な日常〉

帰れる居場所がある。

自分の存在をわかってくれる人がいる。

帰るべき所があるというだけで、説明はし難いが、得られる安心感があつた。

だから、そんな安心感の影に、不安な気持ちを追いやつて、見てみぬふりをしていたのかも知れない。

いや、常に見えていた、気づいていた、本当は。自分が結局のところ何者なのかという、地に足が着かない、宙に浮いたような感覚に。

その場しのぎに過ぎない、帰る場所が在るといふ安心感の薄っぺらな壁を作り逃れようとしていたのかも知れない。だが、その向こう側には確実に自分へ対する疑問が募っていた。あるいはもう少し、いや、うまくいけばこのままずっと、この壁はそれらの思いを覆い隠せていただろう。

だが、壁は唐突に崩された。

不意に現れた少女の、

「ずっと待ってたんだよ、ゲヴラー」

喜びの涙と共に紡がれた言葉によって。

募った思いは、土石流のように流れ出す。

「……キミは、キミはオレの事を知っているのっ!」

まるで肉食獣が獲物に喰らい付くかのように、鬼気迫る表情でゲヴラーは目前で固まっている少女の両肩をわし掴みにする。一瞬前まで後頭部の痛みに苦微笑を浮かべていたのが嘘のようだ。

「……、へ？ え？ ちよっ……？ 何を言っ……、ゲヴラー？ 何を言ってるの？」

理解できない。今、自分に対して彼が口にした言葉が、理解でき

なかった。

金色瞳の少女は、驚きというよりも、ただ訳がわからず目を丸くしている。「なに冗談いつているの？ 全然面白くないよ？」とでも思いたいのか、表情は半笑だ。

無論、ゲヴラーが「ははは、冗談、冗談」なんて言葉を返すわけもなく、

「キミは、キミはオレの名前を呼んだ。やはりオレはゲヴラーという名前なのか？ 教えてくれ！ オレはオレなのか？」

ガバツと半身を完全に起こし、少女に覆い被さるように、その繊細な肩を粉碎するような力で引つ掴み、顔を寄せ、容赦なく自分の思いを、ある意味で貪欲に、投げぶつけた。

「痛いっ 痛い……よ、ゲヴラー」

掴みかけた塵気楼の片鱗を逃すものかと、ゲヴラーの手はキリキリと万力のように少女の肩を締め上げる。

それはもはや暴力に等しい。

だが、それでも「放して！」と口に出さなかったのは、この少女がそれほどにゲヴラーとの再会を望んでいたということなのだろうか。あるいは、自分の知らぬ彼を今目の前に見ていることへの戸惑いだろうか。

黒に近い紫の長髪に金色の瞳を持つ少女は応えを持たず、さすがのように必死な眼差しの彼を、ただ呆然と見つめ返すことしかできなかった。

「落ち着け、ゲヴラー」

細くしなやかな手が、少女の肩を掴む手の上へ、包み込むようにそっと添えられる。それと同時に聞こえた言葉は、決して大きな声ではなかった。酒の力によって無駄に騒がしいこの場所では、もしかしたら聞こえなかったかもしれない 彼女の声でなければ。

動きを止めたゲヴラーは、声の方へ視線をやる。

目が合った。

吸い込まれそうなほどに深い、深淵のようで、それでいて星々が

煌めく夜空のような美しさを持つ瞳だった。

「なあ、ゲヴラー。わかるだろう？」

咎めるでもなく、責めるでもなく、どこまでも包み込むような柔らかな眼差しで。母が子を諭すような慈しみを含んだ眼差しで、リムティッシュはゲヴラーに語りかける。

しばし無言のままゲヴラーは彼女を見つめ、そしてゆっくりと、その両手から力を抜いていった。

全身が一気に弛緩する。

そこで初めて、ゲヴラーは状況を認識したように、ハツとした。

「ご、ごめん。オレはなんて事　その……」

数泊前までの勢いはどこへやら。オロオロと当惑するゲヴラー。

少女はしかし、無言で首を横に振り、彼の服の左袖を、その右手でぎゅっと掴む。

「やはりこうなっていましたか……。もう少し柔らかい方法はないものかと模索していたのですが……」

目の状況を危惧していた人物が、ささやくような小さな言葉を口から漏らした。場の雑音に掻き消されてしまうそんな言葉を、リムティッシュは聞き漏らすことなく、その人物へ視線をやる。

純白の長衣を身に纏う、長い銀髪に尖った耳を持つ人物　どこか悲しげな表情のヴァーグナー校長だった。

「まずは座って、落ち着いて話しましょう」

ヴァーグナー校長が提案し、リムティッシュがゲヴラーと少女に手を貸し、身を立たせる。未だに思考が状況に追いついていない少女はつつむき加減で、しかし頑として掴んだゲヴラーの服の左袖を離そうとしない。

ゲヴラーは、困ったように眉尻を下げた頼りない表情で少女を見、あるいはさすがな眼差しをリムティッシュに向けるが、

「……」

彼と同じような表情のリムティッシュが応えを持つわけもなく、



半思考停止状態の少女の背中を優しく押し、木卓の席へ促すだけである。

ゲヴラーと少女が席に着き 少女はやはり握った左袖を離さないの、ゲヴラーの左側に着席した。

二人の着席を確認した後、その正面に腰を下そうと身体を動かしつつ、リムティッシュは隣のヴァーグナー校長に小声を投げる。

「こうなると、わかつていたのか？」

着席したヴァーグナー校長は一度、目を伏せてから、

「未来で起こりうることは、誰にもわかりません。それゆえに、未来は未来なのですから」

こちらでも小声で答える。

「確かに、そうだな。しかし、ゲヴラーに彼女の事を言わずにいたのは」

「勘ぐり過ぎですよ、リムさん」

「……そうか？」

リムティッシュは静かに聞き返す。

「ええ」

小さく頷きつつヴァーグナー校長は、うつむいて向かいに座る少女に同情混じりの悲しい眼差しをやり、

「ただ、思い出と記憶は似て非なるものということですよ」

ささやくように言うのだった。

そして、

長く感じる短い沈黙に包まれる。

しかし、この場に静寂はなかった。

夕暮が夜へと移り変わる時刻の踊るギュートン亭、その食堂という場所が、一部の者達にお構いなく、お酒の力を借りて壮絶なまでに賑やかであるから、仕方がないことではあるが。

「アリエスさん、混乱しているかもしれませんが、先ほどの現実

です……。彼　ゲヴラー君は、記憶を失っています。私もゼロから聞いたときは、半信半疑だったのですが」

大雑音の中でもよく通る音声で、ヴァーグナー校長は現状を端的に、しかしゲヴラーの側らに座る黒に近い紫な長髪の少女　アリエスにとっては非現実的な理解しがたい事実を、静かに言っただけで聞かせた。

うつむきながらもヴァーグナー校長の言葉を聞いていたアリエスは、「嘘でしょう?」と問うように潤みの増した金色の瞳で側らのゲヴラーを見上げ、見詰める。

視線を受け止めたゲヴラーはしかし、言葉を詰らせ目線を逸らした。

いや、逃げたと言う方が適切だろうか。

アリエスという名の少女に感じえる、言いようもないところから湧き上がる　罪意から。

それは自分の事を知ってくれているのに、こちらは彼女を憶えていない　思い出せないという事への後ろめたさだろうか、それとも何か違う別のモノへの罪意なのだろうか。あるいはそれが解れば、記憶を思い出す取っ掛りになるかもしれないのだが。

ともあれ、

「……………ほんとう、なの……………?」

一度合わせた視線を逸らされた時にほとんど答えがわかった問いを、しかしアリエスは勝率が億分の一の博打にすぎる様に、細々とした消え入りそうな儂い声で口から出した。

それに対してゲヴラーは小さく首肯する事で応える。

「そんな……………」

言葉を漏らすと同時に、アリエスはゲヴラーの服の袖を掴む手にギョツと力を込めた。まるで繋がりが無くなることを恐れるように。

またも場が沈黙に支配されようかという　刹那、

「ゲヴラー……………」

一人の少女が、未だ当惑色の濃い瞳で　しかし決したように、

語りだす。

自分が知りうるゲヴラーを。彼の服の袖をいつそうの力でギュッと握りながら。

ジンカ大砂漠での出会い。

二人での旅。

そして、別れる原因たりうる船上での出来事を。

アリエスは一言一句を慎重に選びながら全心全霊を込めて言葉を紡いだ。

なにか手応えのある反応が返ってくるのでは。とヴァーグナー校長以外の者達はある種の期待を込めてゲヴラーを見るが。

もともと何かしらの手応えを望んでいるであろう当人　ゲヴラーは、どこか大きかった期待にしかし手応えが無く、変化の無い己に苛立ちのようなものと諦めのようなものを感じつつ、うなだれた首を力無く横に振る。

そんな彼の反応を見て、途端、アリエスは虚無に囚われたような恐怖をとまなう孤独感に襲われた。彼女は血が滲むほどに唇を噛んで、こみ上げてくるモノをどうにか抑え込むが、果たしていつまで耐えられるだろうか。

思い出と記憶は似て非なるもの。

ヴァーグナー校長が最初にゲヴラーと会った時、アリエスについて言わなかったのは、ここに理由があった。

過度の期待を与えても、期待通りにいかねば、その時に受ける反動は大きい。校長はこれを避けたかったのだ　目の前に居る二人の為に。

アリエスを知るゲヴラーは、しかしどこまで突き詰めても“アリエスの知るゲヴラー”でしかないのだ。“アリエスの知るゲヴラー”はゲヴラーを構成する一つのモノではあるうが、ゲヴラーをゲヴ

ラーたらしめるゲヴラーではない。

他者と共有する思い出では、一つの人格を語ることなど不可能。記憶を甦らせる取っ掛りにはなるだろうが、しかしそれまで。

他人が語る自分像を、それが自分だと納得できる者がどこに居よう。

記憶に無い思い出を、他者に一方的に語られたところで、それは犯していない罪を押し付けられる冤罪と同じだ。

実感が持てぬ己の過去と、共感できぬ思い出と、

互いに求めるモノを有しているのにもかかわらず、相容れることができない。

それがどれほど辛いことかは、当人たち以外に推し量れるものではないが。

沈黙が場を支配する。

だが、数泊の後にそれを破るものが居た。

口を開いたのは、

「幽霊海賊事件」を知っていますか？ ゲヴラー君」

うなだれたゲヴラーへ視線をやって問う、ヴァーグナー校長だ。

ゲヴラーは首を横に振る。

「先ほどアリエスさんが言った船上での出来事、というのが“幽霊海賊事件”なのです」

そんな校長の言葉を、

「“幽霊海賊事件”……。確か三ヶ月前の事だな。ジパングからの定期船が海賊に襲われ、それに乗船していた魔術学校の教師が乗っていた者たちを魔術学校に移魔術で逃がしたが、しかし翌日にはその襲われた定期船が積み荷をそのままに、しかも無人で、港街ウラガアに現れたという。暴走キメラ駆除の時、なぜか校内に水夫や商人が居たから依頼内容と相まってよく憶えている」

若干の嫌みを含めて補足するリムティッシュ。「あの時はお世話になりました」とバツが悪そうに校長は応える。

「しかし“幽霊海賊事件”は人も船も積荷もほとんど無事で、その実は集団幻覚だったんじゃないかと巷で言われているが」  
「リムティツシュが“幽霊海賊事件”に対する世間的な認識を口にした瞬間」

「ちがうっ！ 幻覚なんかじゃない。海賊に襲われて、ゲヴラーは私達を逃がすために船に残って……、でも現れた船には乗っていない……」

今の今までうつむいていたアリエスは、必死に、恐れるかのよう  
に、幻覚という言葉を否定しようとした。まるで、ゲヴラーという  
存在が幻覚であったと言われているように思えてしまうのだ。そし  
て、それが堪らなく怖い。

ここでは誰も“アリエスの知るゲヴラー”を知らない。その存在  
を証明できない。共に旅をしてきた彼が、実は家族を失った喪失感  
に耐えかね壊れない為に、自分が作り出した都合のいい幻なのでは  
ないか。そんなことは絶対にありえない。でもしかし、心のどこか  
でそれを否定できない自分が居て。それが信じられなくて、嫌で怖  
くて……。

「すまん。そういうつもりで言ったわけでは」  
リムティツシュは状況に合わせて言葉を選ばなかった自身に憤り  
を覚える。

「重要なのは」  
「ヴァーグナー校長が言う。」

「ゲヴラー君は船に残ったにもかかわらず、港街ウラガアへ現  
れた船に乗っていなかったというところですよ」

「……どういうことですか？」  
ゲヴラーとアリエスの言葉がかさなる。

「ゼロの話ですと、ゲヴラー君の記憶には魔術による干渉の痕跡が  
あったと聞いています。これは私の推測でしかないのですが」

「と言い置いてからヴァーグナー校長は話す。」

「アリエスさんと別れた船上からリムさんに発見されるまでの、空

白の三ヶ月間。ここにゲヴラー君が記憶を失うような出来事があったのではないかと　そして、海賊に魔術を扱える者が居るのかは定かではありませんが、怪しむべきは積み荷を奪うことなく姿を消した海賊達ではないかと。まず、海賊とゲヴラー君の間に何かがあった事には違いはないでしょうから」

「なら、その海賊を探せば……」

ゲヴラーに小さな取っ掛りが見えた。

「あの黒鎧の海賊を探せば……」

アリエスに小さな取っ掛りが見えた。

「あくまでも私の推測ですし、直接記憶に関係あるとは言い難いですが、手掛かりたりうるのでは、と思います。が、しかし情報集めに関しまして、私は知識がありません」

ヴァーグナー校長の言葉を、

「情報集めは、ココに居れば問題ないだろう。ココはそういう場所だ」

リムティッシュユが繋ぐ。

踊るギュートン亭　安宿にして傭兵戦士団スリンガーの拠点。

この場所には、多くの情報を有する事が、己の命を護り、尚且つそれがより良い己の利益に繋がる　傭兵という名の職に付く者達が多むろっている。

情報収集に関しては、どうにかなるだろう。

小さいが確実に、前進への兆しが見えてきた。

【序】第三章・三節　く手にした平凡な日常く

兆しが見えたのはいいが、そこから続く会話が無く、話しは切れた　と、思われるところを狙い、今の今まで聞き耳を立てることに専念していた変態が　クソ医者が、

「少し訊きたい事があるのですが、よろしいですか？」

抑えきれない衝動をダダ漏らしの声色で、装着したメガネがギラつく程に変態的な眼差しをアリエスへ向けつつ、ヴァーグナー校長の背後に在る席から問うてきた。

ちなみに、今までクソ医者　ドラッド医師が会話に参加していなかったのは、それなりに機能した理性が好奇心を押さえ込んだという訳ではなく、単に好奇心むき出し気配満点で喋ったらば、この忙しい時間帯の踊るギュートン亭　食堂において最も多忙な人物に雑用を申し付けられてしまうという危機感知能力が働いたからだけである。

背後から唐突に発せられた、粘つくような好奇心色の強い気配と危なそうな声へ、ヴァーグナー校長は背筋にゾクゾクするような寒気を一瞬感じつつも、

「なんででしょうか」

半身を動かして振り向き、冷静に言葉を返す。

他の者達も三者三様な眼差しを、聞こえてしまった危ない声の主へ向けている。

ゲヴァーは疑問符の表情で、リムティッシュは怪訝そうなちよつと険しい表情で、アリエスは変態的眼差しをあてられて引き気味に嫌そうな表情で、ドラッド医師は何を問う気なのだろうか、と。

「先ほどの、手品のように大鎌を消失させた　アレはなんなのでしょうかね？」

ドラッド医師の好奇心が変態的なほど過剰に喰らいついたのは、

アリエスの体格より大きな、タロットカードの死神の鎌を連想させる大鎌をいかにして出現させ、消失させたのか、と云うことだった。だが、彼の問いの意味を理解できたのは、当人たるアリエスと、食堂に居てその光景を目撃した人達だけで、リムティッシュは何のことだ？」と眉をよせ、ゲヴァーも何のことなのだろうかと、話の続きを待っている。そして、ヴァーグナー校長も

「アリエスさん、人が多いところで“アレ”を使用したのですか？ ドラッド医師の問いを理解できていないだろと思われたヴァーグナー校長はしかし、訝しそうな表情で訊く。

当のアリエスは、首を縦に動かすことでそれを肯定する。  
それを目視した校長は、

「そうですね……。いや、まあ、使うか使わないかはアリエスさんの自由ですから、私がとやかく言うことではないですし、アリエスさんも言われる筋合いはないでしょう。しかし、以前にも申しましたように、なるべく人目に付かないように心がけていただきたい。  
“アレ”はどうしても人の目を引きます。まま、目を引くだけならまだよいのですが、しかしドラッド君のように大変な興味を持つ方も居る訳ですから　わかっていただけますね？」

と諭すように、どこか心配そうに言う。

「……はい」

なにかイタズラがばれて叱られている子どものような雰囲気で、頷くアリエス。

「んん、まったく会話の内容が解らないのだが」

疑問符を額に貼り付けながら会話を聞いていたリムティッシュが、もつともな事をつぶやき、

「すこし説明してくれないか？　というよりも、“アレ”とはなんだ？」

話題の直中に居る者達に視線をやりながら訊ねる。

「“アレ”について、口ではなかなか説明し難いところがありました……」



どう言ったらいいものかと思案顔で言葉を探すヴァーグナー校長が返答を頭脳から見つける前に、ローブの内側へ右手を突っ込んで何か探っていたアリエスが

トーン！

木製テーブルの上に、手の平サイズのナイフが一本、突き立つ。

「なんだ？」

リムティッシュは少々険しい表情になって言うが、アリエスは無言のまま突き立つナイフの横に拳を握った右手を置く

そして、華奢な手が開かれる。と同時に掌前方の宙に淡い光をおびた幾何学模様が出現した。が、しかしてそれは一瞬の事。幾何学模様は碎け散り、煌びやかな粒子へと変化し、新たな姿を形成する。粒子が集結した華奢な手の内には、テーブルに突き立つナイフとまったく同じナイフが握られていた。

手の内に在るナイフの刃で、突き立つナイフの刃を叩く。すると、硬質な物がぶつかり合う音がする。つまり手の内に在るナイフも、突き立つナイフと同様に、硬質であるということだ。

アリエスは握っていたナイフの柄を親指と人差し指でつまみ、眼の高さまで持ち上げると、テーブルに突き立つナイフの隣に落とす。が、しかしテーブルに二本のナイフが突き立つことはなく、アリエスの手から離れたナイフは落下するより早く煌びやかな粒子へと変化し、空中に霧散、食堂内に満ちる喧騒の中へ跡形も無くその姿を消失させる。

あとに残ったのは、眼の高さまで上げられたアリエスの右手と突き立ち続けているナイフ、そして、

「……手品？ いや、しかし……んん、今のはなんだ？」

疑問が深すぎて険しくも見えるリムティッシュの顔と、驚いてポカンと半口開けている少々マヌケなゲヴラーの顔。詰るところ、ドラッド医師でなくとも、今アリエスが目の前でやった事を見れば、誰でも疑問を持つということである。

口で説明し難いのならやって見せたほうが早いと思っただ行動だ

るうし、大鎌と比べれば非常に小さく目立ち難いが、しかしヴァーグナー校長が言ったそばから“アレ”を使うアリエスは、きつと将来大物になるだろう。

「私自身、校長先生に訊かれるまで気にした事がなかったから、よくわからないです。使えて当たり前だと思っていたから」

将来大物候補な少女は、テーブルに刺さったナイフをローブの内へと戻しながら、リムティッシュへ応えた。あくまでも、最初にこの事を問うた変態的眼差しでこちらを見ている医師へではない、断じてない。

「当人にわからないとなると」

リムティッシュはヴァーグナー校長を見やるが、

「正直なところ、私にもよくわからないですよリムさん」

「学びの最高峰たる魔術学校　その知恵袋たる校長にも、わからない事があるのだな」

一瞬、ヴァーグナー校長に対する嫌みに聞こえてしまいが、しかし別にリムティッシュは嫌みを言ったわけではなく、「意外だ」とちよつと驚いているのだ。

「長く生きていると、物事を知ろうとする以外に楽しみが無くなってゆき、結果、他の方達より知っている事が増えたというだけで、決して私は万物を知っているわけではないですから」

知ること以外に楽しみが無くなってゆくというのは、長命たるエルフ族のある意味で深刻な悩みだったりするのだが、

「　少し調べてみました」

その悩みを忘却したいかのように、ヴァーグナー校長は行動しているのかもしれない。

「結論から申しますと、やはりよくわかりませんでした。が、類似した魔術が古に存在していた、という事はわかりました」

「ということは、さっきの“アレ”は魔術の一種だと？」

メガネをいっそうギラつかせてドラッド医師が問う。

「そのハズです」

校長は応えるが、

「歯切れが悪いな」

リムティツシユは胸を持ち上げるように腕を組んで、軽く首を傾げ、眉を寄せる。

「我ながらそう思いますが、しかしその類似している魔術自体が古に失われていまして、そもそも本当に存在していたのかすら怪しいものなのです」

「まあ、この際です在る無しは置いておくとして、その類似している魔術というのは？」

ドラッド医師が先を急かす。

「召喚魔術です」

そんなヴァーグナー校長の言葉を聞いても、イマイチ理解できない面々は頭頂部にクエスチョンマークを出現させるが、例外としてドラッド医師だけが更に危ない目つきになった。

そしてヴァーグナー校長は説明する。

「召喚魔術の存在は、私も今回調べて初めて知ったのですが、召喚魔術は古に、事象を司る精霊を具象化させて彼らと意思疎通を計る為におこなわれていた儀式のようなモノであったようです」

「……………て、まさかそれで終わりか？」

まさか違うだろうか？　と思いつつ訊くリムティツシユであるが、

「はい。精霊と意思疎通を計る為におこなわれた儀式であったという事以外に、召喚魔術についてはわかりません」

ヴァーグナー校長はサラッと応える。

「それでどうして、先ほどの“アレ”と召喚魔術が類似していると判断しなのでしょう？」

と問うドラッド医師に、

「今の魔術というのは、もともと世界に存在するモノに対して働きかけ現象を起こすもの　火風水土、そこから派生するモノ、そしてヒトという存在。この世界をこの世界たらしめている、この世界を構成する輪の内側に存在するものに働きかけるのが今の魔術なの

です、と言つと精霊もこの輪の内側に居る存在なので召喚魔術自体は特異ではないのですが、その場に無い存在を術者の都合で具象化させるところが、類似しているのです。しかしあくまでもアリエスさんが行った事を魔術に当てはめるとしたらの考えであつて、コレが正解であるという保証はありません。というよりも、恐らく違つてでしょう。そもそも、無から有を想像によつて創造するなんて事がどうして可能なのか？ 正直に申しますと私の理解の範疇を遙かに超えていて、曖昧な仮説すらまともにたてられません」

校長は一気に語るが、

「すまん。結局、何を言っているのか全く解らん」

リムティッシュが他の面々を代表して言う。

「私も同じようなものですよ。結局、出来る事といえば、先ほどの“アレ”に仮名を付けることくらいです。さしずめ“造魔術”でも」

食堂内に渦巻く喧騒の間から、そんな彼等を鋭く観察していた者が居た。その人物はマグに残った少量の発砲酒を飲み干すと、テーブルの上に代金の硬貨を置いて、踊るギュートン亭から出て行く。

疲れ果てた扉が開閉時に上げる悲鳴を聞いたネコマタハーフのウエイトレス キキが「まいど」と声をかける以外に、誰もその人物が店から出たことを気に留めなかった。

【序】第三章：四節　く手にした平凡な日常く

うつむき、

「造……魔術、ですか。……ヴァーグナー氏ですら、理解しがたいモノ。……ああ　嗚呼あつ！」

伏せた顔面にニンマリと不気味な笑みを浮かべた白衣の男が、ワナワナと沸き起こる欲衝動と抑えきれずに、危ない感情の含まった震える声で呟き、

「ああ、嗚呼つ！　是非につ！　是非に隅々までつ！　その身体を隅から隅まで調べたいっいつ！」

欲望が理性の御する沸点を突破。気持ち悪いくらいに十本の指をワナワカセ、ジワリジワリと「ハアハア」しながら、クソ医者にして変態　ドラッド医師は好奇心の対象たる一途な心を持つ無垢なる少女へにじり寄る。

変態の眼差しにさらされた無垢なる少女　アリエスは、隣に腰掛ける三ヶ月間再会を待ち続けた人物　ゲヴラーの影へ、まるで小動物が怯えて物影に身を隠すように、ふるふると身震いしながら逃げ込んだ。

やっと再会できたゲヴラーが記憶を失い、自分の事を憶えていない、思い出せない、という事実を知った彼女には、もはや眼帯黒鎧のオッサンたるゼロへ勇猛果敢にも襲い掛かった時の勢いはなく、目前に迫り来る変態メガネに対して斬りかかるといふ気力は、髪の毛先ほども沸き起こらなかつた。

今の彼女は、かけられた言葉に対して事務的に返答するのがやっとな心理状態なのである。

迫り来る変態の暴拳から少女を護れるのは、後に残る者たちなのであるが、ゲヴラーはそもそも自身の事柄でお手上げ状態なのでアテにはならない。

ならば変態にしてクソ医者の変態魂に火を灯してしまったヴァー

グナー校長はというと、しかし物事を知ることへのどうしようもない欲求、探求心から来る押さえ切れない衝動というモノに若干の理解があるのか、苦い表情をしながらも、ドラッド医師を止めようという動きはない。

となると、ここはやはり威厳をたたえながらも涼やかな優しさを持つ黒髪黒瞳の女剣士　リムティッシュの出番なのだが、いかにせん現状のドラッド医師が変態すぎて、生理的に近寄ることを拒絶してしまい、行動が遅れ気味。

各々がどうやって変態に対しようかと逡巡している間にも、ドラッド医師は確実にアリエスへ近づくべく「ハアハア」しながら歩みを進める

その進路上に、突如として飛来するモノがあった。

円形で薄い物体。シルエットだけならばコインのようであるが、大きさはコインの数倍はある。それは回転しながら、ドラッド医師の顔面めがけて高速で飛翔し

「　っ！　ぶえっばおっ！」

欲に目がくらんで視野が狭まっていた彼を、いつそ清々しく殴り飛ばす。

「コレっ、ドラちゃんっ！」

ドラちゃんというのは、踊るギュートン亭でウェイトレスという職につくネコマタハーフ（猫亜獣人）の人物　キキが変態クソ医者に付けた呼び名である。

ネーミングセンスはイマイチなキキが、酒に吞まれてセクハラな感じにからんでくるお客さん達をグーパンチで優しくぶん殴り介抱しつつ、

「ドラちゃんっ！　好奇心は猫をも殺すって言葉　知ってる？」

寒気がするくらいに優しい笑顔で、詰問してきた。

キキが投擲したトレーを顔面に喰らい、片膝をつき顔面を押さえ、て声も無く苦悶する白衣の変態は、痛みでちよっと正気に戻ったらしく、

「好奇心は猫を殺す / Curiosity killed the cat 余計なことに首を突っ込みすぎるのは危険……という意味でしたか？ 貴女に言われると、妙な説得力があるように思えますが」

顔をさすりながら返答する。

「正解 だ・け・どっ！」

ズンズンとこちらへ足を運びながらキキは言い、ドンッ！ とドラッド医師の目前に仁王立つと、

「私がドラちゃんに言いたいののはねっ、ことわざじゃなくて、少しは自重しないと近いうちにお役人さん達のお世話になるよ？ って事 好奇心を持つのは悪いことじゃないけどね、好奇心に任せて首を伸ばしすぎると、その首はそのままギロチンされちゃうよっ？」

呆れ混じりな冷たい眼差しで見下ろし、あるいは諭すように言葉を投げかけるが、

「用心は猫を殺す / Care killed a cat という言葉もあることをご存知ですかキキさん？」

顔をさすっていた手でメガネをクイツと上げ、不敵にギラつかせながら、懲りるとい言葉知らないらしいクソ医者は、目の前にそびえるキキを、口の端を薄く吊り上げ見上げる。

ちなみに“用心は猫を殺す”という言葉の意味は、用心しすぎると猫のような気ままで大胆な行動力を損なう である。が、変態が大胆な行動力を身に付けたら、それは単純に迷惑なだけだ。

「……はあ」

額に薄っすら青筋を浮かべ、片眉と頬をピクつかせながら、

「ドラちゃん、皿洗い」

なんの感情もこもっていない平坦な声色で、キキは吐き捨てる。

何故だろう、この瞬間 酒で無駄に騒がしい食堂内の空気が、凍ったようにシツツと静まり返った。

さっきまで食堂内の雰囲気気にして、品値を半額にしたり豪気に酒までふるまったりしていたキキが、どうしてだろう、もっとも

食堂内の雰囲気をぶち壊した感があるのは。

「あの変態野郎よけいなことしやがって……」「くそお、どうしてくれるんだ……」「姐さんが前にキレたときは食堂内が血霧に染まったって聞いたぞ……」「どうするんだよ、ゼロさんはいねえのか」「怒ってる姿もイイなあ」「嗚呼、あの冷めた眼でオレも叱ってほしい……」「などなど、すっかり酔いが醒めたお客さん達が、各々思うところを小声で呟く。

危機感知本能に理性を強制覚醒させられたドラッド医師は、無言で立ち上がり、そして無言のまま、調理場を兼ねているカウンターの向こう側へと姿を消し往く。

どうやら踊るギュートン亭での暗黙の上下関係は、キキがドラッド医師より上らしい。

「……はあ」

ドラッド医師がカウンターの向こう側へ消え往く姿を、追っていた視線で視認したキキは「疲れたあ」と言うように深い深い溜め息を吐き、

「嫌っ子ちゃん、気持ち悪い思いさせてごめんねえー。ドラちゃん、根は変態だけど悪いヤツじゃないんだよっお。許してあげてくれると嬉しいんだ けど?」

クルリと反転、今まで置いてけぼりを食らっていた面々へ苦い半笑を浮かべつつ、変態のせいで一番嫌な思いをしたであろう少女へ、うかがうような眼差しと共に謝罪の言葉をのべた。暗に、根が変態でどうしようもないから諦めてくれ、あるいは我慢してくれと言っているようでもあるが。

「別に、気にしてない です」

アリエスはゲヴラーの影に身を寄せつつも、そう答える。

「そう。それはよかつたっ」

ニツと猫みたいな笑顔で、キキは安心したように胸を撫で下ろした。それに合わせるかのように、食堂内の空気も元に戻る。

そして早くもお客さん達はホロ酔いな感じである。が、それは酒



によっているというより、キキの笑みに酔っているような風で、ベロンベロンというよりデレデレという感じ。

「なにはともあれ、話に一段落ついたんでしょっ？ さあ、さ、メシを喰えっ！」

いつの間にか持ってきたんだ、という目にもとまらぬ早業で、キキは一同の木卓へ食事を運ぶ。ちなみにメニューは“ギュートン勝つ井”という名の、厚く切ったギュートンの肉へ衣をつけ、油でカリッと揚げ、それをだし汁でグラグラ熱し、半熟タマゴで閉じたやつで、名前に“勝つ”という字があるからか勝負事をおこなう前、食べに訪れる者が多いという一品である。ドデカイ井の影に隠れる

ゲヴラーの影に隠れるアリエスのようだ　小皿には箸休めの漬物があり、なんともコレ最強な丼物だ。

「さあ、召し上がれっ」

言いつつ木卓へドンツ！ と、冷やす為の水で九割薄まった発泡酒　そのジョッキを四つ面々の前へ置く。

「腹が減っては戦は出来ぬ、空腹では妙案も浮かばない　か。まあ、できたての内にいただく」

手を合わせて「いただきます」と律儀に礼をおこなってから、据え置き箸を手に取り、リムティッシュは“ギュートン勝つ井”を食し始める。

「それもそうですね」  
とヴァーグナー校長も続く。

ああ、なぜだろう。本当に美味しいモノは、見た目と匂いだけで、ご飯が食べられそうなのは、他人が食べているモノが、無償に美味しそうに見えるのは。

美味しいモノの誘惑には、どんなマイナス思考も敵う術はなく、ゲヴラーもアリエスも、目の前で美味しそうに“ギュートン勝つ井”を食されて、生唾ゴックン。間を置かずして飲食開始。

いつの世も、どんな状況でも、美味しいモノに対する食欲は強大な力を秘めているようだ。

【序】第三章：五節　　手にした平凡な日常

ゲヴラーの前には二つ、リムティッシュの前には三つ、アリエスの前には四つ、ヴァーグナー校長の前には一つ、それはそれぞれ置かれていた。

食べられて空っぽになった井である。

ちなみに、井のサイズは決して小さくない。

主に来店する傭兵家業の屈強な男達を、一つの井でお腹いっぱいにするくらいの質と量を誇り、並の女性ならちよつとお残しする一品である。

が、ゲヴラー、リムティッシュ、アリエスの三名は、同じ木卓に着くヴァーグナー校長が一つ食べ終わる間に、二つ、三つ、四つ、と苦もなくたいらげた。三名の身体は決して大きくない、というか引き締まった体付きをしているので、線はどちらかといえば細い部類に属す。特にアリエスは細い線に加えて身長も低い。

食べられた“ギュートン勝つ井”たちは、いったい身体のどこに消えてしまったのだろうか。

やたらとご飯を食べる人は、食べる事で満たされない心の隙間を埋めようとしている、寂しさで飢えた人だ　と、どこかで聞いた気がするが、まあこの考えは偏見だろうけれども、しかし本当に食べた物はどこにいったんだろう。と、ヴァーグナー校長は、飲食終了直後から眠たそうにウトウトと夢の世界へ船を漕ぎ出して往きそつなゲヴラーと、既に夢の世界へ船旅に出てしまっているアリエスを見つつ、ちよつと真剣に思っていた。やはり人体には不思議がいっぱいである。

「類は友を呼ぶ　という言葉が、二人を見ていたら浮かんできたのだが、何故だろうな」

冷やす為の水で九割薄まった発泡酒で、頬を薄く紅にしたリムティッシュが、微笑ましそうに呟く。そして、

「ゲヴラー、眠いなら無理しないで寝てしまったほうがいいぞ。これからどうするかは、明日にでも話し合えばいいのだし」

眠気に抗い、首をガツクンガツクンさせているゲヴラーに提案する。

「……うん、そうさせてもらおうよ」

気合で眠気を御し、答え、半目になりつつゲヴラーは与えられた部屋へ安眠を求め往こうとする。が、席を立とうと腰を浮かせたら隣で座り寝をしていたアリエスがこちらへ倒れこんできた。

「おっと」

眠たくともそれくらい反射神経は働き、ゲヴラーはアリエスを受け止める。

どうやらアリエスは寝てもゲヴラーの服の袖を手放す気がないらしく、その為ゲヴラーに引つ張られる形で倒れそうになったようだ。はたから見てみると顔面の筋肉が緩む光景である。が、しかしいつたいアリエスの右手をそこまで一途な頑固にしている思いとは、なんなのだろう。果たしてそれは本人すらも知りえているか、定かではないが。

ともあれ、困った。

「どうしよう……」

アリエスを支えつつ、ゲヴラーは困ったように眉尻をガツクンと下げ困微笑を浮かべる。

「どうしようと言われてもな……」

そんな眼差しで見つめられると、逆に困るのだが、

「キキッ！ 空き部屋はあるか？」

リムティッシュは食堂内の喧騒に負けないように声を張り、踊るギュートン亭ではウェイトレス、傭兵戦士団スリンガーでは依頼受付嬢、しかして実際は雑用も含めてこの場におけるほとんどの仕事をこなしている、多忙な娘さん キキに尋ねる。

「ん？ んんー、今日は珍しく満室だよおっ！」

「本当に珍しいな」

「リムちゃんっ！ ボソッと失敬なこと言わないでっ」

スマンと謝りつつ、

「とりあえず、私の部屋に寝かしておこう」

リムティツシユはアリエスの頑固な右手を優しくしかし確実に解き、彼女を俗に言う“お姫さま抱っこ”状態　何故だかとても力ツコよい絵図らに見える　にすると、ゲヴラーと共に階段を上がり往こうとするが、

「あっ！ 待つてくださあいですよぉ〜」

と、引き止める者がいた。

「どうしたんだ？ アキ」

帰ってくるなりキキに注文を取る雑用を押し付けられ、いつの間にか姿を消していた振袖姿のフェアリー（小妖精）　アキに、リムティツシユが反応し振り仰ぐ。

「ぬし様ではないのですよぉ〜」

アキはエメラルドグリーンに微発光する翼で飛翔し、ゲヴラーの肩に着地するなり彼の頬をペチリと叩いて　　といってもくすぐる程度だが　　ちよつと急った風に、

「校長先生に届けるモノがあつたですよっ！」

大事なことを教えてくれる。

「……………あ」

届け物を渡そうとしたところで、アリエスにボディータックルされるという怒濤の超展開ですっかり忘却していたが、そういえばそうだった。という事を思い出し、

「忘れてしまつていて、すみません。セシルさんから届け物を預かっていました」

背負いっぱなしだったバックパックから、手紙の添えられた小包を取り出し、ヴァーヴナー校長に手渡す。

「はい。確かに受け取りました」

受け取った校長は手紙の宛名等を確認し、ゲヴラーに告げた。

ここでやっとゲヴラーは初仕事を終え、本当の意味で、彼の今日

という一日は、幕を見るのだった。

窓から月明かりが射し込む、深夜にはまだ余裕のある時間帯である。

この時間帯になると、踊るギュートン亭の食堂から、酒を飲んで呑まれているお客さん達の姿が、徐々に減ってゆく。

別に怪奇現象が発生している訳ではない。

ただ単純に、キキがお客さんを追い返しているのだ。

お店側の者がお客さんを追い返すとは、なかなか客商売ではありえてはいけない光景であるが、しかしこの踊るギュートン亭では、常なる風景であった。決してキキが暴拳に出た訳ではない。

酔いつぶれる前に、道端で寝落ちてしまふという危険な状態になる前に、とつと寝床に帰りなさい。というのが、この安宿の  
というか多忙すぎるウエイトレスなキキの経営方針なのだ。

ちなみに経営方針とかを決定しうる権限を本来持つこの踊るギュートン亭の亭主は、今はこの場に居ない右眼を黒い眼帯で覆った漆黒鎧のオツサン　ゼロなのであるが、彼は開店初日以降接客する場に出ていない　ゼロにとってはちょっとトラウマな出来事があったのだ　ので、実質的に踊るギュートン亭を経営しているのはキキであつたりする。

まあゼロは傭兵戦士団スリンガーとして色々御仕事をこなしている  
ので、キキとゼロの二人は、互いに欠落している感のある部分を  
補い合つて、今のこの場所を形作つたと言えようか。

で、大酒をかつ喰らっていた男達が寝床に返され、座れるようになった  
カウンターの席に、ゲヴラーとアリエスを除いた面々の姿があつた。

そして、キキが趣味で漬け込んでいる漬物を酒のさかなに、チビ  
チビと蒸留酒をなめていたヴァーグナー校長が、思い出したように、  
「手紙の配達と、荷物も運んでいただきまして、私の依頼した事は  
ちゃんと完了しました。というわけで、コレは報酬です。ご本人は

眠ってしまいましたので、明日にでも渡しておいていただけますか？」

と、手紙を届けるといふ依頼をこなしたゲヴラーへの報酬がはいった巾着袋を取り出し、カウンターの内側で明日の為に料理の仕込みをしているキキへ手渡す。

「はいよおつ、確かに受け取ったよつ。ていうか、ごめんねえ、ゼロが依頼を強要したんでしょ？」

調理で濡れた手をエプロンの隅で拭ってから、キキは巾着袋を受け取り、それを依頼書類等々が保管されている鍵付きの棚へ収納しつつ、己が相方の横暴を詫びた。といっても、ゼロはゲヴラーの為に依頼を強要しに行ったりしたわけでもないで、実際は誰が悪いわけではない

「いえいえ、事前からゼロに手紙配達を依頼するつもりでしたので」といふことはヴァーグナー校長にもわかっているし、そもそも本当に手紙配達依頼は事前から頼むつもりだったので、誰を責めるつもりは元より無かった。

「そういえばですねえ、その依頼でえ」

キキの漬物をかじっていたアキが、思い出したように語る。手紙を届ける途中で、魔物と戦闘になった時のことだ。

「へえ、ゲヴラーはなかなか良いセンスをしているようだね」

話を聞いたリムティッシュが、関心したように声を漏らす。

「ふと思っただけだよさつ、剣士って記憶失くしても戦えるものなの？」

キキが素直な疑問を、この場ではゲヴラーと同じく刀剣類を扱うリムティッシュに投げる　が、

「剣士だから記憶を失くしていても戦えるとは、さすがに限らないとは思うが、私にもよくわからんな」

彼女は首を傾げる以外に応えを知りえない。

「そういう精神や記憶云々の事柄は、医師や魔術師の領分だと思っ  
が」

リムティッシュは言葉と共に、その領分に居る二人　いまだに血洗いをやらされている、本来は踊るギョートン亭と傭兵戦士団スリンガーの専属医師と、美味そうにお酒をチビチビ舐めている魔術学校校長　を、問いの眼差しで見やる。

「断言はできませんが、おそらく生きる為に必要な事は憶えているのではないかと思います」

ドラッド医師が返答する。無論、血洗いは継続中であるが。

「生きる為に必要な事……？」

眉を寄せるはリムティッシュとキキである。

「ええ、この世で生きる為に必要な　例えば言葉です。彼は普通に我々と会話できました。しかし言語の記憶を失っていたら、言葉を覚える前の赤子と同じで、我々と話すことは出来ないはずです。

言葉は人の世ではなくてはならないコミュニケーションツールですから、コレを欠落させてしまつては、あるいは生きることは困難でしょうか？　それにもっと極端に言えば、彼は歩いていた　身体を動かすということも、生まれてから習得するものであり記憶のなせる業です。体の動かし方の記憶がなければ、これまた生まれればかりの赤子同様、まともに動けません。身体を動かさなければ　言うまでもなく生きる事は困難でしょう？　食事を摂ることも、排泄することも　我々の生命活動は記憶の蓄積によってなされています」

ドラッド医師は手を動かしながら得意げに語るが、

「もう少し噛み砕いて喋ってくれないか」

ドラッド医師のくどい言い回しでは伝わり難いようである。

「彼が失くしているのは、彼を彼たらしめる“個性”を形成しうる記憶ではないか、と。身体だけを生かす記憶はある、と言えばいいのでしょうか。彼が、戦わなければ生きてゆけないような状況に身を投じていたとすれば、戦う事が　つまりは剣術を駆使することが、彼の中では生命活動を維持する事と同義であり、個性とは切り離された記憶でありえるわけですから」

「ふうん……なるほど」

思慮深げにアゴに手なんぞを添えて頷くキキである。どうやら彼女には何がしか納得できたようだ。

「個性を忘れる……、本人も辛いでしようが、目の前に知りえる者が居るのに、しかしその者はそこに存在しえないという、居るのに存在しないという矛盾　自身の知りえるその者の人物像が、現状では虚像のようになってしまつという感覚に襲われる者もまた、辛いでしょうね」

手の内で蒸留酒の注がれたコップをころがし、酒の表面に小波を作らせながら、ヴァーグナー校長がその小波を眺めつつ誰にでもなく呟いた。

「それは……、鎌っ子ちゃんのこと、かいにゃ？」  
キキが尋ねるが、

「……………」  
校長は無言で微苦笑を浮かべ、ころがしていたコップの中身を一気にあおる。

「ヴァーグナー氏は、ずいぶんとあの娘さんに情的ですね」

洗った皿を布で拭きながら、ドラッド医師が言う。

「三ヶ月、三ヶ月間も、年端もいかぬ子どもが、隠しきれていない寂しさを隠して、壊れてしまいそうな自分を必死に隠して、気丈な振る舞いをして、ただひたすらにゲヴラー君との再会を信じ続けて探し回る姿を見ていたら、情的になつてしまいますよ」

とヴァーグナー校長が言ったところで、そろそろ自室に戻るとりムティッシュが席を立つ。

「私達が勘ぐつてみたところで何も解決すまい。詰るところ、当人の問題なのだから　私達に出来るのは、補助の手を差し出すことくらいさ」

喪失への怖さを知りえるがゆえに同情の念を懐き、下手な勘ぐりをしてしまっている自身へ対する、戒めのような言葉を吐いて。

漬物を美味しく味わっていたアキは、階段を上り行く自らのぬし



様の背を発見し、慌てて後追い飛翔をする。

「そついえばさつ、ゲヴちゃんつてさ、魔術による精神干渉の痕跡があつたり、対抗呪文が頭に仕込まれてたりしたんでしょっ?」

自室へ行くリムティッシュとアキに「おやすみ」と言ってから、キキはふと思つたことを口走る。

「ええ、そのようですけど」

やっと皿洗いから解放されたドラッド医師が応えた。

「てことはさつ、魔術学校校長がちょいちょいって診たりすれば色々わかつたりするんじゃないのっ?」

もつともらしい意見であるが、

「いえ、おそらく無駄であると思います。ゼロの話だと、アキさんがゲヴラー君を診て、しかしあまり成果はなかつたと聞いてますから」

「なしてそれだと無駄になるの?」

キキは、髪の毛と同色の赤茶い二又尻尾をどことなく疑問系の形にして聞き返す。

「アキさんと私では、天才と秀才の違いがあるということですよ」  
アキがしてもさした成果を得られず、自身がやつても無駄に終わる、と言つことは、アキが天才で、ヴァーグナー校長が秀才ということか?

どちらにせよ、普通より一つ段の高い所にいる、と言っているように聞こえるが。

「なにー、それは嫌み?」

言つキキは、別に気分を害した風はない。

「嫌みというよりは、事実と違いますか。誕生と同時に、呼吸するように、当たり前のように、魔術を扱うフェアリー（小妖精）」

彼ら、あるいは彼女らは、我々エルフと同種の妖精族にカテゴライズされていますが、しかし我々とは根本的に違う存在です。我々

妖精族、特にエルフは、ただ単純に老いることが遅く、ゆえに蓄

積める情報量が多い。魔術に必要とされる知識を多く得ることができる。なので我々は他種族よりも魔術が長けているように他の方々には映るだけで、実際は他種族の方々と妖精族のスタートラインは同じです。ただ我々は知ることを継続できる期間が長い、ただそれだけ。しかしフェアリーはスタートラインの立ち位置からして、反則的なまでにフライングしています。彼ら、あるいは彼女らが、不得意だ、としていることすら、我々から見れば十分すぎるほどの事ができていたりするのです。土水火風を司りし精霊に愛されし小人　この言い方は、彼ら彼女らを畏怖する意味もあるのですよ。一気に喋り、ヴァーグナー校長はコップの蒸留酒をあおる。

正直、なにを言っているのかわかり難い。

「ねえ校長、酔っ払ってるでしょう？」

若干、キキは呆れた感じで、校長の前に置かれている蒸留酒の一瓶を取り上げ、

「とつとと帰りなさい」

酔うと少々ひがみっぼくなる魔術学校校長なエルフ族の、その特徴的な尖った耳を引っ張り、息が掛かるほどの近距離から、強制帰還命令を下すのだった。

遠くから、静かな音が聞こえてきた。

それは次第に近く鳴り、それが人の声であると私は気づく。

涼やで凜とした、それでいて、どこか愁いているような音声だった。

意識がハッキリしてゆくのにしたがって、その声が詩を歌っているのだと認識する。

耳触りの良い声が歌う詩だった……

何故だろう、詩の意味とか全然わからないのに、哀しい。

「すまん。起こしてしまったか」

唐突に、歌っていた声が聞いてきた。

その言葉に、身を起こす。

どうやら私はベッドの上で寝ていたようだ。

声のした方を見ると、そこには、こちらに背を向けて安楽椅子に座り、開け放った窓から月夜の星々を眺めている、黒の長い髪をした人物の後姿があった。

「いえ、別に……、ここは……？　　っあ、ゲヴラーはっ！」

私は自分のいる場所を知るよりも先に、さっきまで隣に居たゲヴラーの姿がない事を知る。

そんな……、やっと、やっと再会できたと思ったのに……。

さっきまで隣にいた彼は……、まさか、今までの事はすべて夢だったなんてこと

「落ち着け。ゲヴラーなら、自室で寝ているよ。ついでにココは、私の部屋だ」

いつの間にか側に来ていた黒長髪の女性が、私の肩に手を置いて制する。

「どこっ！　ねえ、ゲヴラーの部屋はっ」

「だから、落ち着け。いくらなんでも、寝込みへ突撃するのは賛成できないからな」

私をベッドに寝かしつけるように手に力を込める黒長髪の女性

たしか、リムティッシュと言ったか。

私はその力に抗えず、ベッドに押し戻されてしまう。

「明日にでも存分に話し合うといい。だから今は、少しでも寝て明日に備える」

いいな？　と彼女は、私の額にかかった髪を指先で払うと、そつと頭を撫でてくる。

どうしてだろう、そうされると何故だか次第に心地好い安らぎに包まれ

眠気が増してきて……

視界が狭まって……

「私がゲヴラーを見つけココへつれて来て、彼を待つこの子が現れて……。今思うと、私が彼を見つけたのが偶然ではなく必然のよう

に思えてくるから、不思議なものだ」

リムティツシユのささやくような声を最後に  
意識が暗転した。

【序】第三章：六節　　手にした平凡な日常

気が付くと、地には乾いた砂が、天には灰色の曇が、地平の果てまで続いている場所に立っていた。

どこか遠くで、風が啼いている。

ぐるりと周囲を見回し、耳をすませても、視覚と聴覚はなんの變化もとらえない。

ぼつねんと広大な砂の海にたたずむ。

これが孤独というやつだろうか。

何故か、寂しさや恐れを感じず、冷静に、曇天を眺めながらそんな事を思う。あるいは混乱を極めて、冷静であると勘違いしていただけなのかもしれないが。

理由はなかった。あても無かった。だが、足は歩みだしていた。

どれだけ歩いたのかは、景色がなにも変化しないので推測できず、加えて身体が疲れをうったえないので、本当に足をどれだけ動かしているのかわからない。

あるいは、歩いていなかったのかもわからない。

向こうからやってきたのかもわからない。

地平の果てから、砂の地に突き立つソレが、唐突に。

ソレは、変化のないこの薄暗い世界にあつて、凜とした存在感をともない、なにを主張するでもなく、ただそこに突き立っている。

ソレは、打刀と呼ばれる刀剣類。皮を裂き、肉を切り、命を絶つ武器だ。

なぜこんな所に？

疑問の念を懐きつつも、手が打刀に届く位置まで近づくと、そこで初めて、打刀の側に人影があることを認知する。

その人物は、すすり泣いていた。

正確には、すすり泣く音だけが聞こえている。

表情はうかがえない。それはその人物が、地べたに這いずるように、嘆いているから。

打刀を前にして。

何故？

疑問は尽きない。

だがしかし、声をかけることは、はばかられた。

その人物の嘆きは、他の介入を良しとしない。

不意に、人物が顔を上げた。

それを、驚きをもって見た

なぜなら、そこに居たのは自分だったから。

顔を壊して嘆いているが、確かにそこに居るのは、その顔は、

鏡の中に見た自分の　ゲヴラーと呼ばれる男のモノだった。

なぜ“自分”は、泣いているのだろうか？

目の前の“自分”が動いた。

打刀を地から引き抜き、涙を拭っている。

なにか決意めいたものを、嘆きの後の顔にたたえながら

分”は過ぎ去ってゆく。

こちらには気づいていないのだろうか。

真横を通り過ぎ、“自分”は背後へと消えてゆく。

呼び止めようと思ったが、しかし声は出なかった。

いや、かけるべき言葉が、わからなかったのか……。

不意に、微かな音が聞こえたような気がした。自分を呼んでいるような、微かな音が。“自分”が過ぎ去った背後からではなく、真

逆の、

前方から

翌日、リムティッシュが毎朝の鍛錬から自室に戻ると、ベッドに寝ていたはずのアリエスが姿を消していた。

窓際でいつも寝ている自らの相棒たるフェアリー（小妖精）に、  
「なあアキ……」

その所在を訊こうと思ったが、どうにも相棒　アキは豪快にヨダレを垂らして爆睡中であった。

リムティッシュはアキの口元を切れ布で拭いつつ、「寝ているのだから知らない……かな」

あまりにも心地良さそうなアキの寝顔を見てみると、思わず頬の筋肉が緩み、和やかな気持ちになる。

どうせならこのままそつと寝かせておこうと思ったリムティッシュは、自室から出て、階段を下りた。

そして、食堂カウンターの内側で忙しく動く、果たしていつ睡眠をとっているのか謎なウエイトレス　キキに、

「アリエスを見なかったか？」

単刀直入に訊ねる。

「アーちゃん？　アーちゃんなら　ゲヴちゃんの部屋はどこだあゝって、目が覚めるような勢いで訊いてきたから、ゲヴちゃんの部屋教えて、そしたら、さらにスゴイ勢いで上に戻っていったけど」  
髪の毛と同色の赤茶い二又尻尾でリズムをとりながら調理をしつつ、キキはその片手間で答えてくれる。ちなみに「アーちゃん」というのは、キキがアリエスにつけた呼び名である。例の如く、なんのヒネリもない呼び名だ。

「そうか」

アリエスの現在位置を知り、とりあえず一安心と、何の気なしに二階の方へリムティッシュが視線をやった

その時。

早朝には　早朝じゃなくても、どこまでも近所迷惑な、木造建築をぶつ壊わさんばかりの、床を踏み抜いたような騒音が轟き、安宿を構築する木材が軋みの悲鳴をわなないた。

遠くから呼ばれているような、曖昧な感覚に引き寄せられ、

「……………んっ……………」

薄く目を開く。

ぼやける視界に入り込んできたのは、心配そうに形のいい眉を八の字にゆがめた、可愛いよりカッコイイ感じの……そう、確かアリエスという名前の女の子……のはずだが、

「……なんで？」

それは疑問の種にしかない。

何故か？

いま自分が居る場所が、踊るギョートン亭に間借りさせてもらっている、自室のはずだからだ。

寝る前に、扉の鍵は閉めたし……。

あれか。驚くべき出会いが、昨日の今日で、寝惚けているのかな、自分は。

「なんでって、寝ながら泣いてるんだものゲヴラー。心配にもなるよ」

眉間に可愛いシワを刻んで、アリエスの幻影は口を尖らせる。

泣いている？

オレが？

なぜ？

「それは、わからないけど」

と、アリエスの幻影は応えてくれる。ずいぶん律儀な幻影だなと思う。

「幻影？ なに寝惚けてるのゲヴラー。私はココに居るよ」

言うや、彼女はこちらの腕にそっと触れてくる。繊細に取り扱わなければ壊れてしまいそうな、細くて儂いガラス細工のような手で。しかしガラス細工を思わせるその手は、優しい温もりをもっていた。

ガラス細工や、ましてや幻影ではありえない、血のかよった、生きている温かさ。

しばし無言で、その金色の瞳を見つめ……

次第に意識の覚醒が追いつき……

ベッドから半身を起こす。



改めて、黒に近い紫の長い髪に金色の瞳を持つ、可愛いよりカッコイイ雰囲気の娘を見やる。

そしてそこに居るのが、まごうことなきアリエスという名前の娘であると、再認識する。が

「なんで、オレの部屋に？」

寝るまえ扉に鍵を掛けた記憶は確かにある、のだが。

「そ、それは……、その……」

アリエスは、なぜか頬を微かに赤らめて、恥らうように視線をそむけてしまう。

なんだろう、妙な間が生まれ、形容し難い性質の静寂に部屋は包まれる。

こんな時に限って些細な物音ですら聴き取る冴えた感覚が、床を踏み鳴らす音を捉えた。それはしだいに近く鳴り

不意に、ピタリと止まる。

「むっ……んんー、はやる気持ちはわからないでもないがな、鍵の掛かった扉を蹴破るのはどうかと思うぞ」

声のしたほうへ視線をやると、開け放たれた扉を見つつ苦い微笑を浮かべるリムティッシュが居た。

リムティッシュは、いまだ涙の跡を残すゲヴラーを見るや、

「好奇心から一つ訊ねたいのだが　アリエス、君はゲヴラーになにをしたんだ？」

ベッドサイドで頬を赤らめているアリエスへ、なにかを思い起こしたように問いかける。

「こういう時は、『どうしたんだ』って言いませんか？　普通」

アリエスは、大人びた疑問の眼差しで答えた。

「私もそう思うよ」

と小声に出しつつ、リムティッシュは二人に食堂へ下りないかと提案し、断る理由のとくにない二人はそれを承諾。

「さ、行こうゲヴラー」

何がそんなに嬉しいのか、アリエスは朗らか表情でゲヴラーに

手を差し伸べる。

< 続くっ！ >

【序】第三章：七節 手にした平凡な日常

食堂に下りてきて、とりあえず朝ごはんを食べようということになった。

カウンター席に腰を落着けたゲヴラーとアリエスは、キキが手早く用意した“キノコのオムレツ”と“ギュートンのソーセージ”と“黒糖パン”を猛然と食している。

そんな二人の隣で、リムティッシュはコーヒーを味わいつつ読書を楽しんでいる。どうやら彼女は、朝からガッツリ食べるタイプではないらしい。

「「「ごちそうさま」」」

ほぼ同時に、ゲヴラーとアリエスが食事の終了を宣言した。

「おそまつさまでした〜」

鼻歌交じりに忙しくお仕事なキキが、皿をさげつつ応える。そして彼女は流れる動作で、水が満ちているタルの中へさげたお皿をぶっ込み、

「で、ゲヴちゃんにわたす物があるんだよっ」

濡れた指先をエプロンの隅っこで拭い、依頼書類等々が保管されている鍵付きの棚から巾着袋を取り出し、

「はい、コレ」

とゲヴラーの前に置く。

「えっと、あの……」

これはなんですか、とゲヴラーが訊ねるよりも先に、「ほら昨日、ゲヴちゃん依頼の成功報酬を受け取らないで寝ちゃったじゃにやい。だから、これは預かってた仕事の報酬だよっ」

巾着袋を指差しながら、キキはにっこりと猫スマイルを見せてくれる。

そっぴいえばそうだった、と金銭感覚に鋭くなくてはならない傭兵

には明らかに適さないことを思いつつ、ゲヴラーは巾着袋の口紐を解いて中身をのぞいてみる。そこには白い銅貨が数十枚と銀貨が一枚あった。

ロートワール国の硬貨は、見る角度によって、表面にロートワール王家の紋章、裏面に識別番号が、それぞれ浮かび上がる特殊な加工が施されてある。これはロートワール国が唯一のモノで、非常に高度な偽造防止効果を発揮する。ロートワール国の硬貨の信用性を、交易商人が好んでもちいるモノへと高めている。

「金銭については、憶えているか？」

今まで書物の活字へと向けていた視線をゲヴラーに移し、リムティッシュは訊ねる。金銭についての知識が欠落しては、傭兵であるうとなかるうと生活そのものが危うくなってしまう。ゆえに、これは訊ねなければならぬことがらなのだ。

「え、ああ、うん。憶えてるよ。“ギュートンのしょうが焼き”が物凄く安値だったってわかるから」

ゲヴラーは巾着袋から視線を外して、蚊の羽音ほどの音量で「記憶はお金じゃ買えないのにな」などと自虐的な呟きを漏らしてから、苦笑を浮かべリムティッシュを見やる。

「それはよかった」とはさすがに言えない空気を暗というか露骨にかもしたすゲヴラーに対し、ちよつと戸惑ったリムティッシュは、どうにか素っ気なく「そ、そうか」とだけ返した。

「えつと、それで……」

ゲヴラーは、リムティッシュからキキに視線を動かし、

「金銭感覚があるから疑問なんですけど」

「ん？ なにかいにゃ」

「成功報酬の金額が多いと思うんです」

紐の解かれた巾着袋を再びのぞきながら、眉尻を下げる。

「ええつ、そんなことないと思うけど……。ああ、でもエルフって金銭感覚にちよつと疎いところがあるから、間違えちゃったのかな

あ

ちよいと確認させてねっ、とゲヴラーから巾着袋を拝借し、一一二二三……と硬貨を数え、

「……えーと、別に多からず少なからず、ピツタシだけねど」

どうして多いと思ったの？ と眉を寄せつつ、キキはゲヴラーに巾着袋を返却した。

「でもオレ、手紙を届けて小包を持ち帰っただけですよ。それなのに銀貨って」

働きに対してそれ以上の対価を与えられる。高評価を受けたと思えたなら、なんら問題のない、むしろ喜ぶべき事である。が、ゲヴラーには秀でた働きをした憶えはない。というか、誰が行っても同じ結果になることしかしていないのだ。どうにも多い報酬の分だけ自分の境遇を知っている魔術学校校長が同情してくれているように思えてしまい、どこかスッキリしない、苦しい気分を懐いてしまう。実際に言われたわけでもなく、想像の域でしかないのだが いや、自分が同情されていると考えついでしまうことに対して嫌気を感じているのか。

どちらにせよ

ゲヴラーは思考してしまったモノを振り払うかのように頭を振ってから、

「こんなには受け取れませんよ」

キキへ巾着袋を差し出した。

しかしそれを受け取るうとする手は伸びてこない。

キキは腕を組んで小首をひねり、思案顔である。

少し図々しいくらいの気質が傭兵にはちょうどイイと思っている彼女なので、果たしてゲヴちゃんは傭兵にむいているのかなあ、と考えてしまうのだ。

ともあれ、傭兵戦士団スリンガーの受付嬢としては、報酬が正当なものであると教える義務があるので「銀貨は依頼の報酬じゃないよっ」と彼女は説明する。

「銀貨はねっ、ロートワール国からの報酬なんだよっ」

「ロートワール国からの？」

「そうだよつ。スリンガーはロートワール国と契約してるからね、定期的に魔物を狩るっていう。だから偶然にせよ魔物を狩ったゲヴちゃんには、報酬を受け取る権利があるし、こっちとしては渡す義務があるの」

「わかってくれたかいにや？」とキキは差し出された巾着袋を押し戻す。

納得できたような、できないような。ゲヴラーは眉間に小ジワを刻み難しげな表情をつくる。そんな眉間に、

「ゲヴちゃん、細々と考えすぎっ」

キキはデコピンを一撃おみまいした。

しかしゲヴラーは眉間をさすりつつ、「でも」と言葉をつむぐ。

「やっぱり受け取れませんよ。オレ、魔物と戦いはしましたけど倒してませんから」

最終的に魔物を消し去ったのは、“森の貴婦人・メリユジーヌ”である。ロートワール国からの報酬は、彼女にこそ受け取る権利があるとゲヴラーは思うのだ。

「……え？ でも昨日の話じゃあ」

キキは小首を傾げて、昨日アキが語っていた事を思い起こす。

「大立ち回りの末、どうにか勝利を収めた……んじゃないの？」  
ゲヴラーは首を横に振り、否定する。勝利という意味では、“一度は”が正確である。結局、倒した相手は再生してしまったのだから。

「すまん。アキは大げさに語ってしまったようだな」

爆睡中の相棒に代わり、リムティッシュが詫びる。主観の語りには誇張が含まれてしまうのは、そもそも感情ある生命なのだから致し方ないことであり、あえて彼女が代わりに詫びることではない。が、それは根幹にねざす律儀さが良しとしない。まったくもって、真面目な娘だ。

というわけで、ゲヴラーは銀貨をキキへ返す。

キキは後頭部をかきつつ、

「にやははっ。とんだ早とちり、失敬をば」

デコピンかましてしまつて、どこか極まりが悪そうに、返された銀貨を受け取つた。

「ところでゲヴラー。エルフ村を訪れて、なにか思ったことはなかつたか？」

リムティッシュの唐突な問いに、

「いや、とくになにも」

ゲヴラーは巾着袋をサイドポーチにしまいながら答えた。

「……どうして？」

唐突な問いかけに対して彼が疑問を懐くのは、いたって普通の反応である。

「アリエスの話によると、君たちはエルフ村へ向かつていたらしいからな。実際に訪れて、なにかを感じたのではないかと思つたのだ。あるいはそこにヒントたりうるモノがあるのでは、とな」

リムティッシュの意を聞き、ゲヴラーは改めてエルフ村の印象を思い起こすが、やはりこれといったモノはない。

なにかゲヴラーに思うところがあつたなら、エルフ村へ向かうのも選択の内かと考えていたリムティッシュだが、どうやらその選択に早急性はないようだ。となると、

「追うべくは“黒い鎧の海賊”か」

優美なアゴに手をそえて、「うーむ」とリムティッシュは考えをめぐらす。

「あの、なにか問題でも？」

目の前にゲヴラーがいるという事実で九割がた安心しきり、あまり積極的に会話へ参加していなかつたアリエスが、ゲヴラーごしに長黒髪の乙女を、やや不安そうに柳眉を下げて見上げる。九割は安心している、だが残りの一割　つまりゲヴラーの記憶について、目を背けたくなるような現実がそこにあり、唯一その一割を払拭し

てくれるであろう解決案に対して、どうにもリムティッシュが物申してきそうな気配が感じられ、不安感をくすぐるのだ。

「問題、というわけではないよ。ただ、海賊に関すること　やはり海のことだから、港街まで出張って情報収集したほうが効率的だろう、がそれをするべきか否か」

チラリとアリエスへ視線をやったのち、また「うーむ」とリムティッシュは考え込むしぐさをする。

「え、私は最初から港街ウラガアへ行くものだと思ってましたけどそんなことでリムティッシュが考え込んでいるのが、行ってしかなるべきと思っていたアリエスには予想外だった。

「いや、行くには行く。そのつもりではある。だが　」  
リムティッシュはまたチラリとアリエスへ視線をやり、渋いお茶を飲み下したあのような表情で、

「　　交易で栄える国や町というのは、物の出入りと同様に人の出入りも激しく、治安が悪くなってしまふ傾向がある。ルートワールは比較的治安が良いところだがな、交易の拠点たる港街ウラガアは、治安がイイと言われるルートワールの中であってあまりイイ話を聞かない所だな」

喋るリムティッシュの言葉をさえぎって、

「港街ウラガアがどんな所かは、話に聞いて知っています。それよりも、いったい貴女は何が言いたいんです？」

煮え切らない態度で不安感をつつくりムティッシュに、アリエスは苛立ちを覚える。

「ん、まあつまり、治安のイイとはいえない所に子どもを連れて行くのは好ましくない、と言いたいんだ」

リムティッシュのアリエスへ向ける表情は、むしろ子を心配する母のそれに近いのだが、

「っバカにするな！」

アリエスはテーブルに拳を叩きつけ席を立ち、リムティッシュにズイと乗り出すように身を接近させる。



「私を子ども扱いするな。自分の身くらい自分で護れるし、魔物だつて狩ったことがある　んですから」

アリエスは拳を握って声を荒らげて言うが、最後には冷静さが追いついたようで、超近距離まで乗り出した身を引く。

「昨日の、ぞう……造魔術だったか？　アレがなくても同じことが言えるかな？」

リムティッシュの問いに、アリエスは口をへの字しながら首肯する。

「よし。ならば、見せてみる　」

「組み手やるんだつたら、裏庭でやってねっ」

というキキの言葉に従って、リムティッシュとアリエスは装備を身に付けると、踊るギュートン亭の裏庭へと姿を消した。

板挟み状態で、二人のやりとりを傍観していたゲヴラーは、ぽつねんとカウンター席に取り残された。食器を洗ったり調理の準備をしたりするキキの奏でる“踊るギュートン亭朝の顔”の音が、やたらと大きく聞こえる。

それにしても、

「港街ウラガアって、そんなに危ない所なんですか？」

リムティッシュの態度を見るかぎり、そう推測したゲヴラーは、ちよつと寂しさすら覚える静けさを消すかのように、キキに訊ねた。「んっ？　んー、どうだろう。闘技場が在る、この　首都の北地区だつて、結構アウトローがたむろつてるから、危ないって言えは、危ないし。港街ウラガアだつて、場所によると思つよつ。リムちゃんは、ちよいと心配性が過ぎちゃってるけどねっ」

困った風な微笑みを浮かべて、キキは裏庭の方に視線をやる。

想

真実には、  
主義も主張も存在しない。

第FIRST章 公共の敵

Public enemy

- )

戦死者を選ぶ者 一節

Valkyrie

相容れる事のない“誰かの為”の主張は、総てをまきこみ果てを  
見ない。

トンネルのような閉ざされた奥行きをもつ聖堂の縦軸をなす身廊  
には、木製の長椅子が並べられていた。床の大理石は鏡のごとく磨  
かれている。

身廊の正面。

数段高くにとられた内陣には、祭壇があつた。

そこに祀られているのは、虚無。

しかしてその光景が哀美に見えるのは、なぜだろうか。  
祭壇のむこうに。

もつとも奥まつた後陣、半円のドームをかけた張り出し部に、光  
の壁 果てがあるのか認識できない、曰く圧倒的な白闇に包まれ  
た空間があつた。それは堂内の光源となり、虚無を祀る祭壇に、ひ  
ときわ鮮やかな自分の影を刻ませている。

その影に溶け込むように、背広姿の人物が祭壇の虚無を見上げていた。

だがその眼差しは、どこか遠く

背広姿の人物は、夢を眺めていた。

経験した事のある、過去と呼ばれる一つの夢を。

見たすかぎりを砂で覆い隠したその場所には、複数の影があった。

「ジ・イニシエーター。……いや、アルカナ・オルトリンデ　我が妹、我が家族よ。どうしてお前なのだ。どうしてお前が、我々を裏切るのだ」

肩口でざんばらに切られた鴉の濡れ羽根を思わせる漆黒の髪を、吹き荒ぶ砂塵が颯り揺らすのを感じながら、砂漠という場にはにかわしくない背広姿の人物は、ともすれば聞き逃してしまいそうな声量で、対するその人を問いただした。

「過去の罪を、未来に、この子に負わせたくない　そう、思ったから、思えるようになったからです」

目深に着た黒いフード付きコートの奥から、確固たる決意を秘めた金色の瞳をのぞかせて、ジ・イニシエーター／アルカナ・オルトリンデと呼ばれたその人は応える。

「その子は、過去の過ちそのモノだ。それと同時に、我々と管理者この世の秩序を壊す猛毒でもある。それを理解していないお前ではないだろう。その為に“彼”を育て、自由(Liberty)を唱え過去を繰り返そうとする愚か者たちのもとへと潜り込ませたのだから。子を殺せない我々の代わりに始末をつける為に。お前も事を理解していたからシナリオを進行したのだろうか？　なのに、何故」

背広姿の人物は、アルカナの背後に居る二名の人物へ視線を投げやりながら、理解に足る説明を求めた。

「種や世の為ではなく、個を。一つの命が尊い、そのことを知ったから。“彼”の誕生、成長　共に過ごした時間、それらすべてが

私に教えてくれたから、気づかせてくれたから」

言うとアルカナは愛おしげな眼差しを、背後にいる気弱そうで頼りなさげな少年と、彼の腕に抱かれる毛布に包まった幼子に向け、「だから、いかな理由があるうと、産まれた未来を消したくないのです。私の意志で消さずにすむのなら、なおのこと」

再び決意を秘めた目を目前の背広姿の人へ向ける。と同時に、彼女は左手を前方へ突き出す。その手の内には、漆黒の鞘に納まった一振りの打刀があった。そして鯉口を切り、そっと右手を柄にそえる。

「貴方が」

アルカナは、頼りなさげな少年に言う。

「貴方が、その娘を護ってあげて。貴方が信じ行く道を、その娘を未来へ導いてあげて」

ゆっくりと右手に力をくわえ、眠っていた刀身を引き起こす。

頼りなさげな少年は、何かを言おうと口をパクパクと動かししたが、言葉は飲み込んで、一つだけ大きくうなずき、背広姿の人物を警戒しながら少しづつだが確実にあとずさってゆく。

「私から逃れられると思っっているのか？ 殺せずとも捕縛することは可能なのだぞ」

聞こえたとき、すでに背広姿人物の手は頼りなさげな少年を捕まえる寸前まで迫っていた。が、しかしその手は何も掴むことなく引っ込められ、直後、間に割って入ったアルカナの放つ一閃が、空を斬り上げる。

「いきなさい ゲヴラー！」

頼りなさげな少年へうながしの言葉を発しつつ、アルカナは上段から追撃とけん制の刃を背広姿の人物が無防備にさらす肩口へと斬り下ろす。

「まさか身内に斬られることになるとは、可能性すら考えたことはなかったが」

背広姿の人物は大きく踏み込み、アルカナとの間合いを一気に詰

め、余裕を残しながら左の掌で斬り下ろされる打刀の柄頭を受け止める。

「異端者は今ある倫理をくつがえし、秩序を乱す。それを防ぐことが私の使命であり存在理由。……ゆえに、たとえそれが家族であるとしても 私は」

自らを納得されるように呟いてから、背広姿の人物は左腕へと力をくわえて止めていた打刀を押し戻し、後方へと跳び退る。そして嘯くように握った右の拳を頭上へかかげた。何かを呼び込むようにその手は開かれる。と同時に、掌前方の宙に淡い光をおびた幾何学模様が出現。しかしてそれは一瞬の事。幾何学模様は砕け散り、煌びやかな粒子へと変化し、新たな姿を形成する。粒子が集結した手の中には

「アルカナ・オルトリンデ、私はお前を“生”のコミュニティから排除せねばならない。“蛇を喰らう者たち”と同様に、異端者として」

なんら飾り気の無い斧槍が、ただ役割を果たすためそこに在った。

背広姿の人物は、斧槍をかつぐように構える。

そこから先の出来事は

その瞬間、斧槍で斬撃を防ぐと同時に弾き上げた打刀は宙を舞い、数転したのち砂地へと突き刺さった。

得物を失い死に体となった元家族の身へ、背広姿の人物は毅然と斧槍の切っ先を突きつける。

だが必殺の間合いに捉えられてなお、アルカナ・オルトリンデは嘯く。

「すべてを失っても、未来は残ります」と。

もうその時には、頼りなげな少年と毛布に包まった幼子の姿は、砂塵の向こう側へ、有視界外へと消えていた。

断片的で曖昧だった。

憶えていないのか……。

あるいは、忘れたいのかもしれない。

役割を果たすために。

それが自らの使命であり存在理由

だが家族をすら守れない者に、秩序など守る資格があるのだろうか。

背広姿の人物は、虚無を祀る祭壇のその先を見つめながら思考に沈んでいった。

だからだろうか、背後から近づく気配にまったく気づかなかったのは。

闇が動きをもった液体へと変化したようなそれは、硬く閉じられた木製扉の隙間から溢れるように這い出てきた。一定量、扉の下に溜まると、墨汁のようなそれはボコボコと激しく煮えたぎるように気泡を弾けさせ 湧き上がるように、人の輪郭を形成する。そして、それはしだいに鮮明な人形へと変貌していく。首から下の、早熟なふくらみを備える細やかな肢体を、肌にはフィットした漆黒の光沢と艶をもつ液体とも固体とも言い難いモノで禁欲的に覆い隠した、血の気を感じない白く小さな面立ちをもつ、女の人形へと。

その女の人形は、肩まであるストレートの黒髪を揺らしながら歩みを進める。切れ長の目にある寒気すら覚える蒼い瞳に、背を向けて立つ背広姿の人物を捉えて。

肩に何かが軽く触れ、初めて背後になにかいると気がついた。

とつさに身をひるがえし、肩に触れたのが人の手だと認識する。

反射的に触れている手の首を取り、相手の背後にまわると同時に、肩の関節を極め、膝を折って体勢を崩し、動きを封じる 段階に

なつてやつと、それが自らの知る人物だと気づく。

「　　ザ・パペッター。なぜお前がここにいる」

言葉と共に拘束を解かれた顔以外を艶やかな黒で包むその人は、眉を寄せ、蒼い瞳で批難の眼差しを向ける。だが背広姿の人物は、それを受けることもなく、

「お前にはメリュジーヌとエイブラムスの監視という役割があつたはずだろう」

逆に、とがめるように言った。

戦死者を選ぶ者 二節

Valkyrie

急激な変化がもたらすのは、エウアンゲリオンか？

泥や赤黒いシミで汚れほとんど読み解く事のできない本からのぞくページの、かるうじて読むことのできた一文がそれだった。

「ここにいて聞いたことがあるのは、砲撃の音と発破音、剣戟の響きくらいだからねえ。私の経験によれば、良い知らせ エウアンゲリオンには程遠い、あるのは混沌だけさ」

残念だったねえ、と朽ちた本を掴む手だけの存在に、溜めた紫煙を吐き出しながら、小柄な身体に漆黒の燕尾服をまとった人物は呟いた。

崩れた壁に背をあずけ地べたに座り、視線を灰色の空へと移す。そこには、灰色の空を区切るように、一本の直線が地上から天へと伸びている。その頂点は雲海の中へと消え、うかがい見ることはかなわない。

地上と天を結ぶ一本の直線は、“マルドゥック”という名前で呼ばれている。

ある人々には繁栄と創造を象徴する塔として。

またある人々には衰退と創破を象徴する塔として。

小柄な燕尾服の人物は、忌々しそくにマルドゥックをねめつけ、奥歯を噛みしめながらくわえた煙草の紫煙を肺にこれでもかと吸い込む。そして煙を吐くと同時にくわえていた煙草を吐き捨て、

「目障りな塔だよ、まったく。アメルはどこに居ても見える」

背腰から引き抜いた回転式連発拳銃を左手で構え、マルドゥックに狙いをつける。



愛国者達ノパトリオットの拠点にして象徴　マルドゥック。

「私を束縛する螺旋の牢獄。……っクソ」

小柄な燕尾服の人物は悪態を吐いてから、左手の狙いを解き、回転式連発拳銃を背腰に装着した元のホルスターに戻す。それから左手を見つめ、

「こんなに距離を置いているのに、引き金が絞れない　やはり私では、ノーバディーでは、パトリオットに銃口を向けることさえ叶わないか」

自力で束縛から逃れることは叶わない。

「だから」

燕尾服の右ポケットに手を突っ込み、一枚の金貨を取り出す。

「今度は逃さない」

一枚の金貨を、これでもかというくらいに力を込めた右の拳に握りこむ。

「なんだ？ その金貨は」

今まで小柄な燕尾服の側らで沈黙をまもっていた野太い声、その持ち主が問うた。

「ああ、これかい？」

小柄な燕尾服は、デカイ凶体を無理矢理に縮めて崩れた壁の陰に身を潜めているもう一人の燕尾服姿人物に金貨を見せ、

「これは“彼”がめくらましに投げつけてきた物さ」

答えると、流れる動作でその金貨を親指にて弾き上げた。

がしかし、金貨が落下してくるのを待っている掌の上には、いつまでたつてもなんの感触もなく、見当違いの場所に落ちた気配も音も同時に無い。

「ん？」

不審に思った小柄な燕尾服は、金貨がまい上がった自らの頭上に視線をやる。すると、そこに答えが気配もなくいた。申し訳程度に存在を示す乳房の下に横一文字、喉下から下腹部まで縦一文字の、十字傷をわざと強調し見せているようなデザインの服に身を包み、

ブロンドの髪をツインテイルにした少女のような姿で。

「わあ〜金貨だよあ〜。ボクよりお金持ちだねえ〜、リベラちゃん」  
崩れた壁の上に見事なバランスで立ち、弾き上げられた金貨を人差し指と中指で挟みとったその人物は、甘露のようになつとりと甘つたるい声色で言つと、

「よつと」

壁から跳び降り、そのまま腰の高さほどまで崩れている壁に腰掛ける。

「そんなに身をさらしていると、いい標的になりますよ。ザ・メディック」

小柄な燕尾服は、呆れたように軽蔑したように側らの少女に言った。

「ボクのお〜身をあんじてくれるのお？ やさしい〜なあ〜、リベラちゃん。でもねえ〜それは杞憂なんだよう？ ボクは死ねないからあ〜」

ザ・メディックと呼ばれた十字傷をさらす少女は、芝居がかった動作で小柄な燕尾服の正面にまわると、まるでこれからダンスでも始めるかのように足をそろえて両手を広げ、「ほらね」というように身を周囲に見せつける。

「私はアナタの身をあんじたと言うよりも、アナタが身をさらすことで我々の居場所が敵対象に知られてしまうことを危惧しているんです。それと、先ほどから言っている“リベラ”とは、なんですか」

小柄な燕尾服はどうでもよさそうに、ザ・メディックではなく灰色の空を見上げながら応えた。このあまりにも関心の薄い態度に、十字傷をさらす少女は心の底から哀しんでいるというように口を尖らせてブーたれ、

「もつとさあ〜、ボクのことさあ〜、気に留めてくれたつてえ〜イイじゃん。なのにさあ、リベラちゃん冷たいんだもんなあ〜。ボクさあ〜、直属の上官なのにさあ」

「ええ、そうですね。で、“リベラ”はなんなんですか？」

ザ・メディックはゾクゾクと身をくねらせ、

「もうさあ、そんなにボクを悦ばせてどうしたいのう？」

喉にまとわりつくようなイガイガしい甘ったるい吐息が雑じった声色を吐いたのち、「あはっ」と一転、アヒルの口を思わせる笑みを浮かべる。

小柄な燕尾服は嫌悪感を隠しもせず、眉間にシワを刻む。

「でねでね、さつきからあご質問のお、リベラ」はねえー」

なにか重大なことを発表するかのうようにたっぷりの間を作ってから、

「名前なんだよう、キミの。ちなみにねえ、大きな身体のキミはねえー“リオン”くん」

とてもよい考えを言った、と満足げな表情で、ブロンドの髪をツインテイルにした少女は一人「うんうん」とうなづく。

「舞台上に居て名前を持たため役　ノーバディー／誰でもない者に、名を与えるとは。気でも違えましたが、ザ・メディック」

皮肉をたっぷりと込めた小柄な燕尾服　リベラの物言いに、しかしザ・メディックは含みのある微笑を浮かべるとどまつた。

ザ・メディックは右手を握り、拳をつくとそれを高らかに頭上へかかげた。間を置かずして飴細工を思わせる小さく繊細な手は、何かを呼び込むように開かれる。と同時に、掌前方の宙に淡い光をおびた幾何学模様が登場。しかしてそれは一瞬の事。幾何学模様は碎け散り、煌びやかな粒子へと変化し、新たな姿を形成する。粒子が集結した手の中には、ザ・メディックという呼称であらわされるこの少女があつかうに相応しいとは言い難い、長大な剣が在った。自らの使用者たる十字傷をさらす少女を、すっぱりとその刀身の陰に隠せるほどの質量を誇る剣が。

「リベラちゃん、リオンくん。　愉快なゆかいな肉体労働のお時間だよお、う」

ザ・メディックは恍惚とした表情を隠しもせずに、使用者の腕を壊しそうな長大剣を右手で、まるで果物ナイフを扱うように軽々と

振り回し、リベラが背にしている壁の向こう側をその切っ先で指し示す。

リベラはしかし、うっそりと燕尾服の懐からシガレットケースを取り出して、真新しい一本を口の端にくわえる。そして火種を求めて、壁の向こう側へと

跳びだそうとした瞬間、突如として目前に巨大な何かが飛来し、進路をふさいだ。

リングに巻きついた蛇が、リングに刺さった十三本の矢に喰らいついているという焼印を、特徴的な太股部位に刻んだそれは、剣の切先のように鋭い純粹な狂気で満ちている合計八つの眼をこちらへ向け、低い地響きの如き唸りを上げる。

「あれえ〜どうしてえ〜ここに来たのう？ レヴいたん」

ザ・メディックは、まるで飼い犬か猫に接するような気楽さで近寄り、大人五人くらい軽く丸呑みにできそうな巨大な口をもつ“レヴいたん” レイヴィアタンの頭を撫でながら、疑問に小首をかしげた。

その時。

異変に気がついたのはリベラだった。

ポコ。

何かの音がレヴィヤタンの脚陰から聞えた気がして、本能的に背腰のホルスターから二挺の回転式連発拳銃を引き抜き構え、耳を凝らした。

ポコツ、ポコポコ。

その音は、液体が沸騰している時に聞くような音だった。

ポコツ、ポコポコ。ポコツ。ポコツ！

そして唐突に静けさがおとずれ。

リベラは眉間にシワを刻み、いぶかしむように脚陰を凝視し警戒する。

数瞬の間をおいてから、

「あれえ、アシュたんも来てるのお？」

ザ・メディックはレヴィヤタンの脚陰から音も無く現れたストリート  
の黒髪をもつその人へ親しげな声色をやった。

細やかな肢体を、肌にフィットした漆黒の光沢と艶をもつ液体とも  
固体とも言い難いモノで禁欲的に覆い隠す“アシユたん”と呼ば  
れたその人は、切れ長の目にある冷気すら感じる蒼い瞳に嫌気の色  
を宿す。どうやら“アシユたん”という呼称は、ザ・メディックが  
本人の意思を反映することなく勝手に使用しているものらしい。

「音無しのアシユタン・ヘルムヴィーゲ……。死なぬ変人が二人も  
揃って、なにをするつもりだ」

二挺の回転式連発拳銃を手の内に残したまま、リベラが曰く“死  
なぬ変人”二人に背を向けて、彼女は口の中で毒吐いた。

アシユたん　アシユタン・ヘルムヴィーゲ／ザ・パペッターは  
自らの掌で手酌を作り、それをザ・メディックへ向ける。と、手酌  
の内側には流動的なゲル状の闇色物体がなみなみと満ちていた。そ  
れは液体が沸騰するように気泡を弾けさせると、小さな人形を形成  
する。背広姿の人形と、ザ・パペッターを思わせるストレートの黒  
髪をもつ人形に。間を置かずして、それ等の人形は自我を得たか如  
く動き出す。これをもし、戦場という殺伐とした場所ではなく、子  
どもたちが集まる場所で行ったならば、手の平サイズの人形劇とし  
て子どもたちのささやかな笑顔をさそうという大成功を収めたに違  
いない。

そんな小さな人形劇を、ザ・メディックは笑顔もなく眺め、  
「んー、なかなかどうしてえ〜こうなるかなあ……」

手にあつた長大剣を一瞬で消し去り、つまらなそうに駄々をこね  
るようにツインテイルになったブロンド髪の毛先をウジウジといじ  
くる。

「どうしたんです？」

リベラは直属の上官に訊ねた。

「んーうん。御仕事の場所がねえ、変更になつたんだよお」

「敵目標を目の前にしてですか？」

「あーそれはあ、レヴいたんがあどうにかしてくれらしいからあ  
く、気にすることは無いんだよあ」

「そうですね。それで、向かうことになる場所とは？」

リベラの質問に、ザ・メディックはとても簡潔に答えた。

「ロートワール」

戦死者を選ぶ者 三節

Valkyrie

神は死に、超然たる自然のみが残った。

聖堂の縦軸をなす身廊に並べられた木製の長椅子。その最前列には、まるで喪中の雰囲気をもとい座る四人の影があった。

「蛇を喰らう者たち」による“無限なるモノ”の欠損 予想されていたことではある」

漆黒の背広がはち切れんばかりに筋骨隆々たる、赤銅色の髪を持つ大男が言った。

「システムに不具合はつきもの、か」

長く真っ白い顎鬚が漆黒の背広に目立つ、土色の髪を持った小柄な小太りの男が語を繋いだ。

「しかし私たちの処理能力にも限界があります」

漆黒のスカートスーツに豊満な双丘を隠す、水色の長い髪を持ったスレンダーな長身の女性が苦言を呈す。

「わたし達が管理制御すべきは自然環境であり、現状はその再生活動です。“無限なるモノ”が本来は管理制御すべきヒトの世を御するのには限度があり、元来わたし達の役割たる環境再生に支障をきたすまでに至っては、ヒトの世を一時隔離するという手段を選択せざるおえない可能性があります」

漆黒のパンツスーツを着こなす、エメラルドグリーンの髪をショートボブにした女性が苦渋の選択肢を述べる。

「ヒトも自然の一部、切り離すことはありえない。それに、最期の人間 彼と彼女との約束がある」

四人の語を背中で聴いていた背広姿の人物は、祭壇の虚無を見上げながら呟いた。

「すべては生命未来の為に」

そう言つと背広姿の人物は向き直り、疲れきつた人の微笑みを浮かべた。

「すべてを肯定し、再構成しよう」



【序】第四章：一節 〈始まりの終わり〉

悼

一つの命を平等に尊重し続けていても、  
世界はなにも変わらない。

第四章 〈始まりの終わり〉

1

すべては自分で選んだこと。  
だから、後悔はしていない……

本当に？

ベッドの上で安眠する幼娘の喉下に、ダガーナイフの切っ先を突きつけながら“彼”は自問自答していた。

この子が居なければ、あのヒトと別れることはなかったのではないか。

その可能性が脳裏にチラついた途端、  
「後悔していないのなら、憎いと思ってしまったこの気持ちは」  
不意にやった視線の先に、こちらを見つめる眼差しがあった。あのヒトと同じ色の、無垢な金色の瞳がジッと静かに、何を言ってもなくこちらを捉えている。

とたん、“彼”は畏れにも似た感覚に

木造の扉を体当たりするようにブチ開け、“彼”は発狂したが如き勢いで廊下を駆け、階段を落ちるように降り、硬く閉ざされた宿屋の扉を開けようとする。

「おいおいおい。外じゃあ“砂龍が怒っている”ってのに、お前さん連れの子を置いて、どこ行こうってんだ？ あの世以外に」

気を違えたとは思えない“彼”の行動を、いままで暇そつに葉巻を味わっていた宿屋の主人が当惑気味に止めた。それも当然だろう。外では、砂漠で生活している者が“砂龍の怒り”と畏怖する、命すら枯らす砂嵐が吹き荒れているのだから。

しかし“彼”は泣き叫ぶように、宿屋の主人を組み技で床に引き倒し制すると、強引に閉じられた扉を開けてしまう。

轟つという雑な音と共に、粒子の細かい砂が無差別な襲撃を開始し、とたん宿屋の内部は眼も開けていられず呼吸するのも難しい惨状と化した。だが“彼”は、幻想に憑かれた者のごとき盲目さで、周り状況は意に介さず

自らが抱きかかえ連れてきた幼娘を宿屋に置き去り、来た道を駆け戻る。

どれほど駆けずり回ったのかは記憶になかった。ただ気が付くと、地には乾いた砂が、天には灰色の曇が、地平の果てまで続いている場所に立っていた。

足元すら曖昧に見せていた砂塵は、しかし嘘だったかのごとく、ぱったりと静まり返っている。

どこか遠くで、風が啼いた。ぐるりと周囲を見回し、耳をすませても、しかし感覚が捉えた変化はそれだけだった。

ぼつねんと広大な砂の海に独り。

だが“彼”は、確信めいた勘に引つ張られるようにして歩み続けた。

そして

よく知る一振りの打刀を発見する。

その瞬間、“彼”は悟りにも似た感覚で、砂漠にぽつねんとよく知る打刀が突き立っているという事実が教えてくる現実を理解した。

「……ああ」

とたん、操り糸が切られた人形のように、“彼”は力なく膝から崩れ、

「ああ……っ」

突き立つ打刀を前にして、今そこにある変えようもない現実をただ嘆く。

涙も枯れると、仄暗い水底のような心とは対照的に、頭はどこかスツキリしたような明晰さで思考していた。

もう居ないヒトを想って、求めて、嘆いて、後悔し憎悪しても、今そこにある過去は変わらない。感情の変化では、現状は何も変わらない。

だから、だから行動せねばならない。“彼女”の未来を守る為に。

“自分”に残されているあの人の絆は、繋がりは

もうそれしかないのだから。

“自分”に残された居場所は

もうそこしかないのだから。

砂埃でザラついた服の袖で涙を拭い、“彼”は決意めいた表情で、ただ凜と静かに突き立つ一振りの打刀を手に取る。そして踵を返し、急ぎ足で、絆の、繋がり、約束の証明たる“彼女”が居る、無国籍な集落の宿屋へと向かう。

戻る道のりは静かだった。しかし無音というわけではない。自身の発する呼吸や動悸は、やたらと大きく聞こえてくる。それがまるで催眠術のように“彼”を急かし、ひたすらに砂を蹴り駆けさせた。

先ほどは砂塵により視覚や聴覚が阻害され距離感が曖昧だった為か、もつと長い距離を駆けずり回っていたように思えたが、ほどなくして“彼”は数多くのキャラバンが駐留する無国籍な集落へと戻り着いた。

砂嵐による被害を調べている集落の人々を横目に見つつ、“彼”は飛び出してきた宿屋の扉の前へ歩みを進める。

幸いにして扉は硬く閉ざされておらず、普通に押し開けられた。宿内へ入ると同時に、誰かのすすり泣く嗚咽と、それをなだめる女性の声が聞こえた。見ると、うつむいて目元から流れ出る涙を両手でゴシゴシと拭い続ける小柄な誰かに、砂っぽい黒髪をポニーテールに結んだヒトが床に両膝をつき視線を合わせて、一言ひとこと慎重に言葉を選んで語りかけている。

そんな二人の周りでなす術もなくオロオロしているだけだった、過酷な砂漠をすら泣き言もなく渡る屈強な男たちの一人が、

「っ！ テメエ！」  
入り口で様子をうかがっていた“彼”に気づき、苛立たしげに声を荒げた。

その野獣も怯みそうな声に導かれ、その場に居る者の視線が一斉に“彼”を捉える。

今にも殴りかかってきそうな屈強な男たちの眼差しにさらされてなお、“彼”は平然としていた。しかし、その群れをかき分けて、泣言のような喚きを上げながら床に四つん這いになって近づいて来る、金色の瞳を持つ“彼女”の存在を認識すると、“彼”は意図せず少し怯んだ。

だがそんな戸惑いなどおかまいなしに、“彼女”は涙の後のしゃくり上げがおさまるのも待たず、非難するように潤みが多大に増した一対の金色の瞳で“彼”を見据え、脚にすがり付く。

「アンタがその子の連れかい」

身体にフィットした黒い長袖の服に、やたらとポケットがある砂漠迷彩の施されたパンツと、使い込まれた感のあるパンツと同じ迷

彩柄のシヨルダーバッグを身につけた一人の女性が、ポニーテイルを左右に揺らし、履いたアサルトブーツで床をコツコツと踏み鳴らしながら、高圧的な無表情で“彼”のもとへ歩み寄る。

「……………」

視線をやりはしたが、しかし“彼”は無言で答えた。

その答えを肯定と受け取ったポニーテイルな女性は、

「そうかい」

と言い置いてから、密やかに右手を握って拳を作り

放たれた一撃を、しかし“彼”は上体を後へ反らしてあっさりと回避する。

「なにをするんですか」

訝しげな表情で言いつつ、“彼”は周囲の動きを注視しながら左手にある打刀の鯉口を切った。

「なにを　だつて？　こんなに小さな家族ほつたらかして死に行くようなバカを叱るには言葉だけじゃ足りないしアタシの気がおさまらないかなねえ一発くれてやろうって話だよ！」

表情は冷静なままに語気だけを怒気に染め上げて、ポニーテイルな女性は“彼”を睨む。

嫌な脂汗がジワリと吹き出て脚がガクガク泣いてしまいそうな眼差しを真っ向から見返して、

「……………家族？」

目前の女性はなにを言っているんだ、という訝しさに“彼”は眉を寄せ、

「この子は、守るべき対象ではあるけれど、家族と呼べるような特別な関係ではないです」

ただそこにある事実を述べた。

家族　少なくとも、そういう関係でありたかったヒトはもう存在していない。

ついさっき理解したことだ。

もうあの人は居ない。

「もう……あの人には会えない」

言葉が口から出たとたん、枯れたはずのモノが頬をつたい零れ落ちた

そしてソレは止めどなく溢れて頬を濡らす。

「……………なにか、わけありかい」

いきなり泣き始めた“彼”に怒気つけを抜かれてしまったポニーテイルな女性は、一度大きく肩をすくめてから、やれやれというふうに優しい困り顔で床に膝を着いて“彼”に視線の高さを合わせる。と、まだしゃくりあげがおさまらない幼い女の子と、肩肘張って大人びている少年を、ぎゅっつと抱きしめる。二人の子どもの気が静まるまで、それは続いた。

ポニーテイルな女性の腕に抱かれて、“彼”は温もりを思い出していた。もう戻らない、遠い、もはや塵気楼の如き、あの人の温もりを。

でも、なればこそ

憎いと思った心と殺そうとした手で、どうして“彼女”を守るなんてできようか。

言葉はおるか歩き方すら知らぬ、まだ生まれてもいない名も無き“彼女”にこれから必要な、ヒトからの愛情、ヒトからの温もり、ヒトから伝わる教育　総じて親から得るべきモノを、憎悪し殺意すら懐いた者が与え伝えられうるはずもない。

そのことは“彼”も自覚していることだった。

自分には、敵性から“彼女”を守り、なおかつ未来へと導く資格なんてない。だからせめて、“彼女”の未来を阻害する敵性を排除しよう。

それが“彼”の導き出した答えだった。

独りで戦う。

平凡な未来へと続く道を切り拓く。

憎いと思い、殺そうとした、自分が“彼女”にできうることは、

それくらいしかない。

そして見極める為の数日をおいてから。“彼”は、キャラバンの隊長を務める筋骨隆々なヒゲもじゃな男性とその妻たる件のポニーテイルな女性に、名も無き“彼女”を託して姿を消す。

約束は果たせそうにない。

そもそも総ては“彼女”の為ではない。

ただアナタとの繋がりにすぎる自分の

絆と罪は同義になった。

でもそこに安息を懐いてしまうのは……

もう戻せない。

過去は変えられない。

約束は……、

……許してくれ、

……ア

【序】第四章：二節　く始まりの終わりく

いまここに生きて居る理由たりうるモノは、形式はそれぞれで異なるだろうが、誰にでもあるだろう。

例えば　物だったり、夢だったり、欲だったり、自分自身だったり、譲れない信念だったり。

でもそれが、ただの他人であったとき。

いまここに生きて居る理由と同義の、信じていたモノがすべてうしなわれてしまったとき。

ヒトはどこへ逃げればいいのかだろう。  
どうして生きればいいのかだろう……

リムティッシュとアリエスが組み手を終えて裏庭から戻ってくる  
と、ゲヴラーはしかしカウンターテーブルに突っ伏して寝息をたてていた。

「そんなに時間を喰っていたのか……。動いていたから気にも留めなかったが」

待ちぼうけさせてしまった、と申し訳なさそうな表情でリムティッシュはゲヴラーの寝顔を覗き込む。

「いやあ、そんなに時間経ってないよっ？」

頭髮と同色な赤茶色の二又尻尾でリズムをとりながら食器を洗っているキキが、愉快そうに眉尻を下げて言う。

事実として、水をはったタルの中にぶち込んであった多くない数の食器を彼女が洗い終える前に二人は戻ってきたのである。さほど時は経ていない。

「そうか、ならいいのだが」

とは言つものの、気持ち良さそうに寝ているヒトを起こすのは何故だか忍びなく思えてしまい、どうして起こそうものかとリムティッシュは困り顔である。視線でキキにいい起こしかたはないものか



と訊ねてみても、同じような表情が返ってくるだけだった。

アリエスはどうかといえば、ゲヴラーの寝顔が観察しやすい彼の右隣に座り、とろんとした幸せそうな眼差しをしている。このまま放置しておいたら、きっと一緒に寝てしまっただろう。

「まあ、寝る子は育つというがな……」

呟きつつリムティッシュはゲヴラーの左隣に腰を下ろし、カウンターテーブルに頬杖をついて右側に在るほんわかした雰囲気を見やる。意図せずして目が弧を描いて細くなった。

「それでっ、拳で語り合っただご感想はっ？」

食器を洗う雑音の間から、興味津々といった色の濃い音声が続く。「ん？ そうだな……」

リムティッシュは伝染した“ほんわか雰囲気”によるアクビを口内で噛み殺してから、視線をアリエスに向け、

「単純に、戦闘慣れしている」

今さっきの組み手を思い起こしつつ返答する。

「そんな動きだったよ」

カウンターの隅っこにある勝手口から、リムティッシュが先導するかたちで裏庭へと出た。

井戸と物干し以外にこれといって物の無い“踊るギョートン亭の裏庭”は、時たま客同士が起こすケンカを店内に被害無く処理する為に使用される場所なので、こと取っ組み合いに関しては、既に十分な広さが保証されている。

続いて出てきたアリエスは、後ろ手に勝手口の扉を閉め

次瞬、まだ背を向けているリムティッシュ目掛けて跳び蹴りをかます。

完全な不意打ちに無防備なりムティッシュは、しかしスキップするように前方へ身体を逃がし、

「始めの合図もなしにとは、奔放だなアリエス」

舞い風のごとく手刀を薙ぎながら身を反転させ、仕掛けてきた相

手へと向き直る。

「なんの前兆も無く開始されるのが実戦で」

上体を反らし半歩後へ下がることでリムティッシュの打撃を回避しながら、アリエスは腰に巻いた幅のある革ベルトに多々くっ付けてあるポーチの一つに左手を突っ込み、

「卑怯だろうが恰好悪かろうが、生き残ることに、意味が、意義がある！」

キャラバンで培った言葉と共に、ポーチからつかみ出した“それを対面の相手目掛けてぶん投げた。

「なっ！」

意外性というか想定外のことによりムティッシュは驚くヒマもなく条件反射で目をつむり、顔をそむけてしまう。

その決定的な隙を逃すことなく、アリエスは右の拳を握り、右足を踏み込むと同時に、リムティッシュの腹部を狙って一撃を放つ。むろん、寸止めする気などサラサラ無い本気の一発である。

がしかし、その拳が腹部にめぐり込む感触を得ることはなく、

「砂で目潰しとは」

いまだ顔をそむけたままのリムティッシュに手首をつかまれ、動きを止めている。

「いいセンスだな。しかし、それで優位になったという過信が、身動きを単調にしまっている。もう少し慎重になるべきだな」

リムティッシュは言葉と一緒にアリエスを押し返し、

「もう一度だ」

組み手を再開させ

「ふーむ。なるほど」

ただ卑怯なだけとも思えるアリエスの戦い方を聞いたキキは、しかし心の内で高評価をくだした。

命あつての何とやら。

戦闘なんて、セコかろうが生き残ったものが勝者である。重要な

のは、どんなことをしてでも生き抜こうとする強い意志なのだ。ともあれ、

「ねえねっアーちゃん、好奇心から訊きたいんだけどさっ」

嬉々とした調子でちょこちょこ動く自製の利かない二又の尻尾を疑問符型に、キキは眠りに船をこぎだしつつある娘へ問いかけた。

“ねこじゃらし”を前にした猫のように眼は爛々と輝いている。

「はい？」

このヒトは何をソワソワしているのだろう、とアリエスは不思議そうに小首を傾げる。

「砂の他にはさっ、なにか仕込んでたりするのっ？」

とてもどうでもいい事ではあるが、一を知ったら十を知りたくない性のキキからして、ここで疑問を解決しておかないと夜に安眠できないのだ。

「とくに仕込んでいる意識はないですけど……」

言いつつ、アリエスは「常に装備しているのは」と大量にくっ付いているポーチから　お金の入った巾着袋、簡易医療キット、二つの水筒、布に包まれた乾燥肉、蒸して煉って円筒形に乾し固めた米の束、厚めにスライスされた五切れのチーズ、硬すぎる三切れのパン、煌めく星のような形状をした砂糖菓子詰った巾着袋が四つ、ガラス瓶に分けてしまわれた塩やハーブなどの香味料と香辛料、綺麗に小さく折りたたまれた予備のローブ　とカウンターテーブルの上に並べてゆき、続いて取り出したるは、折りたたみナイフが八本、多目的ナイフが十二本、調理用ナイフが四本。これでポーチにあるのは件の砂のみとなったらしい。が、装備品としてはまだあるようで、彼女は胸元に留めてあるダガーナイフを引き抜き置くと、

「あとは」

背後に腕をまわして服の中へ手を突っ込み、肩甲骨の間で背負うように留めてある“それ”を引き抜く。

横目で見ていたリムティッシュは、「まだあるのか」と心の内で驚嘆の声をあげる。

「このハンティングナイフだけです」

だけです、とあっさり登場させたのは、狩猟の際に狩り取った獲物を解体するのに使用したりする大型のナイフであった。獣皮を切り裂く鋭い切れ味と、骨に当たっても関節に差し込んで筋を切っても欠けたり曲がったり折れたりしない丈夫で幅の広い刃と、血を被っても滑りにくく握りやすい独特の形状をした柄の、なんともゴツイ得物だ。

「いまにも露店が開けそう……」

多々の備品と計二十六本のナイフという品揃えを目の当たりにしたキキの、それが率直な感想だった。

「これでも、“勇敢なる砂漠渡りし商人”の娘ですから」

アリエスは誇らしげに小ぶりの胸を張る。どうやら彼女は、比喻ではなく本気で、お金に困ったら即席の露店を開いて商売するつもりらしい。

高品質のナイフは旅人に高値で売れるし、いざという時には自分で使えるから、いっぱい持っていて損はしない　というのが親の教えなのだとか。

と不意に、

「ん……」

痙攣するように一度ピクリと肩を震わせてから、

「……はっ!」

ゲヴラーが顔を上げた。彼はしばし焦点の定まらない眼差しで前方を眺め　しかし、続く動きはない。どうやら、まだ頭の中は「就寝中のようである。」

「ごめんね、うるさかった？」

そもそも起こすつもりでいたのだから、詫びるのは間違いだろうに。アリエスは申し訳なさそうに眉尻を下げ、ゲヴラーをうかがう。

「……へ？」

時間差で目覚めた彼の意識は、ほうけつつも声のほうを見やり、

「お、おう」

まったく飲み込めない状況に当惑しつつも、降参というように両の手を上げた。

「え、どうしたの」

いきなりゲヴラーが降参宣言をしてきたので、アリエスも戸惑ってしまふ。

そんな二者二様の困り果てた様子を、しかしキキとリムティツシユは伏し目がちにしか見ることができなかった。もし直視なんてしたら、こみ上げてくる笑いを堪えきれないのだ。

寝て起きたら、目の前に凶暴なナイフを平然と握った少女が一人居て。どう頑張っても到底理解できそうもない光景に対して、無条件降参する以外に、果たしてゲヴラーに選択肢はあったのだろうか？

【序】第四章：三節　く始まりの終わりく

澄みわたる蒼い空の下。ゲヴラーも目覚めたことだし、と遅々として出発した三人は、港街ウラガアへと向かうべくルートワール国首都東門を指して、しかしのんびりと大通り商店街の石畳を踏みしめ歩んでいた。ルートワール大通り商店街には常と変わらず、商人の呼び込みや値下げ交渉の声絶え間なく飛び交っている。

「キミたちは、まったくいいコンビだよ」

雑踏の中でもよく通る笑いを含んだ声で、リムティッシュが言った。今さっきの光景を思い出しているのか、その表情はふにやりと緩んでいる。

「あえて言っていたただかなくても、知っています。ご親切にどうも少しムツとしたように眉根を寄せて、アリエスは応えた。

そんな二人の間に挟まれて、

「……………」

ゲヴラーは困り気味な苦笑いを浮かべるしかできず、視線はオロオロと逃げ惑うように多種多様な露店の商品をとらえてゆき、

「……………」

ある一点にピタリと固定されて動かなくなった。連動するように、身体の動きも止まる。

「どうしたんだ」

リムティッシュは、いきなり立ち止まったゲヴラーがどこか一点を凝視しているのに気づき、その眼差しをたどるように、

「缶詰？」

荷車の荷台に山と積まれた、円筒形に加工された金属製の容器を発見する。

「おお、若旦那。これに目をつけるとは、目利きでらっしゃる」荷車の脇に立っていたかっぶくのいい男性が、へりくだった笑みを浮かべて、もみ手をしながら、ひたすらに缶詰を見つめるゲヴラ

「へ声をかけてきた。」

「これはアメル合衆国からの輸入品、美味しさをそのままに長期保存を実現した、夢の保存食糧にございます。船乗り、旅人、軍隊からも絶賛される、かの“パトリオット”製品っ！ 統一戦争以後、内紛状態にあるアメル合衆国は国内生産物の輸出を制限してしまつたため、アメルからの、それも“パトリオット”の正規品はなかなか世に流通しなくなつてしまいましたがつ！ そこはワタクシの脈を駆使してっ！ こちらにご用意させていただきましたっ！ 情勢が情勢なだけに、次はいつご提供できるかわかりません。この機会を逃しませぬようっ」

おおぎような商品説明を、腕組みしながら片眉を上げて聞いていたアリエスは、

「……………」

荷車につかつか歩み寄ると、山の中から缶詰を一つ手に取り、あらゆる角度から観察し、

「……………」

最後の確認をするように、側面に刻まれたマークを親指でこすつてから、

「ホントに“パトリオット”製品だ」

ふむ、と納得したように呟いた。

「はい、もちろんでございます」

かつぶくのいい商人はまるでナイシヨ話でもするように口元に片手をあてがい、

「そこらで売っているマガイ物とは違いますよ」

他の露店にチラチラと視線を投げる。暗にココで買わないと大損すると言いたいらしい。

アリエスは値踏みするように缶詰を眺め回してから、チラリと隣に立つゲヴラーの様子をうかがう。彼はいまだに缶詰の山を凝視していた。

「……………まかせてっ！」

アリエスは何をどう解釈したのか、グツと親指を立てて勇んでから、かつぶくのいい商人に向かって何やら手をせわしなく複雑に動かした。今まで事の成り行きを傍観していたリムティッシュには、彼女が何を始めたのかわからず、「ん？」と思わず疑問に顔をしかめてしまう。だがアリエスの手の動きを見た商人は、一瞬驚いたように目を見開きつつも、まるで彼女の動きに応じるように、同じく手をせわしなく複雑に動かし始める。

どうやら手の動きには意味があるらしい。アリエスと商人は表情をこころ変えながら無言でしばらくやりとりをし



【序】第四章：四節　　〜始まりの終わり〜

アリエスは誇らしげに、

「はい、ゲヴラー」

胸に抱いた三つの缶詰を提示した。

それを前にして、しかしゲヴラーは彼女がなにゆえ缶詰を購入したのかわからず、

「……えっ」

と、思わず呆けてしまおうが、

「……ああ、ありがとう」

自分が缶詰の山を凝視していたのを、ものすごく缶詰を欲しがっていると勘違いし、気を回して購入してくれたのだらう、という事に思い当たると、なんだか申し訳ない気持ちになる。

本当のところゲヴラーは缶詰を見つめていたのではなく、それに刻まれているマークを　　リングに巻きついた蛇が、リングに刺さった十三本の矢に喰らいついているという刻印を見ていたのだ。曰く形容し難い、根幹に根ざす“何か”によって惹き付けられるように。

「ところで、好奇心から訊きたいのだが」

事の成り行きを傍観するに徹していたリムティッシュは、そろそろ自分が口を開いてもいい頃合いかと見極め、

「さつき商人とやりとりしていた手の動きは、いったいなんなんだった？」

微妙に早とちりだったことなどつゆ知らぬ、ほくほく顔なアリエスに問うた。

「なんなんだって……ただ“商人言葉”で『もう少し安くして』ってお願いしてただけですけど？」

なんでもない事のように、上機嫌なままアリエスは答える。

「商人言葉」か……いま初めて知ったよ」

ロートワール国首都という商人が行き交うことで栄えている場所に、馴染みの喫茶店や古書店ができるくらい身を置いて生活しているリムティッシュである。それでいて、まさか商人関連の事柄で知らないことがあったとは、彼女自身、純粹に意外であった。

「知らないのが普通ですよ。魚市場とか青果市場とかの卸売場以外では、あまり堂々と表立ってやることじゃないですから」

でも、魚市場とか青果市場とかの卸売場で見られるのは、商品の鮮度を保つ為に短時間でやりとりできるよう簡略化されたものですけどね　と補足説明まで披露して、アリエスはちよつと得意げに微笑む。

そんな彼女を、リムティッシュはしげしげと感慨深げに眺める。

「……なんですか」

心底での上機嫌さは保ちつつ、アリエスはちよつとムツとしたように眉根を寄せてリムティッシュを見やり返す。

「いや、本当に商人なんだなあと感心していたんだ」

まるでよくできる孫娘を愛するような温い眼差しで、リムティッシュは言った。

「取り方によつては、小バカにされているようにも聞こえるんですけどね」

とは言いつつも、さして気にしているわけでもないアリエスは、さらりと事を流すと、缶詰を凝視したままつつ立っているゲヴラーの腕を取り、

「さ、早く行こう」

東門へと歩みを再開させる。

「……まるで恋する乙女だな」

リムティッシュは三步前に行く二人の　アリエスの背中を見やりながら、ポソリと呟いた。それは大通り商店街の喧騒にかき消されて、呟いた本人の耳にもとどかないほど極々小さなものであった

が。

しかし、いまのアリエスを見たら、きっと誰もが思わずそう呟くに違いない。いまの彼女の後ろ姿は、どう見たって、意中の人とシヨッピングを楽しむ恋する乙女だ。

「缶詰ばかり見つめていると、転ぶぞ」

というリムティッシュの警告する声で、

「え、ああ」

ゲヴラーは自分が歩行中であつたことを思い出した。

「そんなに缶詰が珍しいのか？」

のぞきこむように問うてくるリムティッシュに、

「缶詰……というよりは、コレがね」

ゲヴラーは手にある缶詰の刻印を示す。リンゴと蛇と十三本の矢の刻印を。

「“パトリオット”のマーク　が気にかかるのか？」

リムティッシュは缶詰を受け取ると、缶詰の刻印を指差して確認する。

「気にかかるというか……そもそも、“パトリオット”って？」

とても惹き付けられはするのだが、しかし漠然とした“それだけ”であつて、その意味するところは“常識的／パブリック”なモノも含めて、いまのゲヴラーにはまったくわからなかった。記憶に無い、と言つたほうがより正確かもしれない。

そんな彼の疑問に答えたのは、

「“パトリオット”っていうのは、アメル合衆国の首都アメルにある　“マルドウック”って呼ばれてる、比喻じゃなくて本当に天を突くぐらい巨大な“螺旋の塔”の、とっても大きな“物作り商店”のことだよ」

腕を抱き寄せるようにして、ゲヴラーの表情をうかがうように上目で見つめるアリエスであつた。

「蒸気機関つていうのを動力に使つた、ほとんど人の手を必要とし

ない自動製造機械つていうモノで、同じ物を一定の品質を保って大量に製造することのできる、世界で唯一の技術力を持つている集団なんだつて。最近だと、拳銃つていう掌サイズの大砲を開発したとかしてないとかつて話題になつてたよ」

「……へえー」

でもどうして自分は、その商店のマークに惹き付けられるのだろう。そんな疑問を心の内で深めつつ、

「物知りなんだね、アリエスは」

ゲヴラーは感心したふうに彼女を見やる。

「全部、聞いた話……だけどね」

そう告白して、アリエスは照れたようにはにかむ。

どうしてだろう、私に対する態度と露骨に違ふのは。と頭の片隅で思いつつ、リムティツシユはアリエスの説明に補足を加える。

「パトリオット」は“物作り革命”の象徴とも言われていてな、世界中から注目されているんだ。が、しかし“彼ら／パトリオット”は保有する技術の詳細を一切公表していない。技術を秘密にするだけなら、まあまだいい。だが、生鮮食品以外ほとんどの大量生産を可能とし、一定の品質を保った物を安価で販売することを実現させた“彼ら／パトリオット”の技術は、買う側からしたら喜ばしいことだが、しかし物作りで生計を立てていた多くの“人々／職人”が仕事を失ってしまう状況を生み出してしまったんだ。それに端を発して、アメル合衆国では地域的貧富の差が深刻になり、そこへ過激な思想まで加わつて、いまでは、さつき缶詰を売っていた商人が言っていたように“内紛状態”に陥つてしまった。しかしそれによつて、“彼ら／パトリオット”の製造するまったく新しい武器兵器と、“彼ら／パトリオット”の提供する“統率のとれた傭兵／ノーバディー”という商品は、“彼らの戦場”に蔓延し、皮肉にも“パトリオット”の商品価値を上昇させる、という結果につながつてしまつたようだがな」

「“統率のとれた傭兵／ノーバディー”……という商品？」

アリエスは訝るように、

「……初めて聞きましたけど」

リムティッシュを見やった。

「まあ、そこは“商い”というより“こちら／傭兵”側の話だからな。それに表立つような話でもない」

「なにが違うんですか？ 普通の傭兵と」

「個人か、軍隊か、という違いだな。“統率のとれた傭兵／ノーバデー”は個人ではなく、統率のある“集団／軍隊”だ。つまり安価で、即戦力たりうる精鋭の戦闘部隊を雇えるんだよ」

「じゃあ、商売敵ですね」

というアリエスの言葉に、

「ところが、そうでもない」

リムティッシュは平静な態度で返す。

「“統率のとれた傭兵／ノーバデー”の買い手は“アメル合衆国／政府”に限定されているから、“ロートワール／外国”にいる私にはあまり影響がないんだ」

「商売相手を限定したら、そもそも商売にならないと思いますけど」

「……」

意図が理解できない、とアリエスは首を傾げる。

「傭兵だとしても“軍隊／即戦力”を商品として輸出できるようにしてしまったら、いまはまだ、“国／政府”としては色々と不都合な問題があるんだろう……」

どこか遠くを見るように言って、

「……あ、そうだ」

リムティッシュは何か気がついたふうに、

「ちょっと寄り道しよう」

数歩前行くお二人さん呼び止めた。

「寄るって」

あからさまに賛成的ではない態度で、

「どこへですか？」

アリエスは訊く。

それに対してリムティッシュは、商店街の隅っこにポツリと在る屋台じみた簡素な掘っ立て小屋を指差して、

「口入屋／＼くちいれや」に、さ」

先導するように歩みを進めつつ答えた。

迷子探しや引越しの手伝いなどの小遣い稼ぎから、次に行く予定の街まで目的地が同じ商人を護衛したり荷物を運んだりする仕事まで、短期的に仕事が欲しい人には仕事を、短期的に人材が欲しい人には人材を 紹介するのが“口入屋／＼くちいれや”である。

「ただ行くだけより、同時に食事代くらい稼いでおいたほうがお得だろう？」

なんだかんだで、リムティッシュも傭兵なのだ。

【序】第四章：五節　く始まりの終わりく

小麦粉と砂糖を水で溶き、つなぎに摩ったヤマイモを加え、十分に煉る。そして、出来た生地を十分に熱した鉄板でキツネ色になるまで焼き、仕上げに砂糖をまぶせば　小腹が空いたときには欠かせない、庶民の定番“焼き菓子・オヤキさん”の出来上がりである。見てくれはコインのような平べったい小円形で、それを片手で持てる小さめの紙袋にゴツソリ詰めて、ちよいちよいつまみ食うのが、定番の“焼き菓子・オヤキさん”スタイルだ。

「みつつ、もらえるか」

鼻腔をくすぐる甘くて美味しい香りをもんもんと発生させている掘っ立て小屋　の中のヒトへ、リムティッシュは慣れたふうに声をかけた。

「お待ちを、少々お待ちを」

変声期前の少年を思わせる甲高い声で答えると、“くちいれ”と刺繍のある半被をはおったキツネの獣人は、鉄板上の焼きたて“焼き菓子・オヤキさん”をへらで手早くかき集めて紙袋に詰めてゆく。「ところで」

と世間話をするような気さくさで、リムティッシュは“口入屋ノキツネの獣人”に話しかける。

「これから港街ウラガアへ向かうのだが……なにか“美味しい話”はあるか？」

それを聞いた“口入屋ノキツネの獣人”は、「ええ、そりゃあもう、あっしの焼く“焼き菓子・オヤキさん”はご近所でも“美味しい”と評判でして、いまじゃあその評判たるや港街ウラガアにも届こうってなもんですよ」

ことさら陽気に答えて、リムティッシュに“焼き菓子・オヤキさん”が詰まった紙袋をふたつ手渡す。

微妙に会話のかみ合っていない二人だが、

「そうか、そんなに“美味しい”なら食べるのが楽しみだ」

しかしリムティッシュは気にしたふうもなく、むしろ爽やかな微笑みすら浮かべて言い、もろもろの代金を支払う。

「おっと、あつしとしたことがっ」

代金を受け取った“口入屋ノキツネの獣人”は慌てたように言うて、

「一袋、渡し忘れてしまいやした」

最後の二袋を手渡した。

左手にふたつ、右手にひとつ、“焼き菓子・オヤキさん”の詰まった紙袋を持って、リムティッシュは後方待機していたゲヴラーとアリエスのもとへ戻ってくると、左手にあつた二人分をそれぞれ手渡す。そして手元に残った紙袋の中から、まるであらかじめそれが入っていることを知っていたかのように“小さく折りたたまれた紙片”を取り出して、そこに書かれていることをぱつと見て確認し、

「さて、行こうか」

それで用事は済んだとばかりに先へ行こうとする。

「私には、お店のヒトとかみ合わない会話して、ただ“焼き菓子・オヤキさん”を買ったようにしか見えないんですけど？」

チクリと抗議するようなアリエスの言葉に、

「……ん？」

リムティッシュは意をくみ取れないようすで小首をかしげ、

「アリエス、キミは“口入屋ノくちいれや”がどのようなモノか知っっているよな？」

確認するように訊く。

「短期的な仕事と人材の斡旋業　知ってますよ、それくらい」

アリエスはムツとして答える。

「では、利用したことは？」

あらかじめ言うつと決めていたかのように、再びの問いかけはするりと滑らかにリムティッシュの口から発せられた。



ちよいちよい小バカにされているように思えてならないアリエスは  
もちろんそれは多感な年頃がゆえの考え過ぎでしかないのだが  
語気を強めて返答してやるうと空気をたらふく肺に吸い込み、  
「それは」

当然あるに決まっていますっ！

「……ないですけど」

しかし素直に本当の事を述べる。

「そうか」

リムティツシュは得心したふうに相槌を打ってから、

「口入屋／＼くちいれや」はな、私の知っているかぎり、皆が皆“  
焼き菓子・オヤキさん”を売っていているんだ」

シヨツピングのお得情報を教えるような口調で言う。

「聞いたことがないから、果たしてどちらが本業で副業なのか知らないが、“焼き菓子・オヤキさん”の焼ける甘くて美味しい香りでしたら、ほぼ間違いなくそこは“口入屋／＼くちいれや”だから、もし“口入屋／＼くちいれや”を利用したいことがあったら、“焼き菓子・オヤキさん”の香りをたよりに場所を探すといいぞ」

リムティツシュは二人へ目配せして、太鼓判をおすようにうなずいてみせる。

「それは、ご親切にどうも」

テキトウなお礼を述べつつ、アリエスは手にある“焼き菓子・オヤキさん”をつまんで口に運ぶ。つまんで食べるお菓子というものには不思議な魔力があるもので、一口食べてしまうと、たちまち“つまんで口に運ぶ手”は疲れ知らずの働き者へと豹変し　まあ、食べ始めると“やめられない止まらない”。

「で、だ。さっき私が“口入屋／＼くちいれや”とかみ合わない会話をしていた、と言っていたがな、実際はそれなりに意味の通じ合う話をしていただぞ、『港街ウラガアへ向かうのだが、なにか仕事はないか？』『荷物を届ける仕事ならありますよ』『よし、では引き受けよう』というぐあいにな」

というリムティッシュの説明を聞いて、

「それは……アリエスが使っていた“商人言葉”のような、隠語のようなモノで？」

「いったいどこら辺でそのような会話がなされていたのか、ゲヴラーには見当がつかなかった。」

「いや、あそこまで専門的なモノではないよ」

言ってリムティッシュは、

「なんとなく、ニュアンスでわからないか？ 私と“口入屋／くちいれや”の会話を聞いてみて？」

しかし明確な答えは教えてくれない。

なのでゲヴラーは、説明の際にリムティッシュが話していた会話の意味と、先ほど彼女らが交わっていた会話の内容を思い出しつつ“思考／比較”してみる。

会話の際に言われた、

『これから港街ウラガアへ向かうのだが……なにか“美味しい話”はあるか？』には、

『港街ウラガアへ向かうのだが、なにか仕事はないか？』という意があり、

それに対して言われた、

『ええ、そりやあもう、あっしの焼く“焼き菓子・オヤキさん”はご近所でも“美味しい”と評判でして、いまじゃあその評判たるや港街ウラガアにも届こうってなもんですよ』というセリフには、

『荷物を届ける仕事ならありますよ』という意が込められており、

そしてリムティッシュが言った、

『そうか、そんなに“美味しい”なら食べるのが楽しみだ』という返答には、

『よし、では引き受けよう』という意があったという。

意味をわかって比べてみると、

「ん、ん？ ああ、んー」

ハッキリとまではいかないが、

「なんとまあ、わかる……ような気は、する……かも」

言わんとすることは、そこはかたなくゲヴラーにも察せられた。

「なんとなくわかれば十分だ」

初めてのおつかいを遂行できた子どもを褒める母親のような、自らも満足しているふうな微笑みを浮かべてリムティッシュは言い、そして

「私もなんとなくしかわかっていない」

なんの前フリもなく衝撃的な告白をする。

「えっ？」

彼女の言葉をうまく飲み込めなかったゲヴラーは、

「……と、それはどういう？」

噛み砕いた感じの解説を求めた。

「どういう、と訊かれてもな……言葉通りの意味だよ」

読書が趣味のリムティッシュをして飲み込みやすくは言い難いようだ。

「“商人言葉”のように、きっちりとした“カタチノルール”のあるモノではなくてな、臨機応変に、その場の“なんとなく”でやり取りしているんだよ　なるべく主題と関連付くような単語を除いた会話でな」

「どうしてそんな、情報伝達に誤りをまねきかねない面倒なことをするんですか？」

パクパクと“焼き菓子・オヤキさん”にパクつきながら、アリエスは意図がわからないと眉根を寄せる。

「“もしも”のとき、シラを切れるようにさ」

紙袋からひとつ“焼き菓子・オヤキさん”をつまみ出して口に運び、それを味わってから、リムティッシュは言う。

「仕事の中には、必ずしも健全とは言えないモノも含まれているからな。その非健全な仕事によってトラブルに巻き込まれる可能性は大いにある。それに、いつけんまともを装って、そのじつ非常にやこしい問題を内包している仕事もあったりする。そういう仕事が

もたらず歓迎せざる状況に、“もしも”巻き込まれてしまった場合、なるべく自分は無関係だと装えるよう、可能な限り足跡を残さないようにしているんだよ。紹介する側も、される側も、お互いに、な  
「なるほど」

と感心したふうなゲヴラーとは対照的に、

「ふーん……」

さして感心したふうもなく、アリエスは軽く話を流して、

「……ところで」

しかし重要と思われる疑問を問う。

「荷物を届ける仕事を引き受けた　　って言うておきながら、その届けるべき荷物を受け取っていないのは、どうしてなんですかね？」

「ん？　これから取りに行くんだよ」

「こ・れ・か・らあ？」

不服という感情を隠そうともせず、アリエスは抗議するように鋭い眼差しを向ける。

とつとと港街ウラガアへ行って、ゲヴラーの記憶喪失に何がしかの関与が疑われる“黒い鎧の海賊”について情報収集を開始したいアリエスである。なるだけ“早く/速く”行動したいと気が焦っている彼女からしたら、それも当然な反応であった。

「安心してくれ、向かう方向は一緒だから」

そう言うてリムティッシュは、事実を保証するように、先ほど紙袋から取り出して見ていた紙片を差し出す。

アリエスは訝りつつ、それを受け取り、そこに書かれている内容を確認する。

評判の“美味しい品”は、太陽が昇り来る門の“預かり所”にあり。“誇り高く黙する鍵の番人”への挨拶は“れいちく・十三番のらりるれろ”である。忘れることなく礼を尽くすべし。

「……………」

アリエスは難問に直面した人の顔になって、もちえる脳みそをフル回転させ　　そして、ある解答を導き出す。

「意味がわかりません」

「さっきの会話よりは具体的だと思っただがな」

リムティッシュは残念そうに苦笑みを浮かべる。

「評判の“美味しい品”っていうのが」

アリエスの手元にある紙片を読み、一緒になって脳みそをフル回転させていたゲヴラーが発言した。

「運ぶ荷物の中で、太陽が昇り来る門っていうのは、つまり太陽が昇って来る東の方角にある門ってこと……だよ、たぶん」

「おっ、飲み込みが速いな」

よくできた生徒を褒める学び舎の教師のように、リムティッシュは「正解だ」と喜ばしそうに微笑む。

そこしか、わからなかつたけど、と遠慮がちに、ゲヴラーは薄っすら照れ笑いを浮かべる。

「すごいねっ！」

少々喰い気味に言っつて、

「さすがゲヴラーだよっ！」

アリエスはその金色の瞳に“尊敬／敬愛／盲目的な心”の色をキラキラと輝かせ、圧倒的称賛の念がこもった無垢なる眼差しを上目づかにゲヴラーへと“送心した／送った”。

それを真っ向から“受心した／受け取った”ゲヴラーは、

「う、うん」

気圧されたふうになんぞ引きつつ、

「ありがとう」

ちよつと困り気味な微笑を浮かべる。

【序】第四章：六節　　〈始まりの終わり〉

百聞は一見にしかず。

というわけで、一行はロートワール国首都の東門前へと到着した。

見上げるほど大きな鋼製の門は開放されており、そのおかげで旅人や商人とそれにともなう物資の流れは止めどなく活発に行き交っている。それはまさに、交易で栄えるロートワール国の“血流/生命線”とも言うべき流れであった。ゆえに開かれた門の両側には二名ずつ斧槍を携えた軽防具の番兵が配置され、万が一にも祖国が貧血に陥らぬよう厳粛な姿勢で監視をおこなっている。

そんな場景に対して、リムティッシュは向かって右側へ視線をやり、

「あれが“預かり所”だ」

門の脇にある“簡素な木造建築/門番詰め所”　の影にひっそ

りと在る、木で作られた長方形の物体を示した。

高さは平均的な大人の身長ほどで、横幅も平均的な大人が両手をいっぱいに広げたくらい、厚さは平均的な大人の肩幅ほど。一番から五十番までの番号がそれぞれ書かれた扉のように開閉できる仕組みの四角形が等間隔に連なって、前面にマス目模様を描いている。

「ひっそりし過ぎて」

いままで存在に気づかなかった　とアリエスは言い、

「設置場所を知っていると、けっこう便利なんですよね」

とくに意識したふうもなく、世間話をするような流れで、彼女は同意を求めるようにリムティッシュを見やった。

「ん？」

リムティッシュは不思議そうな顔をして、

「ああ、そうか」

しかしすぐに合点がいつたらしい。

「商いを知っているんだから、“預かり所”も知っていて当然か」  
なぜか小さく隠すように呟かれた、その言葉に、

「ええ、まあ……」

アリエスは不満を押し殺して応じた。“預かり所”はそんなに特殊なモノではない。たとえ使ったことはなくとも、それがどういうモノであるかは、だいたいのヒトが“普通に”認知している。それなのに知っていることが意外とでも言いたげな態度をされては、アリエスでなくとも誰だって面白くないだろう。

「使い方はわかるか？」

ケンカを売っているとしか思えない、そんなリムティッシュの問いに

当たり前でしょっ！

抗議の怒鳴りをくれてやろうとして、

「物を収納できる　　っていうのは、なんとなくわかるんだけど」  
しかしアリエスは真横から申し訳なさそうに発せられた、

「……使い方は、その、よくわからなくて」

という言葉に、

「え？」

我が耳を疑い、呆然とした面持ちで“その人”を見上げた。

申し訳なさそうに、悲しそうに、困ったふうに、頼りなさげな儂い微笑を浮かべているゲヴラーを。

リムティッシュの問いかけは、彼に対するものだった。そして、  
そうがゆえに

記憶喪失　　という彼の現状が、認め難い事実が、実感が、

「……………」

不気味なほど静かに、けれど泣きたくなるくらいの生々しさでアリエスを襲った。

だが現実というものは、誰かの感情などおかまいなしに“ただそこにあり”流動するモノで。

「これといって、複雑なことはない」

変化のない平静な態度でリムティッシュは言い、

「“預かり所”の管理者に使用料を支払って、鍵を借りる。そして荷物を預ける」

基本はそれだけだ　と説明してから、

「当然のように」  
と付け加える。

「ナマモノ／生き物”は御法度だぞ。あと、鍵が掛けられなくなるような許容量を超えも禁止されている」

リムティッシュは「わかったか？」とつかがつのように視線を投げ、  
「うん」

聞き分けのよい優等生がごとくゲヴラーはうなずいて応えた。

「よし」

相手の理解を承認するように小さくうなずき返し、

「あ」

リムティッシュは思い出したように、

「すまん、大事なことを言い忘れていた」

と詫びつつ、とても重要な人物を紹介する。

「彼が“預かり所”の管理者　“誇り高く黙する鍵の番人”だ」

その人物は、頭の前から足の先まで全身をあますことなく赤銅色の甲冑で固め、鞘に納まった剣を地に突き立てるがごとく身体の前に置き、直立不動の姿勢で“預かり所”の隣に黙して居た。

「通称／総称”は“キーマン／鍵を握る人”　その意味すると

ころは、まあ文字通りだな」

そんなリムティッシュの紹介を受けて、

「どうも」

ゲヴラーは簡素な挨拶をするのだが、

「……………」

彼の者は黙したまま微動だせず。

「……………」



相手からの反応を待つゲヴラーと、

「……………」  
黙する“キーマン/鍵を握る人”が、時を止めたがごとく向かい合うことしばし……しばし………しばし、

「すまん、もうひとつ言い忘れていたことがある」

睨めつこに負けたがごとき笑いを含ませつつ、リムティッシュは告げる。

「黙し動じず が“彼ら/キーマン”の基本的でな。なにがあつても絶対に“喋らない/呼びかけに応じない”んだよ」

それを聞いてゲヴラーは、

「え、あ、そうなんだ……………」

どうしてだかこっ恥ずかしそうに所在無く視線をさまよわす。

「鍵の受け渡し以外で“彼ら/キーマン”が動くことがあるとすれば、“預かり所”と自身の安全が脅かされた場合の防衛に限られていてな、普段はまさしく直立不動なんだ」

だから とリムティッシュは、まるでとびきりの秘密をこっそり教えるふうに声をひそめ、

「そのじつ“彼ら/キーマン”はヒトではなく、魔術によって生み出された自動人形なのではないかと言われている」

「えっ？」

ゲヴラーは驚いたふうに“キーマン/鍵を握る人”を見やり、探るように凝視する。

そんな素直過ぎる反応を見せてくれる彼に、意図せずして柔らかな微笑みをこぼしつつ、リムティッシュは手品のネタばらしをする口調で「まあ、真偽の程は」と付け加えた。

「いまだ確認できた者が現れていないから、古今をとおして“ロマンある未確認”のままだがな」

不思議や疑問に対して、ただならぬ好奇心と探求心を燃やすのが子どもという生き物で。当然だがこのご近所にも元気に生息している。そんな彼らが、あきらかに面白い謎のカタマリである“キーマ

ン／鍵を握る人”に興味を懐かないわけがなく。真相解明への挑戦は幾度となく試みられてきた。しかし、その飽くなき好奇心と探求心を持つてしても、いまだ真相に辿り着けた者は居らず。この“キーマン／鍵を握る人”に関する“ロマンある未確認”は、主に子どもらが何世代にもわたり継承し挑み続けている“謎”なのだ。

「そうなんだあ」

ゲヴラーはしげしげと興味ありげな色を瞳に灯し、

「あれ？ ……でも」

と、喉に魚の小骨が引つかかったがごとく眉根を寄せて、

「さっきの紙には、“キーマン／鍵を握る人”への挨拶を忘れるな  
って書いてあつたような……？」

湧いてきた疑問を口にする。

自動人形と言われるほど絶対無反応な相手に、あえて挨拶をしると書き記されていた意図が、いまのゲヴラーにはわからなかった。

「鍵の受け渡し以外では黙して直立不動　なら、鍵の受け渡しでは？」

そう言うとりムティッシュは“キーマン／鍵を握る人”へ歩み寄り、件の紙片に書かれていた“れいちく・十三番のらりるる”という挨拶を述べた。

すると一瞬の間をおいて、いままで置物然としていた“キーマン／鍵を握る人”が動きを見せる。右腰の辺りに吊っているキーホルダーから、ひとつ鍵を抜き出して、しかし無言のままそれをリムティッシュに差し出す。

「ありがとう」

リムティッシュが礼と述べて鍵を受け取ると、“キーマン／鍵を握る人”はまたも置物然とした直立不動の体勢に戻り　以後、再び動く気配は感じられない。

「彼ら／キーマン”への挨拶とは、鍵の受け渡しに用いる合言葉のことなんだ」

とりムティッシュは受け取った鍵を示し、

「荷物を預けて鍵を掛けたあと、その鍵を合言葉と一緒に“キーマン／鍵を握る人”へ渡す　そうすることで、鍵を紛失してしまうリスクを心配しなくてすむし、“口入屋／くちいれや”のような仲介はさんで合言葉を伝えれば、面識のない第三者と対面することなく物の受け渡しをすることが可能になる」

その手にある鍵で、“預かり所”の十四番と書かれた扉を開く。中には、梱包された小包と三つ折りされた紙片が入っていた。

それらを“預かり所”から取り出して、リムティッシュは紙片にざっと目を通す。そこには港街ウラガアに到着してからの行動指示と報酬の受け渡しに関する記述があった。

「いますぐにやるべきことは書かれていない。」

「よし」

リムティッシュは小包と紙片をゲヴラーの背負っているバックパックに収納し、ついでに彼が持ちっぱなしの缶詰もバックパックの中へしまっ。

「では、行こうか」

一行は港街ウラガアへと歩みを進める。

【序】第四章：七節　　～始まりの終わり～

3

ロートワール国首都へと続く石畳の商業街道を、道行く人々への配慮に欠ける速度でその馬車は駆けていた。車体は高級感のある艶やかな漆黒で、その側面には金細工で“十三本の矢をくちばしにくわえ、ひとつのリングを右足でつかみ、悠然と翼を広げている一羽の白頭鷲”の姿が刻まれている。

それは国旗にも権威の象徴として刻まれている、アメル合衆国の象徴だった。

毛並みのよい四頭の馬車馬が鼻息を荒くして引くこの馬車は、アメル合衆国政府高官専用の馬車であり、それゆえに移動するアメル合衆国領地なのである。

たとえ道行く人をはねても、この馬車それ自体が“アメル合衆国領地／治外法権”なので、他国の法によって拘束されることもなければ罰せられることもない。

あえて道行く人々へ配慮して、この馬車が移動速度を犠牲にする理由はなかった。

容赦なく駆ける、そんな馬車の車内にて。

せわしなく流れてゆく窓から見える景色を、うんざりしたふうに黒の短い髪をした小柄な女性は眺めていた。いいかげん窓の外を眺めるのにもあきた彼女は、自然な動作で身を包む漆黒の燕尾服の内胸ポケットからシガレットケースを取り出すと、そこから一本抜き出して口にくわえ　　たところで、

「……………」

どうやら手持ちの火種が尽きているらしいことに気がつき、思わず不満と苛立ちの混じった深い溜め息が漏れる。

「これを〜いい機会に〜、禁煙してみたらあ？ リベラちゃん？」  
リベラと呼ばれた燕尾服姿の小柄な女性にとっては非常に耳障りかつ腹立たしい、現状において神経をさかなでする以外の効果をもたらさない甘ったるい声が、愛煙家にとってはストレスの要因にしかならない正しい提案をしてきた。

その声の持ち主は、申し訳程度に存在を示す乳房の下に横一文字、喉下から下腹部まで縦一文字の、十字傷をわざと強調し見せているようなデザインの服に身を包み、ブロンドの髪をツインテイルにした少女のような姿で、リベラの対面の座席に座っている。

「タバコはあ、身体にとっても有害なんだよお？ 肺を〜どす黒い紫色に変えちゃうくらい〜」

そんな公共的正論を述べる存在に、

「大きな御世話　　という言葉を知っていますか？　　ザ・メディック」

ありつたけの嫌悪の念を込めてリベラは言う。

「もあ〜、心配したげてるのに〜」

ブロンドの髪をツインテイルにした少女のような姿の　　ザ・メディックと呼ばれた存在は、なにがそんなに楽しいのかキャツキヤとはしゃぎながら、右手の人差し指と中指を立てると、それを自身の肩口に当て、まるでマツチを擦るようにスツと動かす。すると、まるで手品がごとくその指先に小さな炎がともった。

ザ・メディックは、その炎でリベラが口にくわえたままのタバコに火をつけると、

「喫煙はあ、ほどほどにねえ〜」

そう言って、右手を握るようにならしてともっていた炎を消す。

「名前を“着火マンノ火をともしトノ火種”に変えたらどうですか」

まったく感謝の念も称賛の響きもこもっていない声で言い、リベラは溜め息と一緒に紫煙を吐く。

「あはっ、とおおってもイイ〜ネエーミングセンスウーしてるねえ

っ、リベラちゃん！」

心の底から気に入ったのか、ザ・メディックはパチパチと拍手を打って笑い声を上げる。

と、車内にモンモンと息苦しく充満する紫煙の中から、ぬつと伸びてきた手が、リベラの口にある火のついたタバコをむんずとつかみ奪い取った。そのまま握り潰すようにしてその火を消す。ジユツと水分が蒸発するような小さく短い音がした。

リベラは苛立ちを隠さない鋭利な眼差しを、その手の主へ向ける。肩まであるストレートの黒髪に、血の気を感じない白い小さな面立ち。首から下の、早熟なふくらみを備える細やかな肢体を、肌と一体化したようなフィット感のある漆黒の光沢と艶をもつ液体とも固体とも言い難いモノで禁欲的に覆い隠している。美しいが冷たい、まるで影のような、どこか作り物めいた女の姿で、タバコの火を消した存在はザ・メディックの隣に座っていた。

「なにをするんですか、ザ・パペッター」

そんなリベラの抗議に対して、しかしザ・パペッターと呼ばれた存在は言葉を返すことはなく。代わりに、切れ長の目にある蒼い瞳で「不満がある」と述べる。

「あー、そーいえばあ〜」

と、ザ・メディックは思い出したように言う。

「身体に悪いからあ、タバコが嫌いだったねえ〜、アシュたん」

ザ・パペッターは“アシュたん”という呼びかたを嫌がるように眉をしかめつつも、言われた内容に関しては力強く首肯して「まったく、その通りである」との意を示す。

「まさか健康を気にしていたとは思いませんでしたよ」

死を知らぬ怪物のくせに　とは、口には出さず。リベラは自然なくらいわざとらしく意外そうな表情を作って驚く。

「まあ、ボクらにとつての好き嫌いなんてえ〜、“アイデンティティー／個性”を演出する為の“趣向／嗜好”でしかないからあ〜、ホントーはあ、健康なんてえ、関係ないんだけどねえ〜」

ザ・メディックの軽いノリもあいまって、その言葉を聞いた瞬間にリベラの苛立ちは最高潮に達した。実際は好きでも嫌いでもないのに、あえて好きないし嫌いを装い、好きないし嫌いであるという“アイデンティティー／個性”を演出する。そんな“くだらない／どうでもいい”ことの為に、自らの“至福の一本”はだいなしにされたのか、と。

怒りとも似た苛立ちが、沸々と胸の内で煮えたぎる。リベラはそれを物理的なモノに変換して目前に座る存在たちへぶつきたい衝動に駆られたが、しかし、いまの彼女に、“ノーバディー”である彼女に、それを実行する“権限／権利”はなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1027c/>

---

Farce of the Creators

2011年11月16日22時31分発行